財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第34集

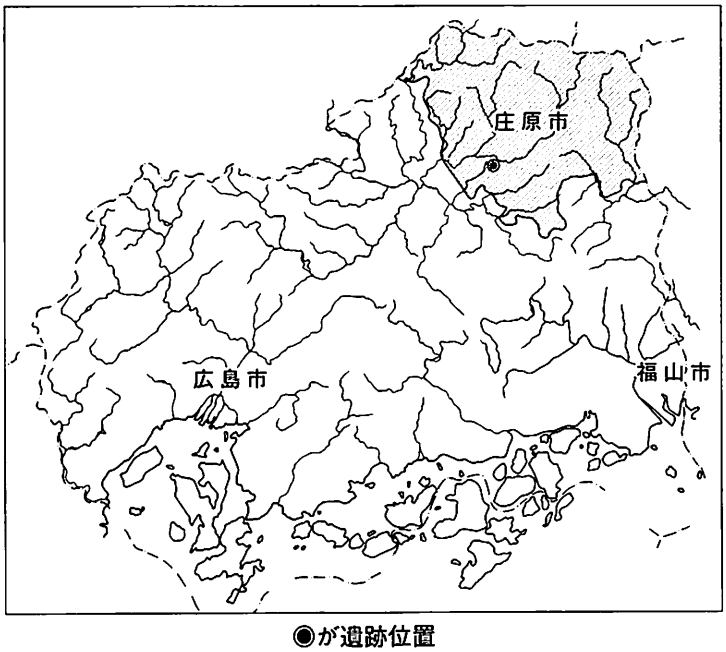
浅谷山西古墳・浅谷山１号遺跡・小深遺跡

国営備北丘陵公園整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１０

財団法人　広島県教育事業団

浅谷山西古墳・浅谷山１号遺跡・小深遺跡



◉が遺跡位置

２０１０

財団法人　広島県教育事業団

例　言

1　本書は平成16（2004)年度と平成17(2005）年度に調査を実施した国営備北丘陵公園整備事業に伴う，浅谷山西古墳･浅谷山１号遺跡（庄原市七塚町大字浅谷山所在），小深遺跡（庄原市上原町大字小深所在）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は国土交通省中国地方整備局国営備北丘陵公園事務所との委託契約により，財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。

3　発掘調査は次の者が担当した。

浅谷山西古墳　　伊藤　実（現：広島県立歴史民俗資料館），山田　繁樹，辻　満久

浅谷山１号遺跡　　伊藤　実，辻　満久

小深遺跡　　辻　満久，唐口　勉三（現：広島県教育委員会）

4　出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は辻　満久が中心となって行った。

5　本書は辻が執筆・編集した。

6　本書で使用した遺構の表示記号は次のとおりである。

ＳＢ：竪穴住居跡・掘立柱建物跡，ＳＫ：土坑，ＳＸ：性格不明遺構

7　出土遺物は原則として土器類は１／３，鉄製品・石器は１／２である。また土器の断面は，須恵器は黒塗り，そのほかは白抜きとした。

8　図版と挿図の遺物番号は同一である。

9　本書に使用した北方位は平面直角座標第Ⅲ座標系北である。

10　第１図は国土交通省国土地理院発行の1：25000の地形図（永田・庄原・三良坂・稲草）である。

目　次

1　はじめに……（1）

2　位置と環境……（2）

3　調査の遺跡……（7）
　1　浅谷山西古墳……（9）
　2　浅谷山１号遺跡……(27)
　3　小深遺跡……(61)

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図（1：25000）……（３）
第２図　浅谷山西古墳・浅谷山１号遺跡周辺地形図（1：1000）……(10)
第３図　浅谷山西古墳地形測量図（上）・墳丘測量図（下）（1：200）……(11)
第４図　浅谷山西古墳墳丘断面図（1：80）……(12)
第５図　浅谷山西古墳石室実測図（1：80）……(13)
第６図　浅谷山西古墳周溝内遺物出土状況実測図（1：20）……(14)
第７図　浅谷山西古墳石列実測図（1：40）……(14)
第８図　浅谷山西古墳出土遺物実測図（１）（1：3，1：6）……(16)
第９図　浅谷山西古墳出土遺物実測図（２）（1：3）……(18)
第10図　浅谷山西古墳出土遺物実測図（３）（1：2）……(21)
第11図　浅谷山１号遺跡遺構配置図（1：400）……(28)
第12図　浅谷山１号遺跡ＳＢ１実測図（1：60）……(29)
第13図　浅谷山１号遺跡ＳＢ２実測図（1：60）……(30)
第14図　浅谷山１号遺跡ＳＢ３実測図（1：60）……(31)
第15図　浅谷山１号遺跡ＳＢ４実測図（1：60）……(32)
第16図　浅谷山１号遺跡ＳＢ５・ＳＢ６・ＳＸ４実測図（1：60）……(33)
第17図　浅谷山１号遺跡ＳＢ７実測図（1：60）……(34)
第18図　浅谷山１号遺跡ＳＢ８・ＳＢ10実測図（1：60）……(35)
第19図　浅谷山１号遺跡ＳＢ９実測図（1：60）……(36)
第20図　浅谷山１号遺跡ＳＫ１実測図（1：20）……(37)
第21図　浅谷山１号遺跡ＳＫ２・ＳＫ５実測図（1：40）……(38)
第22図　浅谷山１号遺跡ＳＫ３・ＳＫ４実測図（1：40）……(39)
第23図　浅谷山１号遺跡ＳＸ１・ＳＸ２・ＳＸ５実測図（１：60）……(40)
第24図　浅谷山１号遺跡ＳＸ３実測図（１：20）……(41)
第25図　浅谷山１号遺跡ＳＸ６実測図（１：40）……(42)
第26図　浅谷山１号遺跡出土遺物実測図（１）（1：3）……(44)
第27図　浅谷山１号遺跡出土遺物実測図（２）（1：3）……(47)
第28図　浅谷山１号遺跡出土遺物実測図（３）（1：3）……(49)
第29図　浅谷山１号遺跡出土遺物実測図（４）（1：3）……(51)

第30図　浅谷山１号遺跡出土遺物実測図（５）（1：3，1：6）……(53)
第31図　浅谷山１号遺跡出土遺物実測図（６）（1：2）……(55)
第32図　小深遺跡周辺地形図（1：1000）……(62)
第33図　小深遺跡遺構配置図（1：200）……(63～64)
第34図　小深遺跡ＳＢ１実測図（1：60）……(65)
第35図　小深遺跡ＳＢ２・ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ５実測図（1：60）……(67)
第36図　小深遺跡ＳＢ６実測図（1：60）……(68)
第37図　小深遺跡ＳＫ１・ＳＫ２・ＳＸ３実測図（1：40，1：60）……(70)
第38図　小深遺跡ＳＸ１・ＳＸ２実測図（1：60）……(71)
第39図　小深遺跡出土遺物実測図（１）（1：3）……(73)
第40図　小深遺跡出土遺物実測図（２）（1：3）……(75)
第41図　小深遺跡出土遺物実測図（３）（1：2，37・38は実大）……(75)

図　版　目　次

浅谷山西古墳

図版１　a　墳丘検出状況（南から）
　　b　調査風景（西から）
　　c　土層断（南から）
図版２　a　石室全景（南から）
　　b　周溝内遺物出土状況（北から）
　　c　石室掘方（南から）
図版３　浅谷山西古墳出土遺物（１）
図版４　浅谷山西古墳出土遺物（２）
図版５　浅谷山西古墳出土遺物（３）

浅谷山１号遺跡

図版６　a　調査前全景（南から）
　　b　南半部全景（北西から）
　　c　北半部全景（南西から）
図版７　a　ＳＢ１土層断面（南西から）
　　b　ＳＢ１（南西から）
　　c　ＳＢ２（南から）
図版８　a　ＳＢ３（南西から）
　　b　ＳＢ４土層断面（南から）
　　c　ＳＢ４調査風景（南西から）
図版９　a　ＳＢ４完掘（北西から）
　　b　ＳＢ５・ＳＢ６・ＳＸ４（南西から）
　　c　ＳＢ７（南西から）
図版10　a　ＳＢ８（南西から）
　　b　ＳＢ９（西から）
　　c　ＳＢ10（西から）
図版11　a　ＳＫ１検出状況（南西から）
　　b　ＳＫ１（南西から）
　　c　ＳＫ１床面（南西から）

図版12　a　ＳＫ１完掘（南西から）
b　ＳＫ２（南から）
c　ＳＫ５（北西から）
図版13　a　ＳＫ３土層断面（南西から）
b　ＳＫ３（南西から）
c　ＳＫ４土層断面（北東から）
d　ＳＫ４（北東から）
e　ＳＸ１（北西から）
図版14　a　ＳＸ３検出状況（南から）
b　ＳＸ３完掘（南から）
c　ＳＸ６（南から）
図版15　a　ＳＢ３遺物出土状況
b　ＳＢ４遺物出土状況
c　ＳＢ５遺物出土状況
d　調査風景
e　現地説明会風景
f　現地説明会風景
図版16　浅谷山１号遺跡出土遺物（１）
図版17　浅谷山１号遺跡出土遺物（２）
図版18　浅谷山１号遺跡出土遺物（３）
図版19　浅谷山１号遺跡出土遺物（４）
図版20　浅谷山１号遺跡出土遺物（５）

小深遺跡

図版21　a　遠景（南から）
b　Ａ区東半部全景（西から）
c　Ａ区西半部全景（東から）
図版22　a　Ｂ区東側全景（東から）
b　Ｂ区中央部全景（西から）
c　Ｂ区西側全景（西から）
図版23　a　Ｂ区西側全景（東から）
b　Ｃ区全景（西から）
c　ＳＢ１土層断面（東から）
図版24　a　ＳＢ１土層断面（南から）
b　ＳＢ１完掘（南から）
c　ＳＢ１完掘（東から）
図版25　a　ＳＢ２（南から）
b　ＳＢ３（南から）
c　ＳＢ４（南から）
図版26　a　ＳＢ５（南から）
b　ＳＢ６土層断面（東から）
c　ＳＢ６土層断面（南から）
図版27　a　ＳＢ６完掘（東から）
b　ＳＢ６完掘（南から）
c　ＳＢ６完掘（西から）
図版28　a　ＳＫ１（南から）
b　ＳＫ２土層断面（東から）
c　ＳＫ２（南から）
図版29　a　ＳＸ１・ＳＸ２（南西から）
b　ＳＸ１・ＳＸ２（南東から）
c　ＳＸ３（南から）
図版30　小深遺跡出土遺物（１）
図版31　小深遺跡出土遺物（２）

表　目　次

第１表　浅谷山西古墳出土遺物観察表……(23, 24)
第２表　浅谷山西古墳出土遺物計測表……(24)
第３表　浅谷山１号遺跡出土遺物観察表……(57, 58)
第４表　小深遺跡出土遺物観察表……(76)

1　はじめに

国営備北丘陵公園は中国地方全域から利用できるように，中国地方のほぼ中央に位置する広島県庄原市の森と湖（国兼池）に囲まれた緑豊かな自然の中で「ふるさと・遊び」をテーマとして昭和57（1982）年4月から公園づくりを進めている。

平成15（2003）年からは平成19（2007）年までの5年間に，公園内の国兼池や広大な樹林地帯等の自然資源を生かして，1公園のメインゲートとなる新たな入り口の整備，2国兼池湖畔を周遊できる散策路の整備，3多様な体験活動の場の提供，4地域と連携したイベントの実施，5周辺観光施設との連携による広域的な利用促進と地域活性化の5つを重点事業として整備・管理運営を進めてきた。今回報告する3遺跡（浅谷山西古墳，浅谷山1号遺跡，小深遺跡）はこれらの事業に伴って発掘調査を実施したものである。

建設省中国地方建設局国営備北丘陵公園工事事務所（現国土交通省中国地方整備局国営備北丘陵公園事務所）は，昭和61（1986）年11月及び昭和63（1988）年5月に国営備北丘陵公園整備区域309ha（湖水，ほ場などを除く）について，文化財等の有無及び取り扱いを広島県教育委員会（以下「県教委」という。）と協議した。県教委ではこれを受けて現地踏査を行い，昭和63（1988）年7月及び平成元（1989）年2月に古墳6基，古墓1基と試掘調査の必要な箇所が15カ所存在する旨を回答した。県教委はそれらの一部の試掘調査を実施し，平成9（1997）年6月に浅谷山西古墳，浅谷山1号遺跡をまた平成16（2004）年12月には小深遺跡の存在を確認した旨，国土交通省中国建設局備北丘陵公園事務所（平成13（2001）年に省庁統合により改名，以下「国交省」という。）に回答した。

これらの遺跡の取り扱いについて，県教委･庄原市教育委員会（以下「市教委」という。）は国交省と協議を重ねたが，現状保存は困難であるとの結論に達し，事前の発掘調査を実施して記録保存が必要である旨を国交省に通知した。これを受けて国交省はこれらの遺跡の発掘調査を財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室（以下「事業団」という。）に依頼した。国交省と事業団では浅谷山西古墳・浅谷山1号遺跡については平成16（2004）年6月11日付けで発掘調査の委託契約を締結し，事業団は同年8月23日～12月17日まで発掘調査を実施した。発掘調査中の11月27日には現地説明会を実施し，70名の参加があった。また，小深遺跡については翌平成17（2005）年4月1日付けで発掘調査の委託契約を締結し，事業団は5月16日～7月1日まで発掘調査を実施した。

本報告書は，以上のような経緯のもとに実施した発掘調査の成果をまとめたものである。今後の埋蔵文化財の資料として，また当地域の歴史を理解する手がかりの一つとして，少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査に当たっては，国土交通省中国地方整備局備北丘陵公園事務所，庄原市教育委員会及び地元の方々から多大なるご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

2　位置と環境

浅谷山１号遺跡，浅谷山西古墳は庄原市七塚町にそして小深遺跡は庄原市上原町に所在する。

庄原市は近年の合併によりその市域を著しく拡大しており，平成21（2009）年５月段階のデータでは1,246.60平方kmで全国８番目の面積を有する市となった。隣接する自治体も県内では三次市，府中市，神石高原町，北東部では鳥取県：日野郡日南町，北部では島根県：奥出雲町，飯南町，雲南市，東部では岡山県：新見市，高梁市と多岐に亘る。

ここでは合併以前の庄原市を旧庄原市と呼称し，現在の庄原市とは区別して記述する。

遺跡の所在する旧庄原市は中国脊梁山地の南側に展開する広義の三次盆地にあたり，旧市内のほぼ中央を江の川の支流である西城川が西流する。南側には南西方向に流れる国兼川沿いに狭小な平野部が存在する。更にこの平野部の南側には標高300～400ｍのなだらかな七塚原丘陵が広がっている。

今回調査した遺跡はこの七塚原丘陵の南西（小深遺跡）と南東（浅谷山西古墳・浅谷山１号遺跡）にあたり，谷間には国兼池や熊野池などのため池が点在している。今回報告する遺跡の周辺には弥生時代～古墳時代の集落跡や古墳群など多くの遺跡が確認されており，丘陵公園整備に係わってこれまでに浅谷山東Ａ地点遺跡，浅谷山東Ｂ地点遺跡，岡山Ａ地点遺跡，清水３号遺跡，清水６号遺跡，清水４号遺跡，宮山２号遺跡が調査されている。

周辺の遺跡の状況から概観していくことにする。

旧石器時代

旧庄原市では本格的な調査は実施されていないが，合併後に口和町向泉川平１号遺跡[1]，高野町只野原３号遺跡[2]で火山灰の良好な堆積が確認され，火山灰層の前後から石器が確認されている。旧庄原市でも，断片的な資料ではあるが大原１号遺跡[3]，小和田遺跡[4]，佐田谷墳墓群[5]で発見されている。

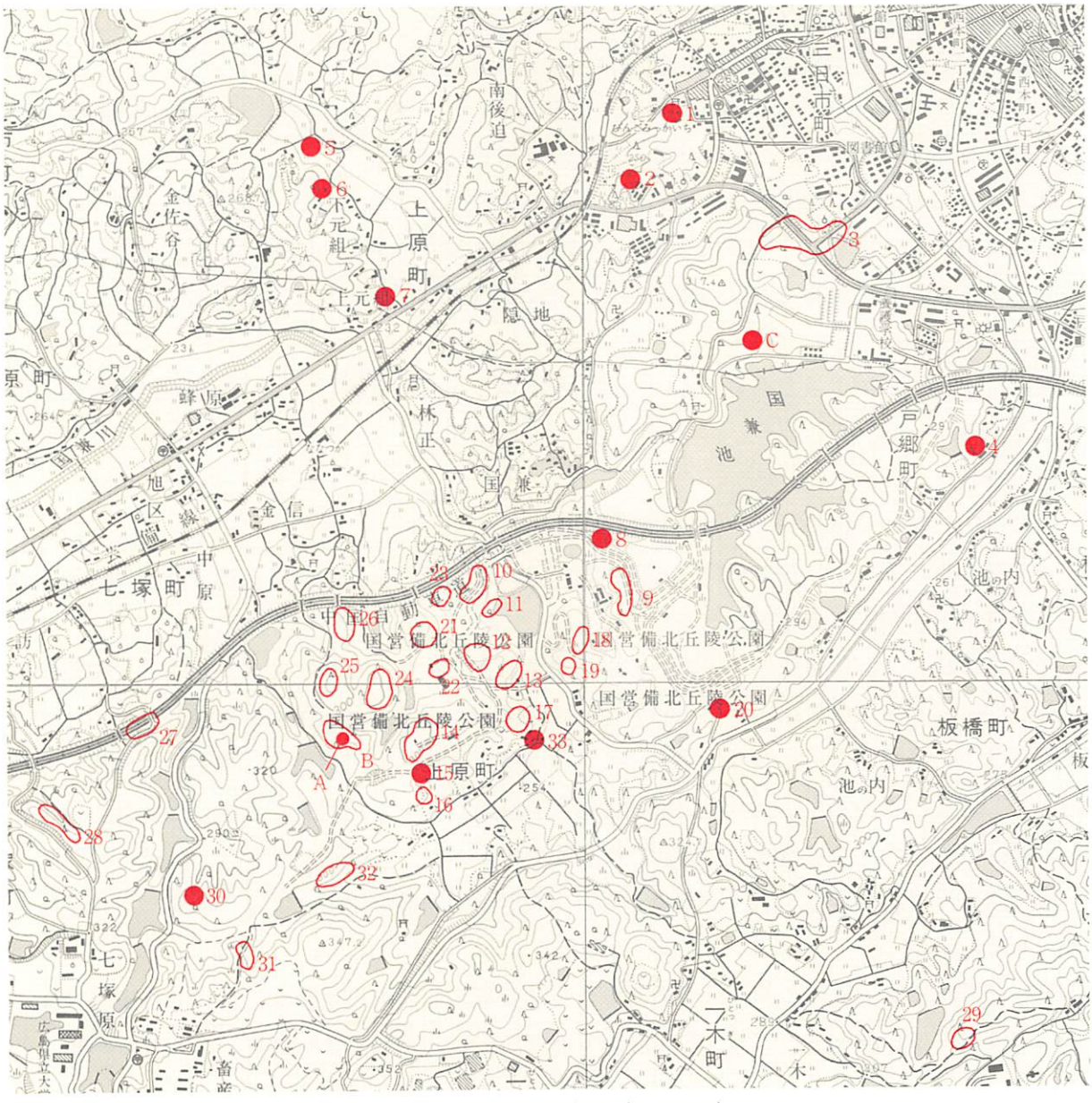
縄文時代

陽内遺跡[6]で，縄文時代早期の押形文土器や中期の土器，石鏃などの石器類，欠状耳飾りや骨製耳栓などの装飾品が発見されている。この他に和田原Ｄ地点遺跡[7]から草創期の有茎先頭器や早期の押型文土器と錐状石器，大原１号遺跡からは前期から中期にかけての鉢形土器が出土している。

弥生時代

前期の遺跡は少なく，岡山Ａ地点遺跡[8]のＳＢ１から前期前半の壺と甕が，西山遺跡[9]の土坑及びその周辺から甕形土器が，それぞれ出土している。

中期になると遺跡数は増加する。中期前半から中頃の遺跡には，和田原Ｃ地点遺跡[10]・Ｄ地点遺跡があり，分銅形土製品が出土している。中期後半になると，在地色が強くなり，塩町式土



第１図　周辺遺跡分布図（1：25000）

A　浅谷山西古墳　　**B　浅谷山１号遺跡**　　**C　小深遺跡**

1　小荒神古墳　　2　無常道古墳　　3　大成遺跡　　4　宮山２号遺跡　　5　塔ノ塚古墳

6　茶臼山古墳　　7　亀井尻瓦窯跡　　8　土地森遺跡　　9　土地森古墳群　　10　岡山Ａ地点遺跡

11　岡山Ｂ地点遺跡　　12　清水１号遺跡　　13　清水２号遺跡　　14　清水３号遺跡　　15　清水４号遺跡

16　清水５号遺跡　　17　清水６号遺跡　　18　北山Ａ地点遺跡　　19　北山Ｂ地点遺跡　　20　北山古墳

21　浅谷山東Ａ地点遺跡　　22　浅谷山東Ｂ地点遺跡　　23　浅谷山東Ｃ地点遺跡　　24　浅谷山古墳群

25　浅谷山２号遺跡　　26　浅谷山３号遺跡　　27　大唱山古墳群　　28　城山古墳群　　29　六條古墳群

30　渦田山北古墳　　31　渦田山南古墳群　　32　熊野清水山古墳群　　33　熊野遺跡

器や四隅突出型墳丘墓が登場する。

大原１号遺跡の竪穴住居跡，和田原遺跡[11]，隠地上組遺跡[12]のSB３・SB５・SK１，和田原Ｄ地点遺跡，竜王堂遺跡[13]からは塩町式土器が出土している。佐田谷墳墓群３号墓[14]は中期後半に造墓し後期初頭まで造営されたとされる四隅突出型墳丘墓である。

後期になると山陰の影響を受け始めたことをうかがわせる遺物を伴う遺跡が出現し，古墳時代初頭まで続くようである。西山遺跡，大唱山遺跡[15]，浅谷山Ａ地点遺跡[16]，妙見山遺跡[17]，和田原Ｄ地点遺跡からは山陰地方からの搬入品もしくは影響を強く受けたと思われる土器が出土している。

墳墓には田尻山第１号方形墓[18]，佐田谷墳墓群の第１・２号墓[19]があり，当該期の四隅突出型墳丘墓である。

古墳時代

古墳時代になると集落跡，古墳ともに増加する。

集落跡は前半期（４～５世紀代）と後半期（６～７世紀）に分かれる。前半期では竜王堂遺跡，永宗遺跡[20]，大成遺跡[21]などがある。

竜王堂遺跡では前期初頭の住居跡などが検出され，山陰系とともに畿内系の古式土師器が出土している。永宗遺跡では入り口と想定される張り出しを持つ住居跡が確認されている。大成遺跡では工作用ピットを持つ５世紀代の住居跡が検出され，砥石や鉄滓・鞴羽口片が出土していることから，鉄器製作に係わる工房的性格が指摘されている。同様の遺構は後半期の遺跡からも確認されており，本地域での集落の特徴的なあり方の一端を示していると言えるだろう。

後半期では境ヶ谷遺跡[22]，小和田遺跡[23]，浅谷山東Ｂ地点遺跡[24]，則清１・２号遺跡[25]，牛乗遺跡[26]などがある。

境ヶ谷遺跡では住居跡と共に鍛冶炉と考えられる鞴羽口や鉄滓が多量に出土した遺構が検出されている。小和田遺跡では第３号住居跡で熱変を受けた楕円形土坑が伴っており，鉄生産に係わる作業場的性格が考えられている。浅谷山東Ｂ地点遺跡では検出された住居跡の大半から鉄滓が出土しており，炉壁片も散見できたことなどから，集落内で鉄鉱石素材の精錬鍛冶を行ってきた可能性が指摘されている。則清１・２号遺跡は谷を挟さんで対峙する尾根上に形成された集落跡で，炉跡の焼け土に混入した鍛造剥片や砥石，使用痕を持つ礫などの存在から鉄生産に深く関わった集落で，各住居は機能別に特化した施設であると考えられている。牛乗遺跡では鞴羽口のほか，鉄滓などが住居跡から出土している。後期の集落跡も鉄生産と関わりのありそうな遺構や遺物を検出している。

古墳は1000基以上が確認されており，大型の前方後円墳の存在が旧庄原市域の古墳の特徴の一つである。旧寺第１号古墳[27]（全長61.7 m，後円部径39.3 m），甲山古墳[28]（全長59 m），矢崎古墳[29]（全長56 m），瓢山古墳[30]（全長41 m）などがある。また唐櫃古墳[31]は全長41.4 mを測り，県内最大級の石室（全長13.1 m，幅1.9～2.4 m，高さ2.4～2.6 m）内からは，耳環や金銅製鈴のほか，山梔形空玉などが出土した。

埋葬施設として横穴式石室採用する以前の前期古墳では，木棺・箱式石棺・竪穴式石室など竪穴系の多様な埋葬施設が見られる。木棺を埋葬施設とする古墳には御堂西古墳群[32]，大風呂古墳群[33]，発展第１・３号古墳[34]，大唱山第１・２・５号古墳[35]などがある。御堂西古墳群は４世紀末から５世紀の中頃，この他の古墳は５世紀後半から６世紀前半にかけて造営されたものである。箱式石棺を埋葬施設とする古墳は西が迫第 11・12・15 号古墳が，粘土槨を埋葬施設とする古墳には田尻山第 16 号古墳，月貞寺第 21 号古墳などがあり，５世紀後半に造営されている。月貞寺第 31 号古墳では小型の竪穴式石室２基を，同第 29 号古墳では簡素化した粘土槨３基を埋葬施設としており，５世紀後半から６世紀前半に造営されている。

横穴式石室を埋葬施設とする古墳は６世紀後半から一般化する。月貞寺第 28・32 号古墳[36]，矢野谷古墳[37]，流田山第２号古墳[38]，境ヶ谷第１号古墳[39]，同第３号古墳，大原第４号古墳[40]，篠津原第３号古墳[41]，国重第１号古墳[42]などがある。

月貞寺第 28・32 号古墳，矢野谷古墳，流田山第２号古墳は６世紀の後半頃の古墳で，境ヶ谷第１号古墳，同第３号古墳は７世紀の中頃の古墳である。そして，大原第４号古墳，篠津原第３号古墳，国重第１号古墳は終末期の古墳で，当地域における古墳時代終末の一端を窺う上で良好な資料となっている。特に篠津原第３号古墳の石室は精美な切石を使っており，畿内の影響が窺われる。

註

（１）未報告平成 20（2008）年に当調査室で発掘調査を実施した。
（２）未報告平成 21（2009）年に当調査室で発掘調査を実施した。
（３）広島県教育委員会「大原遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（１） 1978 年
（４）広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「小和田遺跡」『西山・小和田・永宗－国道 183 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』 1982 年
（５）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『佐田谷墳墓群』 1987 年
（６）庄原市教育委員会『陽内遺跡』 1999 年
（７）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『和田原Ｄ地点遺跡』 1999 年
（８）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『国営備北丘陵公園整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 1999 年
（９）広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「西山遺跡」『西山・小和田・永宗－国道 183 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』 1982 年
(10) 註（７）に同じ
(11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『和田原遺跡』 1988 年
(12) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『隠地上組遺跡』 1984 年
(13) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『竜王堂遺跡』 1994 年
(14) 註（５）に同じ
(15) 広島県教育委員会「大唱山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（１） 1978 年
(16) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『浅谷山東Ａ地点遺跡』 1990 年

(17) 庄原市教育委員会『妙見山遺跡』 1999年
(18) 広島県教育委員会「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1978年
(19) 註(5)に同じ
(20) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「永宗遺跡」『西山・小和田・永宗－国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』 1982年
(21) 大成遺跡調査団『庄原市大成遺跡の発掘調査』 1986年
(22) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『境ヶ谷遺跡群－庄原養鶏団地造成に係る埋蔵文化財の発掘調査－』 1983年
(23) 註(4)に同じ
(24) 註(8)に同じ
(25) 庄原市教育委員会『則清1・2号遺跡』 1993年
(26) 広島県教育委員会「牛乗遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1976年
(27) 広島大学考古学研究室『旧寺古墳群測量報告』 1983年
(28) 広島大学考古学研究室「庄原市甲山古墳測量報告・無事？！終了」『続トレンチ』第4巻第1号 1980年
(29) 広島大学考古学研究室「庄原市矢崎古墳測量実習略報」『続トレンチ』第6巻第4号 1986年
(30) 庄原市教育委員会『遺跡から見る庄原の歴史』 1999年
(31) 庄原市教育委員会『県史跡 唐櫃古墳』 1999年
(32) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『御堂西古墳群発掘調査報告』 1984年
(33) 広島県教育委員会『大風呂古墳発掘調査概報』 1976年
(34) 広島県教育委員会「発展古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1976年
(35) 註(15)に同じ
(36) 広島県教育委員会「月貞寺古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1976年
(37) 広島県立埋蔵文化財センター『矢野谷古墳』 1984年
(38) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『西ヶ迫古墳群』 1983年
(39) 註(22)に同じ
(40) 註(3)に同じ
(41) 広島県教育委員会「篠津原遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1976年
(42) 広島県教育委員会「国重第1号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1976年

3　調査の遺跡

1　浅谷山西古墳

2　浅谷山１号遺跡

3　小深遺跡

1　浅谷山西古墳

（1）立地と現状

浅谷山西古墳は広島県庄原市七塚町に所在する。

古墳の現状は鬱蒼とした山林内にあり，中央部に盗掘跡と思われる長楕円の陥没坑が見られた。この陥没坑の周辺には小さな礫が散乱していた。この状況から埋葬施設は横穴式石室であろうと推定した。また，古墳の北側には古墳を区画するような幅狭の溝が円弧状に巡っているのが観察でき，直径10ｍ・高さ１ｍ＋αの円墳であろうと思われた。

調査は現状観察で確認した古墳のほぼ中央部を起点として古墳の開口方向に沿って南北に土層観察用畦，この畦に直交して東西の土層観察用畦を各々設定した。これらの畦に沿って幅１ｍのトレンチを設定して，掘り下げを行った。古墳は土層観察に従って，墳丘の検出・石室の掘り下げ・石室床面の検出・掘方の確認を行った。諸般の事情から石室掘方は上面のみしか確認できなかった。

調査の結果，本古墳は直径11ｍ，高さ1.5ｍの円墳であると判明した。古墳の背後には半円状に幅２ｍ・深さ11ｍの断面逆台形の溝が巡っていた。

埋葬施設は横穴式石室と思われるが，現位置を保っていたのは左側石だけで，この他の石材はほとんどが石材の抜き取りにより消失している。また，右側石は北側が東側から西側へ南側が西側から東側へ石材のずれが確認できた。石材抜き取り中に何らかの理由により作業を中止したまま置かれたものと思われる。石室の規模については推定の域を出ないが幅1.5ｍ・長さ６ｍ程度であったと思われる。

床面は石材抜き取り時にかなり荒らされて，凸凹となって一定しない。遺物は石室内の埋土から出土しているが，いずれもも現位置を失っている。また古墳北東側の周溝内から須恵器甕（第８図27）が破砕された状態で出土した。

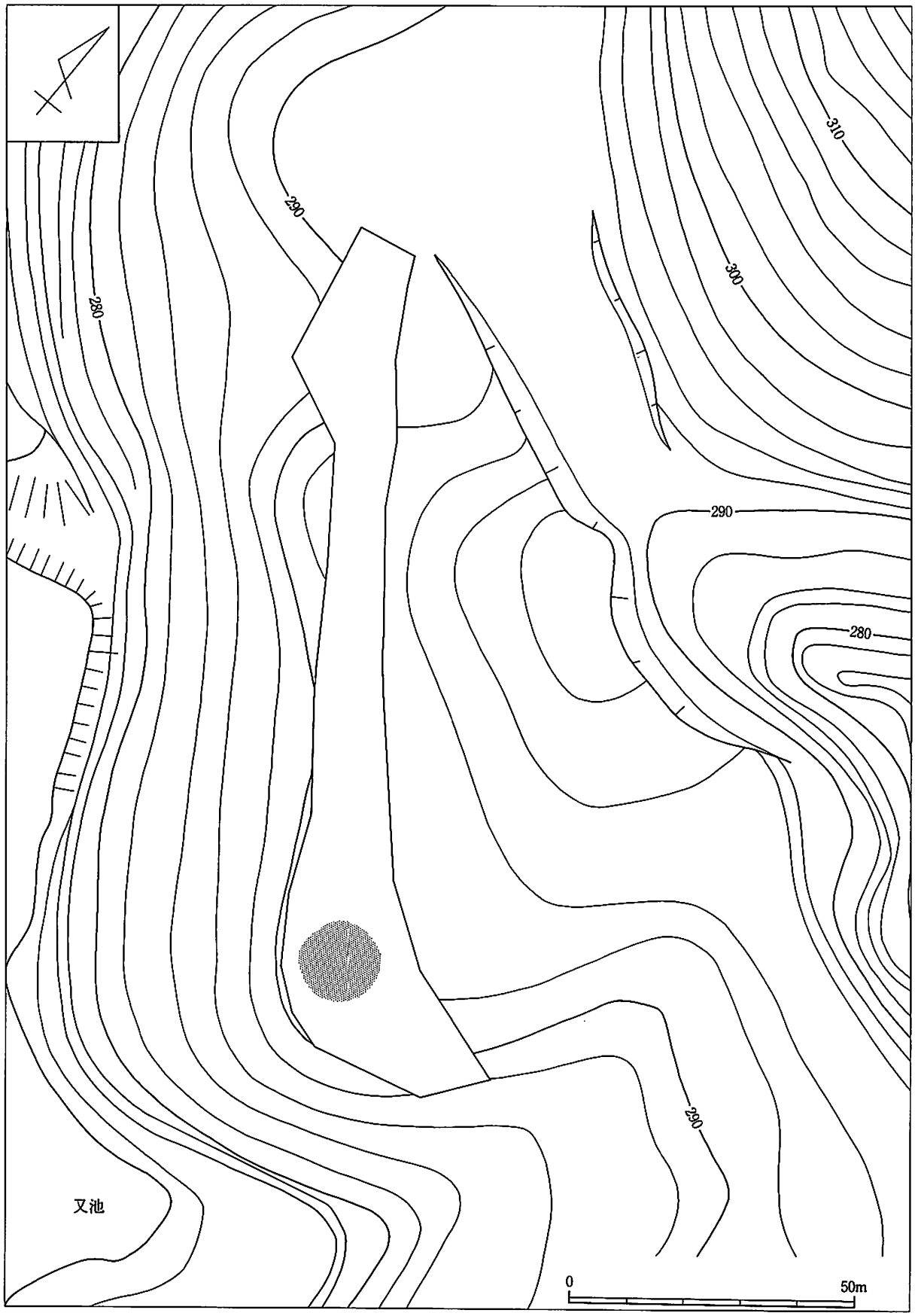
この他，後述する浅谷山１号遺跡ＳＸ６を破壊して，造られている。

（2）墳丘

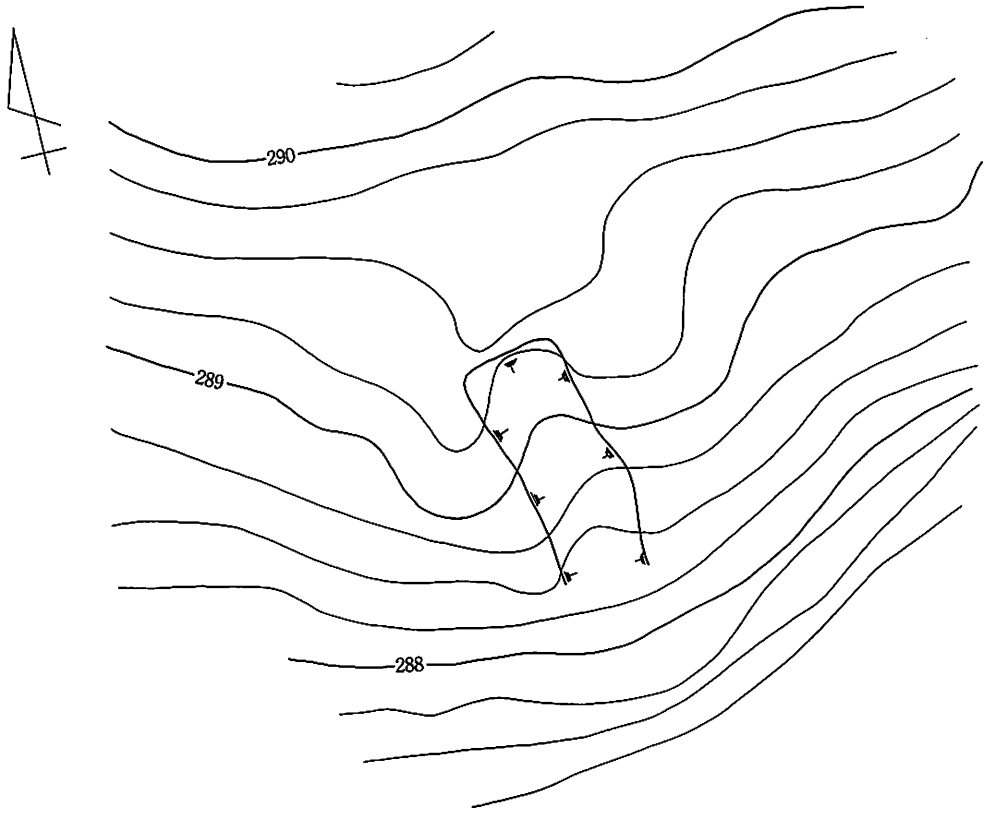
墳丘の構築は先ず北から南へ緩やかに下る丘陵斜面の高所（山側）を中心とした周溝の掘削と，削平による墳丘基底面の造成が行われる。

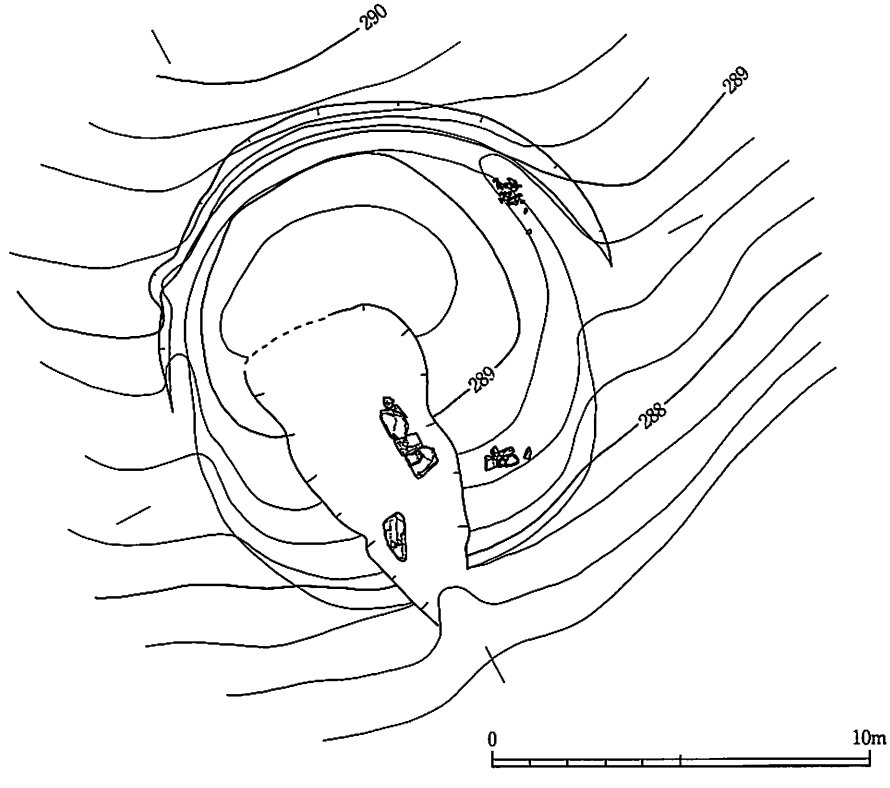
周溝は地形の傾斜に沿って削り出しており，標高285.5ｍの等高線付近から自然地形に移行して消滅する。周溝は概ね半円形となっている。周溝を含めた古墳の規模は南北約13ｍ，東西約12ｍである。周溝の幅は約２ｍ，深さは0.5ｍ，横断面形はほぼ逆台形である。周溝底面の最高所は墳丘北側で，0.5ｍの落差で石室前面側に緩やかに下っている。

周溝に囲まれた墳丘基底面はほぼ平坦に整地されているが，北東から南西にかけて緩やかに傾斜している。西側では旧表土思われる黒色土が観察できる。

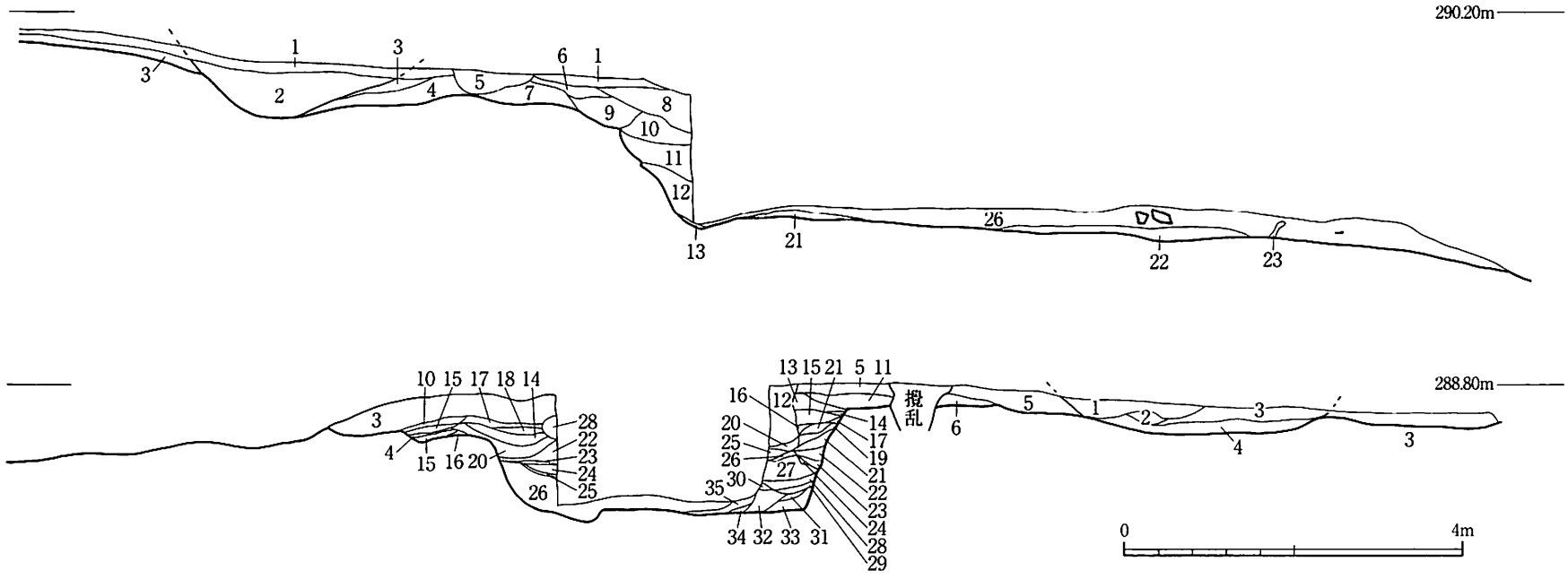


第２図　浅谷山西古墳・浅谷山１号遺跡周辺地形図（1：1000）アミ目は浅谷山西古墳





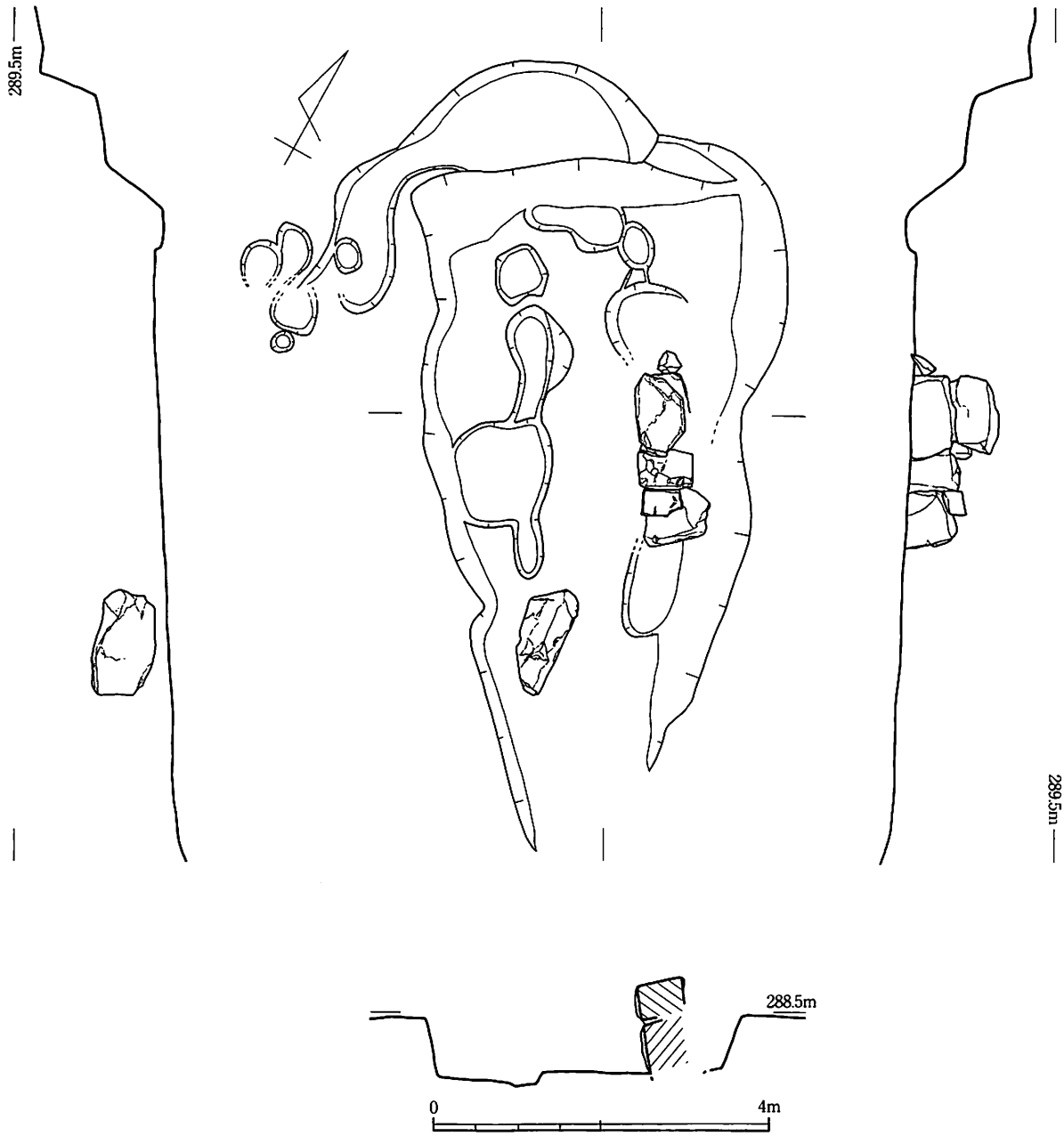
第３図　浅谷山西古墳地形測量図（上）・墳丘測量図（下）（１：200）



第4図　浅谷山西古墳墳丘断面図（1：80）

浅谷山西古墳　土層説明

1 灰黒色粘質土	8 暗茶褐色粘質土	15 淡茶褐色粘質土	22 黄褐色粘質土	29 明灰黒色粘質土
2 暗灰黒色粘質土	9 灰黒色粘質土	16 淡黄褐色粘質土	23 暗黄褐色粘質土	30 黄褐色粘質土
3 暗茶褐色粘質土	10 暗黄褐色粘質土	17 黄褐色粘質土	24 淡茶褐色粘質土	31 暗茶褐色粘質土
4 暗灰色粘質土	11 黄褐色粘質土	18 灰黒色粘質土	25 灰黒色粘質土	32 明黄褐色粘質土
5 濃灰黒色粘質土	12 明黄褐色粘質土	19 明灰黒色粘質土	26 淡茶褐色粘質土	33 暗黄褐色粘質土
6 淡灰黒色粘質土	13 暗灰色粘質土	20 暗茶褐色粘質土	27 暗茶褐色粘質土	34 明黄褐色粘質土
7 暗灰色粘質土	14 淡黄褐色粘質土	21 暗灰黒色粘質土	28 黄褐色粘質土	35 暗茶褐色粘質土

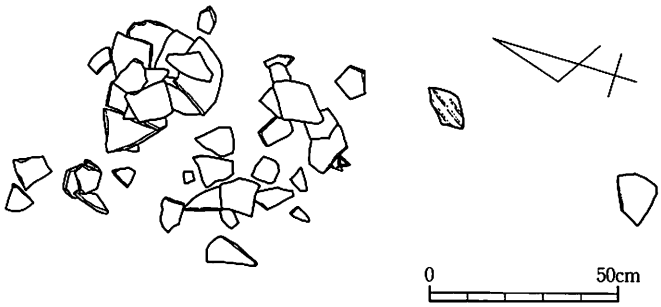


第5図　浅谷山西古墳石室実測図（1：80）

盛り土はこの墳丘基底面上に行われている。しかしながら，本古墳の場合は盛り土の一部が石室内の石材抜き取りにより不明な部分がある。現状では石室内に石材を固定する石室掘方の裏込め作業と石室天井部の被覆に伴う墳形に調整作業を確認できる。天井石被覆後の最終的な墳形を整える作業は確認できなかった。

石室掘方の裏込め作業は，黄褐色土と黒褐色土を厚さ 10 ～ 20cm で交互に叩き締めるもので，床面から 1.2 m まで行われている。この作業が終了した後は，側石の構築に合わせておおまかな墳形を整えつつ側壁上端まで盛り土をしたと思われるが，側壁端がないので不明な部分もある。

天井の被覆に伴う盛り土が古墳の外縁部で確認できる。叩き締めも弱く，比較的厚い盛り土と



第6図　浅谷山西古墳周溝内遺物出土状況実測図（1：20）

なっている。石室の被覆と石室外縁部の墳形を整える作業が主であったのであろう。

周溝の東側から前述したように，須恵器甕が破砕されたように出土している。

（3）埋葬施設（第5図，図版2 a）

石材が抜かれているため詳細については不明な部分が多い。掘方と残存する石材の配置状況からすれば，無袖の横穴式石室を想定できる。主軸の方位はN13°　30′　Wで，ほぼ南に開口している。奥壁部分で幅1 m，奥壁から2 mで幅1.2 m，4 mで幅1 mとなって，若干胴張り気味の平面形といえよう。

わずかに残った左側（東側）の側石は基底石とその上一段分だけである。側石の残存範囲は長さ2.1 m，高さ1.1 mである。なお，右側（西側）の石材は基底面が時計方向に約20°ほど回転しているようで，現位置を失っている。

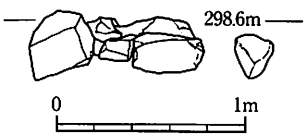
奥壁側の基底石は長方体の石材の横口部分を横長に使用している。その次の2枚の基底石の石材は横口部分を縦長に使用している。開口部に一番近い石材は立方体に近い石材を使用している。基底石の上端の高さは奥壁に近い石材とその次の石材は目地が整っているが，開口部分に近い石材では若干の乱れがある。この乱れがこの石室の羨道と玄室を区画する可能性も考えられる。

石室の床面は北から南にかけて若干傾斜しており，抜き取りに伴う床面の凹凸が認められる。遺物は埋土中から須恵器や土師器が出土している。

（4）石室掘方（第5図，図版2 c）

掘方は墳丘基底面のほぼ中央を断面形が逆台形になるように掘り込んでいる。深さは石室奥壁で1.5 mであるが，整地面の傾斜に沿って次第に浅くなり，奥壁から4 mのところで0.4 mとなっている。平面形は隅丸の長方形で，長さ8.2 m，幅は奥壁付近で4.2 m，羨道部付近（奥壁から7.6 m）で2 mである。

石室の基底石は掘方の壁面から0.5 m内側に配され，接地面を一段深く掘込んで石材の安定を図っている。また，掘方の中軸線からやや東側にずれて配されているようである。残存する石材と床面上での側石掘方の形状からからすれば，石室構築時に東側を起点としたと推測できる。



第7図　浅谷山西古墳石列実測図（1：40）

（5）　石列（第7図）

墳丘の南東側で長さ1.3 m，幅0.55 m，高さ0.3 mで方形ないしは長方形の礫を使用した石列を確認した。石列は南側の面を揃えているようであるが，その性格については不明である。

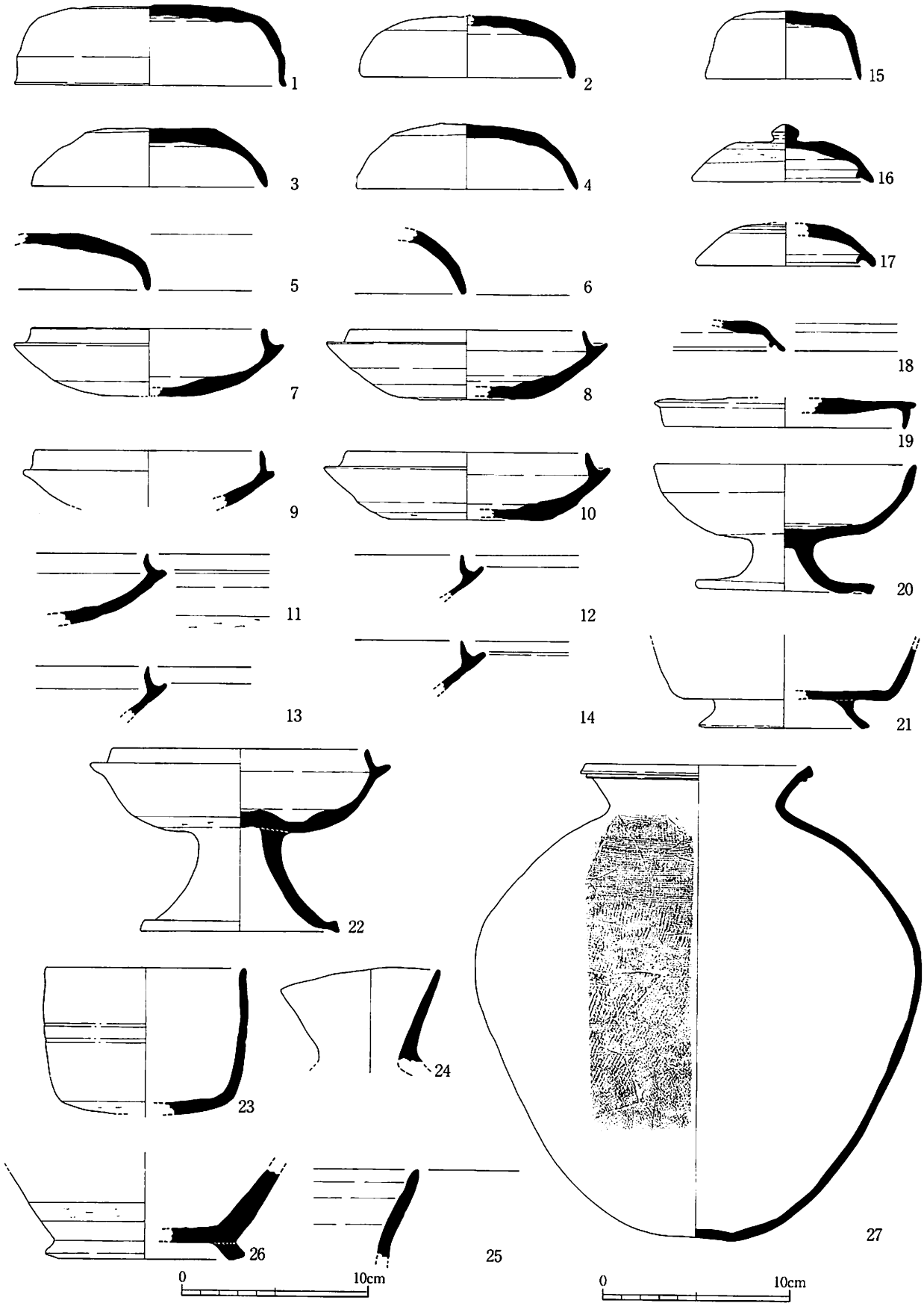
（6）出土遺物

出土遺物には須恵器・土師器・弥生土器・鉄製品・石製品がある。須恵器・土師器・鉄製品は石室内の堆積土，羨道部，周溝内および墳丘内から，弥生土器は墳丘内から出土している。

A　須恵器（第８図，図版３・４）

１～６は杯蓋である。１は復元口径 14.2cm，器高 4.3cm である。天井部はほぼ平坦で，体部は強く弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は外側に若干開きつつ丸くおさめる。調整は天井部の外面はヘラ切り，以下は回転ナデである。天井部内面中央部に定方向の仕上げナデを施す。２は復元口径 11.0cm，器高 3.3cm である。天井部はやや丸みを帯びており，体部は緩やかな弧を描きながら口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。調整は天井部はヘラ削り，以下は回転ナデである。天井部内面に定方向の仕上げナデを施している。３は復元口径 12.5cm，器高 3.1cm である。天井部は平坦気味で，体部は少し直線的に外側に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は若干尖り気味におさめている。天井部外面はヘラ切り，以下は回転ナデである。４は復元口径 11.6cm，器高 3.5cm である。天井部はやや丸みを帯びている。体部は緩やかな弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は若干尖り気味におさめている。天井部はヘラ切り，以下は回転ナデである。５は天井部から口縁部片である。天井部は平坦で，体部は直線的に緩く外側下方に延びて口縁部付近で強く屈曲して口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。天井部はヘラ切り，以下は回転ナデである。外面に緑色の自然釉が付いている。６は体部から口縁部片である。体部は緩やかな弧状を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。回転ナデである。

７～14 は杯身である。７は復元口径 12.2cm，復元受け部径 14.4cm，器高 3.6cm，受け部高 0.9cm である。底部は平坦で，体部は緩やかに上方に弧を描いて受け部にいたる。受け部は丸くおさめ，受け部からやや内傾気味に上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。底部外面はヘラ切り，体部からは回転ナデである。底部内面に定方向の仕上げナデを施す。８は復元口径 11.4cm，復元受け部径 15.0cm，器高 3.6cm，受け部高 0.8cm である。底部は平坦で，体部はまっすぐ外側上方に延びて受け部にいたる。受け部は少し尖り気味におさめている。受け部からやや内傾気味に上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。底部外面はヘラ削り，体部からは回転ナデである。底部に定方向のナデがある。９は復元口径 12.0cm，復元受け部径 13.4cm，受け部高 1.1cm である。体部は斜め外側上方にまっすぐ延びて受け部にいたる。受け部はやや角張気味におさめる。受け部からほぼ垂直に上方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめている。調整は回転ナデである。10 は復元口径 12.6cm，復元受け部径 15.2cm，器高 3.6cm，受け部高 0.9cm である。底部は平坦で，体部は斜め上方に直線的に延びて受け部にいたる。受け部は丸くおさめる。受け部からやや内傾気味に上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部はやや尖り気味におさめている。調整は底部外面はヘラ切り，体部からは回転ナデである。11 は底部付近から口縁部片である。体部は内側に緩やかな弧を描いて上方に延び受け部にいたる。受け部は少し尖り気味におさめている。受け部からやや

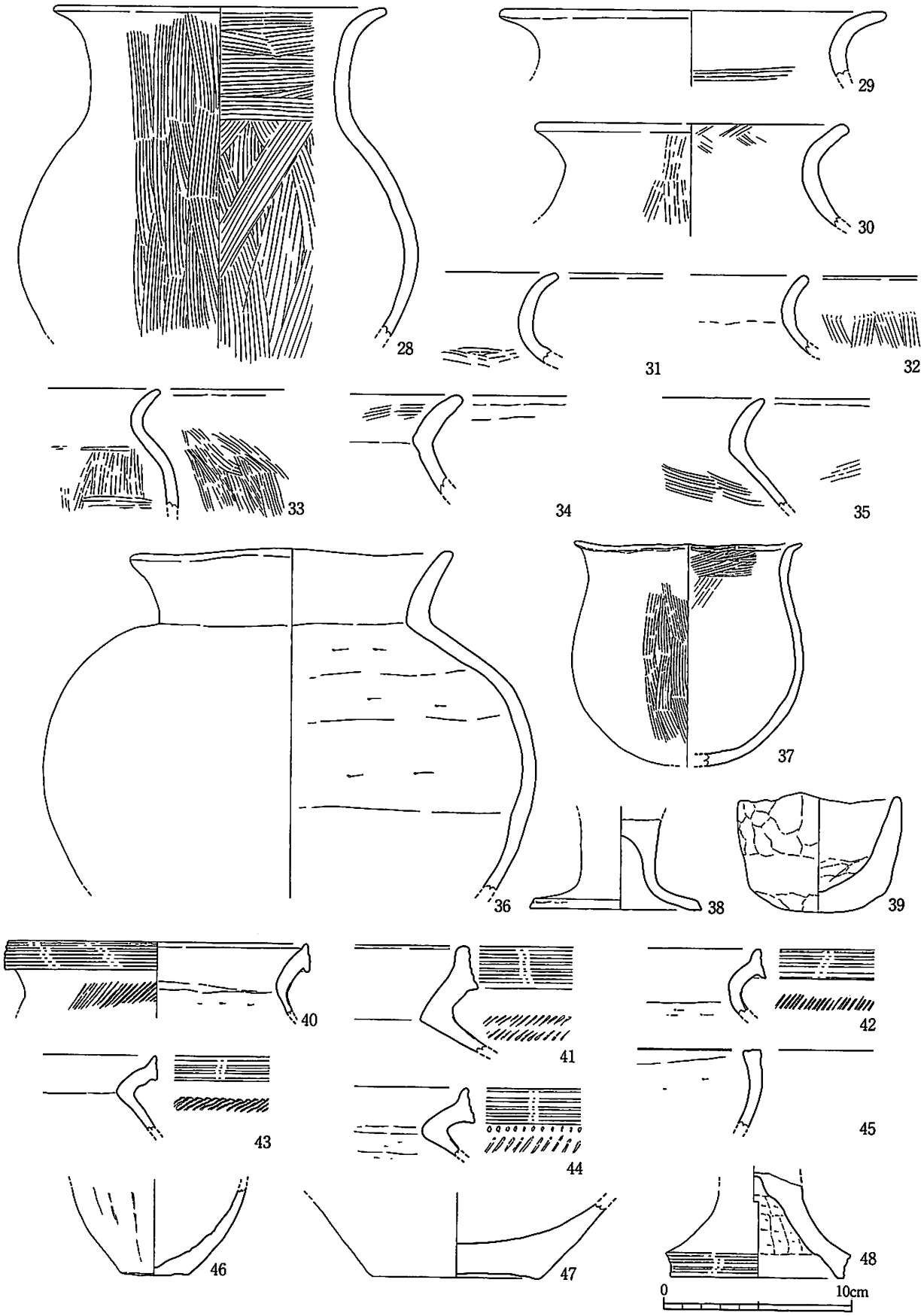


第8図　浅谷山西古墳出土遺物実測図（1）（1：3，1：6）

外湾気味に上方に短く弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめている。底部外面はヘラ切り，体部は回転ナデである。12 は口縁部である。受け部はやや尖り気味で，受け部からやや外湾気味に上方に短く弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。調整は回転ナデである。13 は口縁部片である。受け部はやや尖り気味におさめる。受け部からほぼ垂直に上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめている。調整は回転ナデである。14 は口縁端部である。体部は斜め上方に直線的に延びて受け部にいたる。受け部はやや角張気味におさめている。受け部からやや内傾気味に上方に短く延びて口縁端部にいたる。口縁端部はやや尖り気味におさめている。調整は回転ナデである。

15 ～ 19 は壺蓋である。15 は口径 9.3cm，器高 3.6cm である。天井部はほんの少し丸みを持ち体部は下方に強く屈曲し直線的に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめている。調整は天井部外面はヘラ切り，体部以下は回転ナデである。天井部中央に定方向のナデがある。16 は口径 9.5cm，器高 3.1cm である。天井部の中央に直径 1.4cm，高さ 1.0cm の宝珠形のつまみが付く。天井部は平らで，体部は緩やかな弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。口縁端部から 0.9cm 内側にかえりがある。かえりはやや尖り気味におさめている。調整はつまみは回転ナデ，天井部はヘラ削り後一部ナデ，体部は回転ナデである。天井部に定方向のナデが施されている。17 は復元口径 9.5cm，器高 2.3cm，復元反り部径 7.6cm である。天井部中央にナデた痕が存在するので，ここにつまみが付いていた可能性が高い。天井部は少し丸みを持ち，体部は緩やかな弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。反りは短く内側に弧を描き，端部を尖り気味におさめている。調整は天井部はヘラ削り後ナデで，体部は回転ナデである。天井部内面に定方向のナデがある。18 は天井部付近から口縁部片である。天井部は平らで，体部は斜め下方にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張気味におさめている。口縁端部から 0.3cm 上方に反りが付く。反りは内側に短く延びて，端部を丸くおさめている。調整は天井部付近はヘラ削り，体部以下は回転ナデである。19 は復元口径 12.6cm，器高 1.5cm である。天井部につまみが付くと思われる。全体に焼け歪みが激しい。天井部はほぼ平坦で，天井部端から内側へ 0.2cm の所にほぼ垂直に下方に延びる口縁部がある。口縁端部は丸くおさめている。調整は天井部の中央よりにヘラ削り，それ以下は回転ナデである。内面中央部に定方向のナデがある。

20 ～ 22 は高坏である。20 は完形品で，口径 13.8cm，脚径 9.2cm，脚柱径 3.2cm，器高 6.8cm である。脚部は端部がラッパ状に外側に強く開いて脚端部にいたる。脚端部は端面をなし，角張気味におさめている。坏部は底部がやや丸みを持ち，体部は斜め上方に内湾気味の弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。脚柱部内面に絞りの痕があり，その上から回転ナデをしている。坏部内面中央には定方向のナデがある。21 は復元脚径 9.1cm，脚高 1.5cm である。低脚の高坏である。脚部は坏底部の中央からほぼ 2/3 の所にハ字形に斜め下方に延びて脚端部にいたる。脚端部は角張気味におさめている。坏部は底部は平坦で，体部は強く上方に屈曲し直線的に立ち上がって口縁端部に至ると思われる。調整は回転ナデである。坏部内面中央に定方



第9図　浅谷山西古墳出土遺物実測図（2）（1：3）

向のナデがある。22は有蓋高坏である。復元口径13.5cm，復元受け部径16.0cm，復元脚径10.4cm，器高9.7cmである。脚部は脚柱部から外側斜め下方に緩やかに外湾しつつ脚端部にいたる。脚端部は平坦な端面をなし，端部をやや丸くおさめている。坏部は底部はやや丸みを持ち，体部は斜め上方に緩やかに弧を描きながら受け部にいたる。受け部は外上方に短く延びて端部を丸くおさめている。口縁部は受け部からやや内傾気味に上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。坏底部外面にヘラ削りの痕が残る。全体は回転ナデで，坏部中央に定方向のナデがある。

23は椀である。復元口径10.4cm，器高6.8cmである。体部中央に沈線が二条走る。底部はやや丸みを帯び，体部は底部から強く内側に屈曲してほぼ垂直に上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。底部外面はヘラ削り，体部からは回転ナデである。底部内面中央に定方向のナデがある。

24～26は壺である。24は口縁部である。口径は8.4cmである。形状等から堤瓶もしくは平瓶の口縁部と思われる。やや外側に開き気味に上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。調整は回転ナデである。焼け歪みがある。25は口縁部片である。やや急角度で斜め上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は若干尖り気味におさめている。調整は回転ナデである。26は底部である。高台が付く。復元底径は10.6cm，高台高は0.9cmである。高台は底部端から外側に斜め下方に短く延び，角張った端部は端面となっている。底部は平らで，体部は斜め上方に立ち上がる。調整は回転ナデで，体部外面の一部にヘラ削りの痕が残っている。

27は甕である。口径24.0cm，胴部径49.0cm，器高50.4cmである。底部は歪むが，概ね丸底である。胴部は最大部が中央部より若干高い位置に来る倒卵形をなしており，頸部はくの字に外側に屈曲して口縁端部にいたる。口縁部直下に一条の細い断面三角形の凸帯を巡らせる。口縁部は外側にわずかに肥厚して，端面を持つ。口縁端部は尖り気味におさめている。調整は底部および胴部外面は平行叩きをしたあと，横方向のカキメを巡らせる。口縁部は回転ナデである。底部及び胴部内面は同心円叩きである。

B　土師器（第9図，図版3・4・5）

29～37は甕である。29は口縁部で，復元口径20.6cmである。外湾しつつ外側上方に延びる。口縁端部は丸くおさめている。調整は口縁部外面はヨコナデ，頸部内面付近はハケメである。30は頸部から口縁部である。復元口径は16.0cmである。くの字に緩く外反しつつ上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。外面はハケメ後ナデ，口縁部内面端部付近はハケメ，以下はヨコナデである。口縁部外面端部付近にはススが付着する。31は頸部上半～口縁部片である。くの字に緩く外反しつつ上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。外面及び口縁部内面は調整が不明である。頸部内面付近はハケメである。32は頸部上半～口縁部片である。くの字に緩く外反しつつ上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。外面は下半がハケメ，口縁部上半はヨコナデ，内面下半はナデである。外面にススが付着す

る。33は胴部中位から口縁部片である。胴部中位からやや内傾しながら緩く弧を描いて頸部にいたる。頸部はく字形に屈曲してやや外傾しつつ口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。外面は胴部が縦方向のハケメ，頸部から口縁部はヨコナデ，内面は口縁部がヨコナデ，頸部から胴部はハケメである。胴部中位付近及び口縁端部の外面にススが付着している。34は頸部から口縁部片である。頸部はくの字に屈曲して外上方に延びる。口縁端部はやや角張気味におさめている。外面はヨコナデ，内面は口縁部が横方向のハケメをした後ナデ，頸部はヨコナデである。内面頸部境に稜が走る。35は頸部から口縁部片である。頸部はくの字に屈曲して上方にやや開き気味に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。遺存状況は不良であるが，外面の一部と頸部内面にハケメが認められる。36は胴部下半から口縁部である。復元口径は16.2cm，復元頸部径15.2cm，復元胴部径26.0cmである。胴部はやや横長の楕円形である。頸部はく字形に屈折し，外側上方に少しだけ開き気味にまっすぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。遺存状況が不良であるが，胴部内面にヘラ削りを確認できる。胴部外面中位から下半にかけてススが付着する。37は復元口径12.0cm，器高11.9cmである。底部は丸底と思われる。胴部は洋なし型で最大径が器高より若干下に位置する。胴部と頸部の境は不明瞭で，頸部から外反しつつわずかに外側に開いて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめている。外面は底部周辺はナデ，胴部下半から頸部にかけては縦方向のハケメ，口縁部はヨコナデある。内面は口縁部は横方向のハケメ，以下はヨコナデある。口縁部外面にススが付着する。

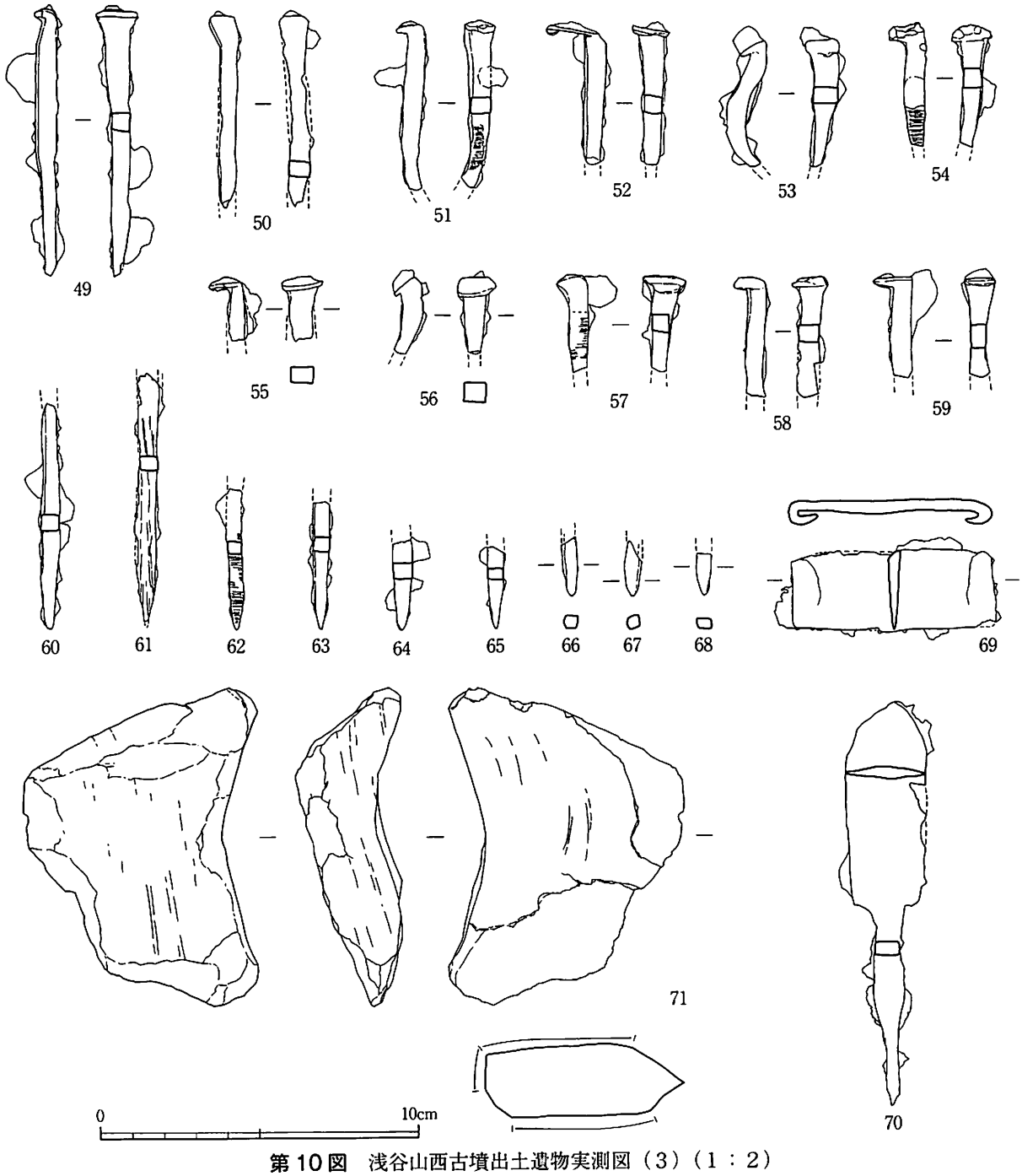
38は高坏である。脚部で，復元脚径8.6cm，復元脚柱径3.9cmである。脚柱部はほぼ垂直で，ラッパ状に大きく外側に開いて脚端部にいたる。脚端部は平坦な端面を持つ。遺存状況が不良のため調整等は不明である。

39は手捏土器である。復元口径8.0cm，器高6.2cmである。底部は若干丸みを帯び，体部はほぼ垂直に若干外側に開き気味に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。器表面に手ひねりの痕が残っている。

C　弥生土器（第９図，図版４・５）

28は壺の胴部下半から口縁部で，復元口径17.4cm，復元胴部径21.2cmである。胴部は球胴形で頸部の屈曲は弱い。頸部から垂直に上方に延びて終端間近で外側に強く開いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。外面は縦方向のハケメ，内面は口縁部から頸部が横方向のハケメ，胴部は概ね縦方向のハケメである。胴部と口縁部にススが付着している。

40～44は甕である。40は頸部から口縁部で，復元口径は15.8cmである。頸部は緩くくの字に屈曲して，口縁部を上下に拡張している。口縁には四条の幅の狭い凹線が巡る。頸部には斜め方向に連続刺突文が施されている。外面はヨコナデ，口縁部内面はヨコナデ，頸部はヘラ削り後ヨコナデを施す。41は頸部から口縁部片である。頸部はくの字に屈折する。口縁部は外側に肥厚し，上方に拡張されて，上面に端面を持つ。口縁部外面に幅の狭い凹線が５条巡る。また，頸部には連続刺突文が２段巡る。口縁部はヨコナデ，頸部内面は不明である。42は頸部から口縁部片であ



第10図　浅谷山西古墳出土遺物実測図（3）（1：2）

る。頸部は強く屈曲して，口縁部にいたる。口縁部は上方に拡張されている。この拡張部分に凹線が3条巡る。頸部には刺突文が巡る。口縁部はヨコナデ，頸部内面はヘラ削りである。外面にススが付着している。43は頸部から口縁部片である。頸部はくの字に強く屈曲する。口縁部は上方に拡張される。口縁端部に凹線が3条巡る。頸部にはハケメ工具によると思われる刺突文が巡っている。口縁部はヨコナデである。44は頸部から口縁部片である。頸部は強く屈曲して口縁部は外側に開き，上下端を拡張している。口縁部には凹線が四条巡る。頸部には刺突文が巡っている。

口縁部はヨコナデ，頸部内面はヘラ削りである。

45･48 は高坏である。45 は口縁部片である。体部はやや内傾しつつ緩やかな弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は端面を持つ。この端面に凹線が三条施されている。端部はいずれも角張っておさめている。外面はヨコナデで，内面はヘラ削り後ヨコナデである。なお，外面にススが付着している。48 は脚部である。脚径は 9.0cm である。脚柱部からハの字型に外側斜め下方に延びて脚端部にいたる。脚端部は内側にわずかにくぼむ端面となっている。この端面に凹線を三条巡らせる。外面はヨコナデ，脚柱部内面はヘラ削り，脚端部付近はヨコナデである。

46･47 は底部である。46 は底部から胴部下半で，復元底径 3.8cm である。平底である。胴部へは上方斜め外方へ弧を描いて延びている。外面は底部がナデ，胴部は板ナデ，内面はナデである。47 は底部から胴部下半である。復元底径は 9.0cm である。底部は若干くぼみ底となる。胴部は外側斜め上方へハの字型に緩やかに立ち上がる。内面は丸底となっている。外面は底部がナデ，胴部は不明，内面はナデである。底部は分厚く重量感がある。

D　鉄製品（第 10 図，図版５）

出土遺物には鉄釘，鉄鎌，鉄鏃がある。

鉄釘（49 ～ 68）いずれも断面が方形ないしは長方形のもので，頭部は丁字に芯に対して直行方向に折れている。これらの折れの厚みはいずれも薄い。芯の一部に木質の痕が存在するものがあるが，いずれも部分的で，木棺に使った木材の厚さやさらには組み合わせなどは判明しない。

鉄鎌（69）は両端部を曲げた穂摘み鎌である。刃部は概ね水平で，長さ 7.5cm，幅 2.6cm である。両端は刃部付近が窄まる袋状になっている。

鉄鏃（70）が一点出土している。いわゆる三角形鏃である。茎部は鏃身に近い部分が幅広で離れるに従って細くなる。茎部断面は長方形である。

E　石製品（第 10 図，図版５）

砥石（71）が墳丘内から出土している。三面をよく研磨している。携帯用の可能性もあろう。

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
1	須恵器	杯蓋	天井部～口縁部	復元口径142mm，器高43mm	淡青灰色	微砂粒を含む	普通	良い	2区北西，土器溜まり，墳丘内	
2	須恵器	杯蓋	天井部～口縁部	復元口径110mm，器高33mm	淡灰白色	砂粒を少し含む	やや不良	普通	4区渓道部	生焼けか
3	須恵器	杯蓋	底部～口縁部	復元口径125mm，器高31mm	淡青灰色	微砂粒を含む	やや不良	やや不良	4区渓道掘方，3区墳裾	
4	須恵器	杯蓋	底部～口縁部	復元口径116mm，器高35mm	淡黄褐色	砂粒を多く含む	普通	やや不良	3区石室攪乱	
5	須恵器	杯蓋	天井部～口縁部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	良好	良好	2区墳丘内，2区周溝内	
6	須恵器	杯蓋	口縁部		淡青灰色	砂粒を多く含む	良い	良い	2区墳丘内	
7	須恵器	杯身	底部～口縁部	復元口径122mm，器高36mm，復元受け部径144m，受け部高9mm	淡青白色	砂粒を少し含む	普通	普通	4区石室掘方，4区墳裾	
8	須恵器	杯身	底部～口縁部	復元口径111mm，器高36mm，復元受け部径150mm，受け部高8mm	淡緑青色	微砂粒を少し含む	良好	良好	1区墳丘外	外面に緑色自然釉付着
9	須恵器	杯身	体部～口縁部	復元口径120mm，復元受け部径134mm，受け部高11mm	淡青灰色	微砂粒を少し含む	良い	普通	1区墳丘内	
10	須恵器	杯身	底部～口縁部	復元口径126mm，器高36mm，復元受け部径152mm，受け部高9mm	淡青灰色	微砂粒を少し含む	普通	普通	3区墳丘盛り土内	
11	須恵器	杯身	体部～口縁部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	普通	4区南側斜面	
12	須恵器	杯身	口縁部		淡灰色	砂粒を割と多く含む	良い	普通	土器溜まり	
13	須恵器	杯身	口縁部		淡黄白色	微砂粒を少し含む	甘い	やや不良	4区掘方	生焼けか
14	須恵器	杯身	口縁部		淡青灰色	微砂粒を割と多く含む	普通	普通	3区墳裾（南）	
15	須恵器	杯蓋	天井部～口縁部	口径93mm，器高36mm	淡青灰色	砂粒を少し含む	やや良い	普通	4区渓道部	完形品
16	須恵器	杯蓋	天井部～口縁部	口径95mm，器高31mm，つまみ径14mm，つまみ高10mm	淡青灰色	砂粒を少し含む	普通	普通	3区石室攪乱	
17	須恵器	壺蓋	天井部～口縁部	復元口径95mm，復元反り径76mm，器高23mm	淡青灰色	微砂粒を少し含む	普通	普通	4区南西トレンチ，3区石室攪乱	
18	須恵器	壺蓋	天井部～口縁部		淡青灰色	微砂粒を少し含む	普通	普通	4区南西裾	
19	須恵器	壺蓋	天井部～口縁部	復元口径126mm，器高15＋αmm	青灰色	砂粒を割と多く含む	良好	良好	4区斜面，4区墳丘外	焼け歪みが激しい
20	須恵器	高坏	脚部～口縁部	口径138mm，脚径92mm，器高68mm	黄白色	砂粒を割と多く含む	やや甘い	やや不良	1区墳裾	
21	須恵器	高坏	底部～口縁部	復元脚径91mm，脚高15mm	黄白色	砂粒を少し含む	やや良い	普通	3区	
22	須恵器	高坏	脚部～口縁部	復元口径135mm，復元受け部径160mm，復元脚径104mm，器高97mm	淡黄灰色	微砂粒を少し含む	甘い	やや不良	1区，2区周溝内，2区墳丘内，3区墳丘盛り土内，4区東西トレンチ，北サブトレ	焼け歪みあり
23	須恵器	椀	底部～口縁部	復元口径104mm，器高68mm	黄白色	砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	4区渓道，3区渓道付近，3区石室攪乱	
24	須恵器	壺	口縁部	口径84mm	淡青灰色	砂粒を少し含む	普通	普通	石室内，4区渓道部付近	歪む
25	須恵器	壺	口縁部		淡青白色	微砂粒を少し含む	良い	普通	1区	
26	須恵器	壺	底部～体部下半	復元底部径106mm，高台高9mm	淡黄灰色	微砂粒を少し含む	普通	普通	2区北東	
27	須恵器	甕	底部～口縁部	口径240mm，胴部径490mm，器高504mm	淡青灰色	微砂粒を少し含む	普通	普通	2区周溝土器溜まり	
28	弥生土器	壺	胴部下半～口縁部	復元口径174mm，復元胴部径212mm	淡黄褐色	砂粒を割と多く含む	普通	良い	3区墳丘内	
29	土師器	甕	口縁部	復元口径206mm	黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	4区墳丘内	
30	土師器	甕	口縁部	復元口径160mm	淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	やや不良	1区墳丘内，北サブトレ	口縁部直下にススが付着している
31	土師器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	不良	3区墳丘盛り土内	
32	土師器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	やや不良	北サブトレンチ	外面にスス付着

第1表　浅谷山西古墳出土遺物観察表（1）

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
33	土師器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	普通	1区墳丘内	口縁部直下と胴部上半にスス付着
34	土師器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	普通	4区墳裾	
35	土師器	甕	胴部上半～口縁部		黄褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	1区墳丘内	
36	土師器	甕	胴部下半～口縁部	口径162mm，復元胴部径260mm	黄褐色	砂粒を割と多く含む	やや甘い	不良	3区盛り土内，盛り土内	外面胴部下半にスス付着
37	土師器	甕	底部～口縁部	復元口径120mm，器高119mm	黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	普通	3区盛り土内	外面スス付着
38	土師器	高坏	脚部	復元脚径86mm	淡黄褐色	砂粒を割と多く含む	やや甘い	不良	3区墳丘盛り土内	
39	土師器	手捏土器	底部～口縁部	復元口径80mm，器高62mm	黄褐色	微砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	3区	
40	弥生土器	甕	口縁部	復元口径158mm	黒褐色	砂粒を割と多く含む	良い	良い	3区東側裾	口縁部に擬凹線
41	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒を多く含む	普通	普通	3区東側裾	頸部に連続刺突文が巡る
42	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒を割と多く含む	普通	やや不良	3区墳裾（南）	外面にスス付着
43	弥生土器	甕	口縁部		黄白色	微砂粒を多く含む	普通	普通	3区墳丘内盛り土	
44	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒を割と多く含む	普通	やや不良	3区墳丘盛り土内	
45	弥生土器	高坏	体部～口縁部		淡黒褐色	微砂粒を少し含む	普通	普通	3区墳丘盛り土内	外面にスス付着
46	弥生土器		底部～胴部下半	底部径38mm	淡黄褐色	砂粒を割と多く含む	普通	普通	3区墳丘斜面	
47	弥生土器		底部	復元底径90mm	淡黄褐色	微砂粒を多く含む	普通	普通	3区東側裾	
48	弥生土器	高坏	脚部	脚径90mm	淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	3区東側裾	

※地区名は古墳の中央を起点に東西南北に4等分し，北西から時計回りに1～4区とした。

第1表　浅谷山西古墳出土遺物観察表（2）

遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点	備考
49	鉄釘	85	6	5	8.42	3区床周辺羨道	ほぼ完形
50	鉄釘	62	7	5	5.43	3区床周辺羨道	先端部欠損
51	鉄釘	54	6	5	6.02	3区南トレンチ	先端部欠損
52	鉄釘	45	5.5	5	4.05	3区床トレンチ南側	先端部欠損
53	鉄釘	40	7	5	4.46	3区石室床	先端部欠損
54	鉄釘	36	6	6	3.84	3区石室床	先端部欠損
55	鉄釘	21	7	5	2.67	3区床周辺羨道	頭部のみ
56	鉄釘	26	6.5	6	2.11	3区石室床	頭部のみ
57	鉄釘	30	5	5	3.17	3区南トレンチ	頭部のみ
58	鉄釘	37	6	5	4.65	3区南トレンチ	頭部のみ
59	鉄釘	32	7	5	3.84	4区南西裾	頭部のみ
60	鉄釘	71	5	5	4.94	3区床周辺羨道	頭部欠損
61	鉄釘	78	5	4	6.17	3区石室床	頭部欠損
62	鉄釘	49	4	3	2.03	3区石室床	先端部のみ
63	鉄釘	40	5	4	2.1	3区床トレンチ南側	先端部のみ
64	鉄釘	37	6	5	1.71	3区墳裾（南）	先端部のみ
65	鉄釘	28	4	3	0.76	3区床周辺羨道	先端部のみ
66	鉄釘	19	4	3.5	0.63	3区床トレンチ南側	先端部のみ
67	鉄釘	18	4	3	0.49	3区床周辺羨道	先端部のみ
68	鉄釘	14	4.5	3.5	0.36	3区床トレンチ南側	先端部のみ
69	鉄鎌	26	75	4	16.95	2区周溝内	穂摘み鎌
70	鉄鏃	126	25	4	19.65	2区周溝内	
71	砥石	100	62	22	183.72	1区	

※地区名は古墳の中央を起点に東西南北に4等分し，北西から時計回りに1～4区とした。
※長さ・幅・厚さはmm，重さはgである。

第2表　浅谷山西古墳出土遺物計測表

（7）ま　と　め

ここでは本古墳の特徴等について検討をしてまとめにかえる。ただし，墳丘及び石室の遺存状況は前述したように極めて不良であったので，不明な部分も多い。

1時期

本古墳は浅谷山1号遺跡の古墳時代後期頃の遺構を破壊して造られている。構築時期については出土遺物から6世紀後半～7世紀初頭と思われるが，内部から出土した遺物の大半が盗掘や石材採取等により攪乱されているので，大まかな時期でしか押さえられない。

土器以外に出土した遺物は鉄釘である。これもほとんどが現位置をなくした攪乱土中からの出土であるため，恐らくは使われたであろう木棺の構造や配置についての情報がなくなってしまっている。

また，石室開口部の南東斜面付近から鉄滓が出土している。これらは古墳から転落したかのような状況であったので，本来本古墳に副葬されていた可能性が高いと思われる。

2埋葬施設

次に石室の平面規格について若干検討してみる。本古墳の埋葬施設は横穴式石室と思われるが，石室の石材がほとんど残っていない。したがって埋葬空間である石室の規模を直接知るのは難しい。次善の手段として石室掘方の規模から石室の大きさを推測するが，多くの場合，基底石は石室構築のベースとなるので，石室床面よりも一段低く掘り込んでいる。この基底石の掘方の痕跡を石室の規模を知る手がかりとする。

しかしながら，その大きさは必ずしも掘方と対応するものではない。掘り込まないで設置した石材もあろうし，あるいは不安定になる一部分だけを掘り込んで安定を図った石材もあるだろう。こういった前提条件が存在することを確認しつつあえて玄室の規模を推定してみる。

掘方の大きさが基底石に使った石材端から10cm程度と仮定すると，図上では概ね幅1.0～0.8×長さ4.4mの空間が推定可能である。

玄室の長さが不明なので，不確定要素はあるが，玄室の幅から推定すると奥壁に平行して木棺を配置するには狭すぎるので，奥壁に直交して木棺を配置したものと思われる。そうすると直交配置の場合は1～2体，さらに玄室と羨道の境目が判明しないが，もう一列足しても十分な広さを持っていると思われる。玄室のスペースとしては最低2～4人は埋葬空間を確保できたと推定できる。

3立　地

さて本古墳を含む丘陵公園内の古墳はその多くが群を形成している。群の規模や古墳の時期については表面上の観察だけでは不確定な部分も多く存在するが，浅谷山古墳群（未調査）は本古墳の北東方向，標高304m付近の丘陵頂部に立地しており，埋葬施設は木棺直葬系の埋葬施設が

予想されている。また，馬立古墳群[1]（2002年調査）は３基からなる円墳で浅谷山古墳群と同様に丘陵頂部に占地している。第１・３号古墳では埋葬施設が不明であるが，第２号古墳には小型の竪穴式石室が使われており，６世紀の中頃と推定されている。

以上のように丘陵公園内の古墳は丘陵頂部に占地するものが多く，また数基で群を構成しているのが一般的である。浅谷山古墳群の埋葬施設の予想が正しいとすれば，浅谷山古墳群と浅谷山西古墳とでは埋葬方法の違いが存在することになる。この埋葬方法の違いを時間差に還元するのが妥当であろうとおもわれる。

しかも，浅谷山西古墳の開口方向は南に向いており，この方向から望めるのは狭小な谷地形である。浅谷山古墳群の眺望の開けた立地とはずいぶんと違っている。これらの違いは単に時期によるのかあるいは生業集団の違いなどと色々想定できる。明確に丘陵から一段下がった尾根上に占地を変更していることに何かしらの規制が推測できる。

４むすび

本古墳は古墳時代の遺構である浅谷山１号遺跡のＳＢ１とＳＸ６を破壊して構築している。出土遺物からＳＢ１は概ね６世紀の中頃，ＳＸ６も同じ頃か若干後ぐらいの年代を想定できる。このように，両者の年代はそれほど離れてはいないと推定できる。集落の全容があるいは一端しか解っていない段階で判断するのは難しいかも知れないが，前述したように両者の年代にそれほどの差がないことから，集落の廃絶後まもなくあるいは若干の空白期をおいていずれにしてもそれほど時間の間隔があかないうちに当古墳が造営されたと考えられる。

そこに何らかの意図的な選択が感じられる。古墳の造営はすなわちこの地における集落の終焉と軌を一にしているのではないかと思われる。その要因については不明であるが，集落から墓地へと転機をもたらすなんらかの変動が起こったのであろう。

註

（１）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『浅谷山Ｂ地点遺跡・清水３号遺跡』 1998年

2　浅谷山１号遺跡

（１）調査の概要

浅谷山１号遺跡は備北丘陵公園内にあり，前述した浅谷山西古墳と同一の丘陵斜面に位置している。調査は調査区の幅が狭くて細長い形に合わせて北西から南東にかけて基線を任意に設定し，ここから10m毎にグリッドを設定した。表土及び検出面までの堆積土は機械によって掘り下げ及び排土を行い，検出面＝黄褐色粘質土からは人力により遺構検出，遺構掘り下げを行った。

調査の結果，竪穴住居跡６，掘立柱建物跡３，土坑５，性格不明遺構６を検出した。また，弥生土器や須恵器・土師器，砥石などが遺構内から出土している。遺構は散発的であるが，調査区の全域から見つかっている。ただし，中央から南半分が割と遺構が密集しており，北側は若干希薄である。ＳＢ５～ＳＢ７のように調査区外に延びると想定できる遺構も存在する。また，ＳＢ９やＳＢ10も延びる可能性がある。

竪穴住居跡は弥生時代と古墳時代の時期のものがあり，平面形は前者が円形，後者が方形である。掘立柱建物跡の年代については不明であるが，竪穴住居跡に付随した可能性もある。

土坑については古墳時代の小型竪穴式石室（ＳＫ１）や縄文時代の落とし穴と思われるものがある。この他，屋外炉の可能性もあるＳＸ３などがある。

（２）検出した遺構

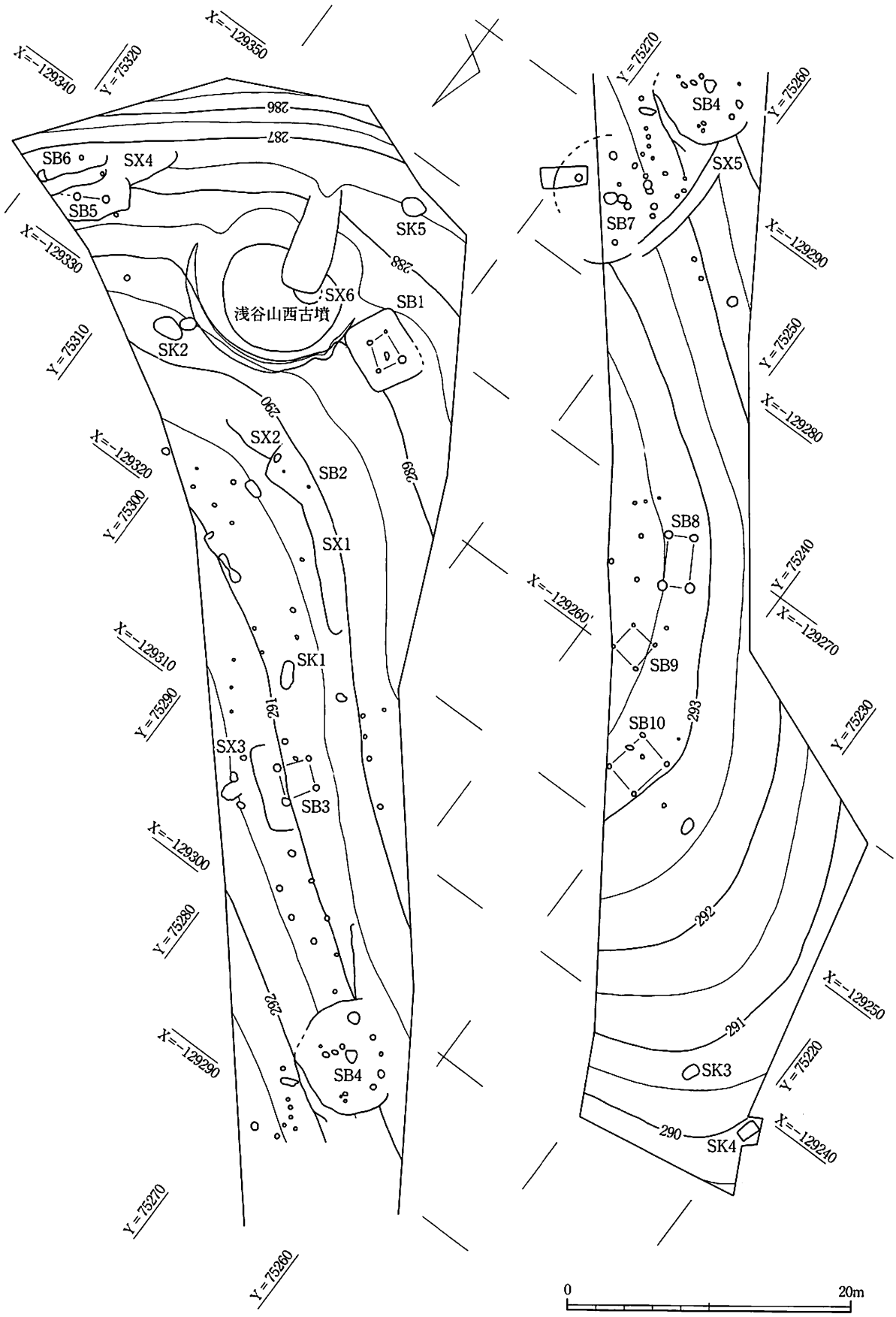
Ａ　竪穴住居跡

ＳＢ１（第12図・図版７ａ・７ｂ）

調査区の南端部に位置する。浅谷山西古墳の周溝と北東隅部がほぼ接する。東側５ｍにはＳＸ６が，北側８ｍにはＳＢ２がある。平面形は4.05 m×5.04 mの方形である。深さは一番深いところで0.64 mである。斜面に立地するので，南西側の遺存状況が不良で，南西隅が自然地形に移行している。

主柱穴は４本である。各隅の対角線上に配されている。Ｐ１は0.34 m×0.35 m，深さ0.43 m，Ｐ２は0.24 m×0.27 m，深さ0.38 m，Ｐ３は0.25 m×0.23 m，深さ0.32 m，Ｐ４は0.25 m×0.24 m，深さ0.56 mである。各柱穴の距離はＰ１－Ｐ２が2.14 m，Ｐ２－Ｐ３が1.40 m，Ｐ３－Ｐ４が2.35 m，Ｐ４－Ｐ１が1.90 mである。幅　0.18 m，深さ0.04 mの壁溝がほぼ全周する。また，住居跡中央やや西よりに0.6×0.28 mの範囲で焼土が存在する。

遺物は土師器（１～12，18）・須恵器（13～17・19）・磨石（90）が出土しており，２，６，９，10，90が床面近くから出土している。



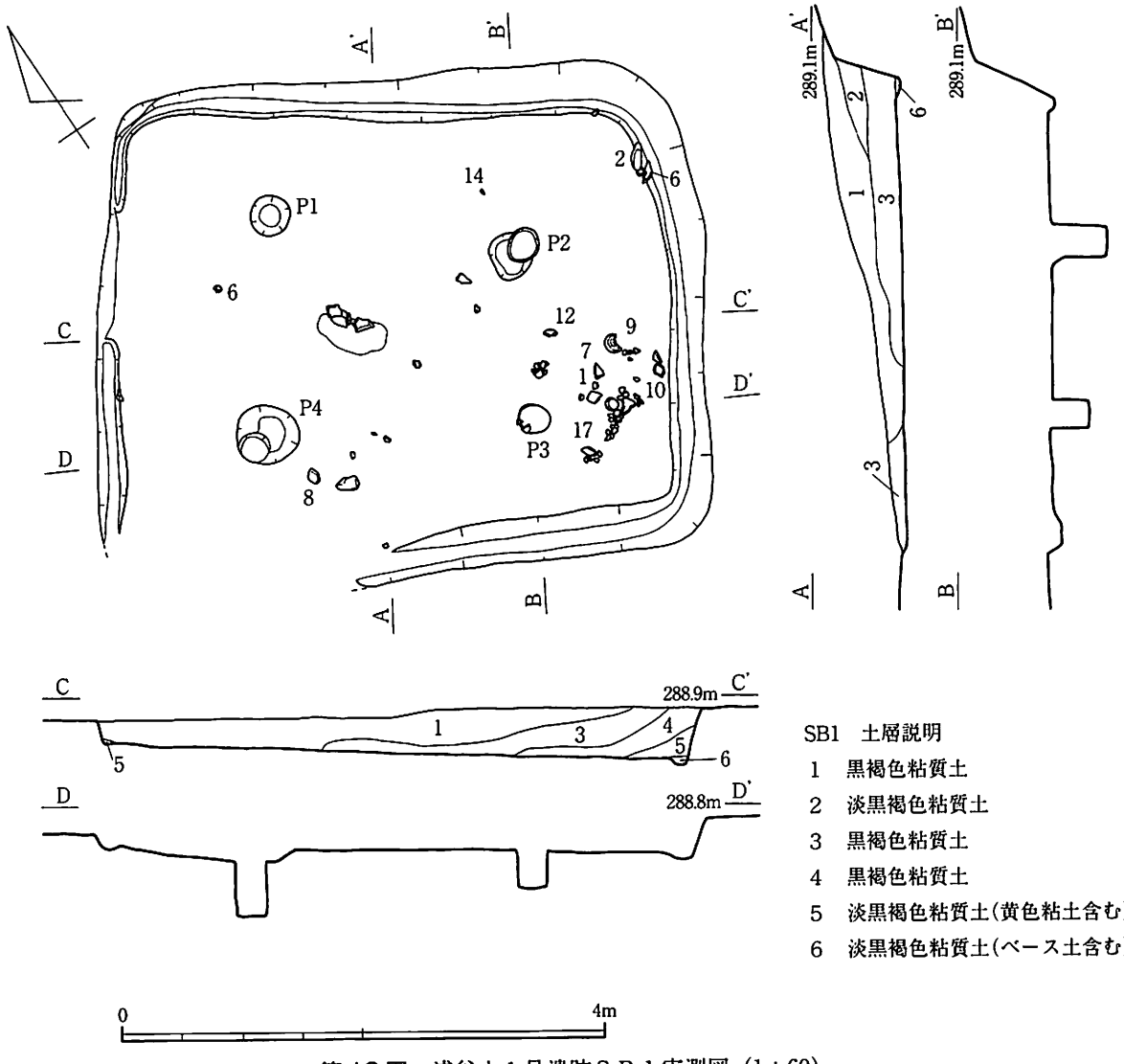
第 11 図　浅谷山 1 号遺跡遺構配置図（1：400）

ＳＢ２（第13図・図版７ｃ）

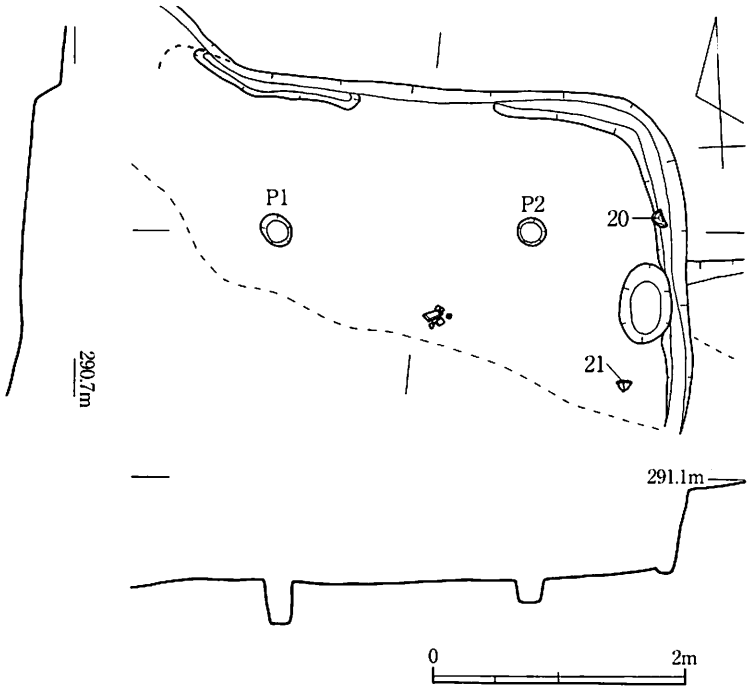
調査区の南部に位置する。ＳＢ１の北側８ｍ，ＳＫ２の西側10.5ｍに当たる。平面形は方形ないしは長方形になると思われるが，ＳＸ１により西側を破壊され，更に北東から南西に傾斜する斜面上に存在することなどから，遺存状況は良くない。現状では東西4.10ｍ，南北2.54ｍが残っている。

主柱穴と確認できたのは２本のみである。Ｐ１は0.26ｍ×0.22ｍ，深さ0.34ｍ，Ｐ２は0.20ｍ×0.19ｍ，深さ0.18ｍである。柱間距離は2.05ｍであった。北側中央部付近で途切れているため全周はしないが幅0.20ｍ，深さ0.05ｍの壁溝が巡っている。

遺物には弥生土器（24）・須恵器（20～23）があり，須恵器はほぼ床面上から出土している。



第12図　浅谷山１号遺跡ＳＢ１実測図（1：60）



第13図　浅谷山1号遺跡ＳＢ２実測図（1：60）

ＳＢ３（第14図・図版８ａ）

調査区の中央部からやや南側に位置する。周辺には北西側14mにＳＢ４が，北東側１mにはＳＸ３が，南東側６mにはＳＫ１が存在する。平面形は5.8m×1.5m＋αの方形であろうと思われるが，遺存状況が不良のため不明の部分もある。深さは一番深いところで0.20mである。斜面に立地するので，南西側の遺存状況が不良で，床面は北側の壁溝から2.1mで自然地形に移行している。現状では北西側（山側）に住居跡の壁溝と床面の一部，そして住居跡に伴うと思われる柱穴群が残っている。

主柱穴は４本確認できた。Ｐ１は0.55m×0.53m，深さ0.57m，Ｐ２は0.35m×0.35m，深さ0.39m，Ｐ３は0.45m×0.40m，深さ0.40m，Ｐ４は0.59m×0.53m，深さ0.59mである。各柱穴の距離はＰ１－Ｐ２が2.30m，Ｐ２－Ｐ３が2.1m，Ｐ３－Ｐ４が2.4m，Ｐ４－Ｐ１が2.5mである。幅0.23m，深さ0.06mの壁溝が北側及び，東西両側の一部を巡っている。遺物は須恵器が出土しており，25が柱穴上部から出土している。

ＳＢ４（第15図・図版８ｂ・８ｃ・９ａ）

調査区のほぼ中央部に位置する。周辺には北側５mにＳＢ７が，南東側14mにＳＢ３・ＳＸ３が，またＳＸ５とは西側で接している。平面形は7.78m×6.18m＋αのやや楕円形で，北東から南西にかけて傾斜しているため，南西側の遺存状況は不良である。

主柱穴は10本と思われる。Ｐ１は0.38m×0.37m・深さ0.82m，Ｐ２は0.34m×0.38m・深さ0.64m，Ｐ３は0.33m×0.24m・深さ0.64m，Ｐ４は0.38m×0.28m・深さ0.70m，Ｐ５は0.40m×0.40m・深さ0.57m，Ｐ６は0.38m×0.34m・深さ0.63m，Ｐ７は0.39m×0.38m・深さ0.76m，Ｐ８は0.48m×0.38m・深さ0.71m，Ｐ９は0.54m×0.36m・深さ0.63m，P10は0.35m×0.33m・深さ0.68mである。各柱穴の距離はＰ１－Ｐ２が1.8m，Ｐ２－Ｐ３が1.3m，Ｐ３－Ｐ４が1.35m，Ｐ４－Ｐ５が1.2m，Ｐ５－Ｐ６が2.0m，Ｐ６－Ｐ７が1.4m，Ｐ７－Ｐ８が1.0m，Ｐ８－Ｐ９が1.1m，Ｐ９－P10が2.0m，P10－Ｐ１が1.7mである。幅0.11～0.20m・深さ0.06mの壁溝が巡っている。また，中央部やや西寄りには1.2m×1.0mの範囲

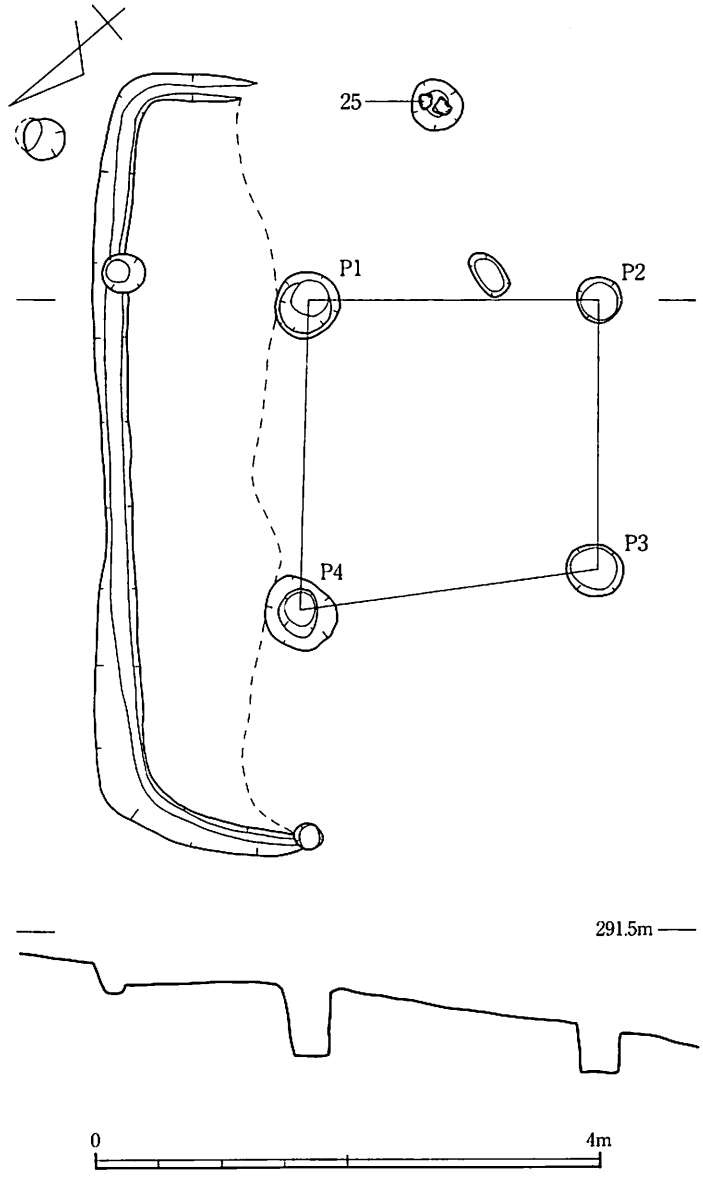
で焼け土の広がりを確認している。遺物は弥生土器（26～55）・土師質土器（56），石器（91,92）が出土している。床面からは26，28，29，33，36，48，91，92が出土した。

ＳＢ５（第16図・図版9b）

調査区の南東端に位置する。周辺には浅谷山西古墳古墳が西側5.5ｍに，ＳＫ２が北西側８ｍにあり，ＳＢ６が南にＳＸ４が西に各々接している。平面形は方形ないしは長方形と思われるが南西側の調査区外に延びるため詳細は不明である。現状では5.5ｍ×2.6ｍが残存している。

柱穴は３本確認できたが，更に存在するかどうかは不明である。Ｐ１は0.54ｍ×0.50ｍ，深さ0.57ｍ，Ｐ２は0.60ｍ×0.49ｍ，深さ0.59ｍ，Ｐ３は0.61ｍ×0.59ｍ，深さ0.42ｍである。柱穴距離はＰ１－Ｐ２は2.1ｍ，Ｐ１－Ｐ３は1.8ｍである。壁溝は確認できなかった。

出土遺物には土師器（57･58），須恵器（59）がある。

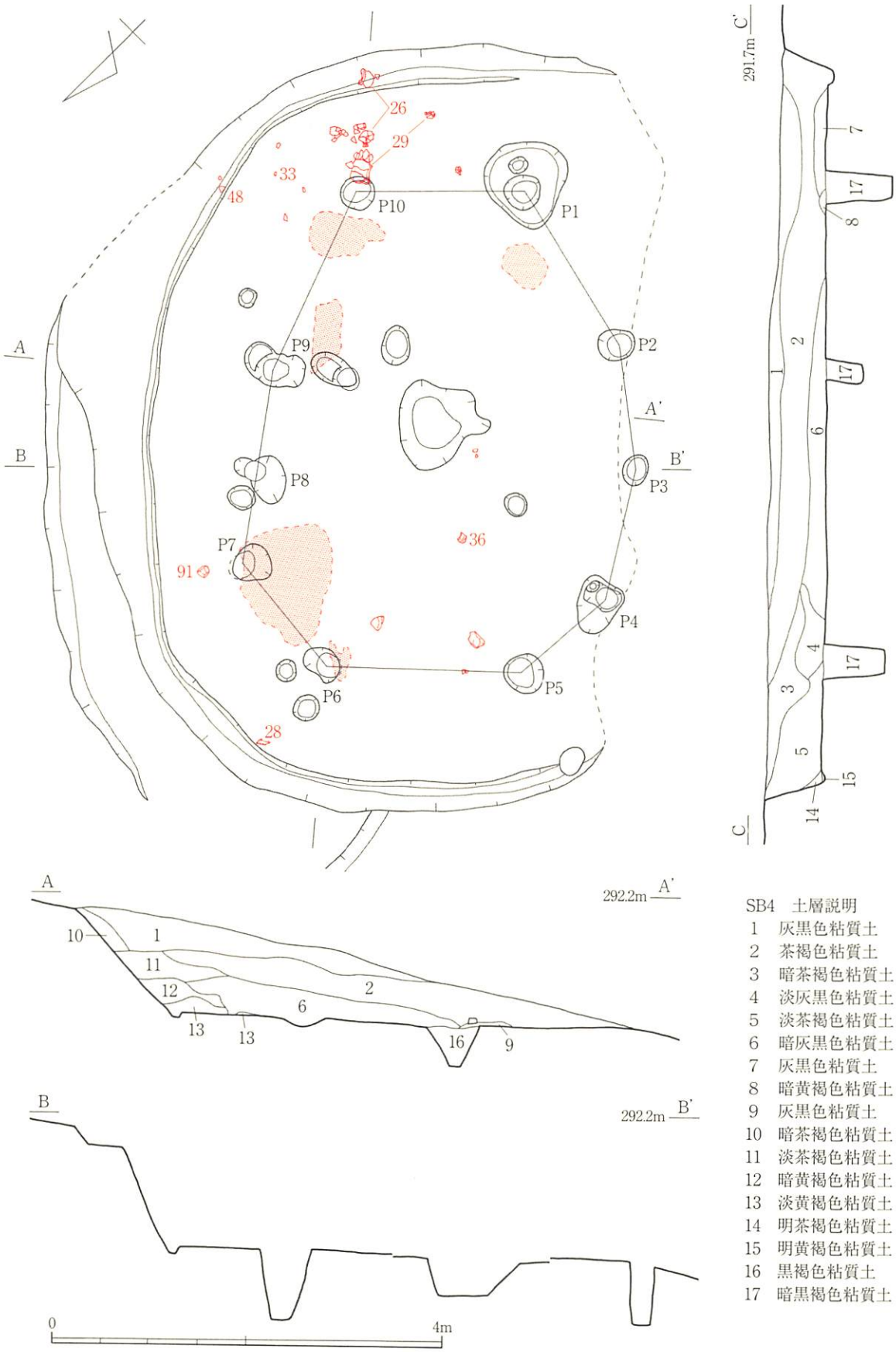


第14図　浅谷山１号遺跡ＳＢ３実測図（１：60）

ＳＢ６（第16図・図版９ｂ）

調査区の南東端に位置する。周辺には浅谷山西古墳が西側10ｍに，ＳＫ２が北西側12ｍにあり，ＳＢ５が北にＳＸ４が北西に各々接している。平面形は方形ないしは長方形と思われるが南側が斜面となっており，床面が自然地形に移行するため詳細は不明である。現状では4.5ｍ×1.38ｍが残存している。

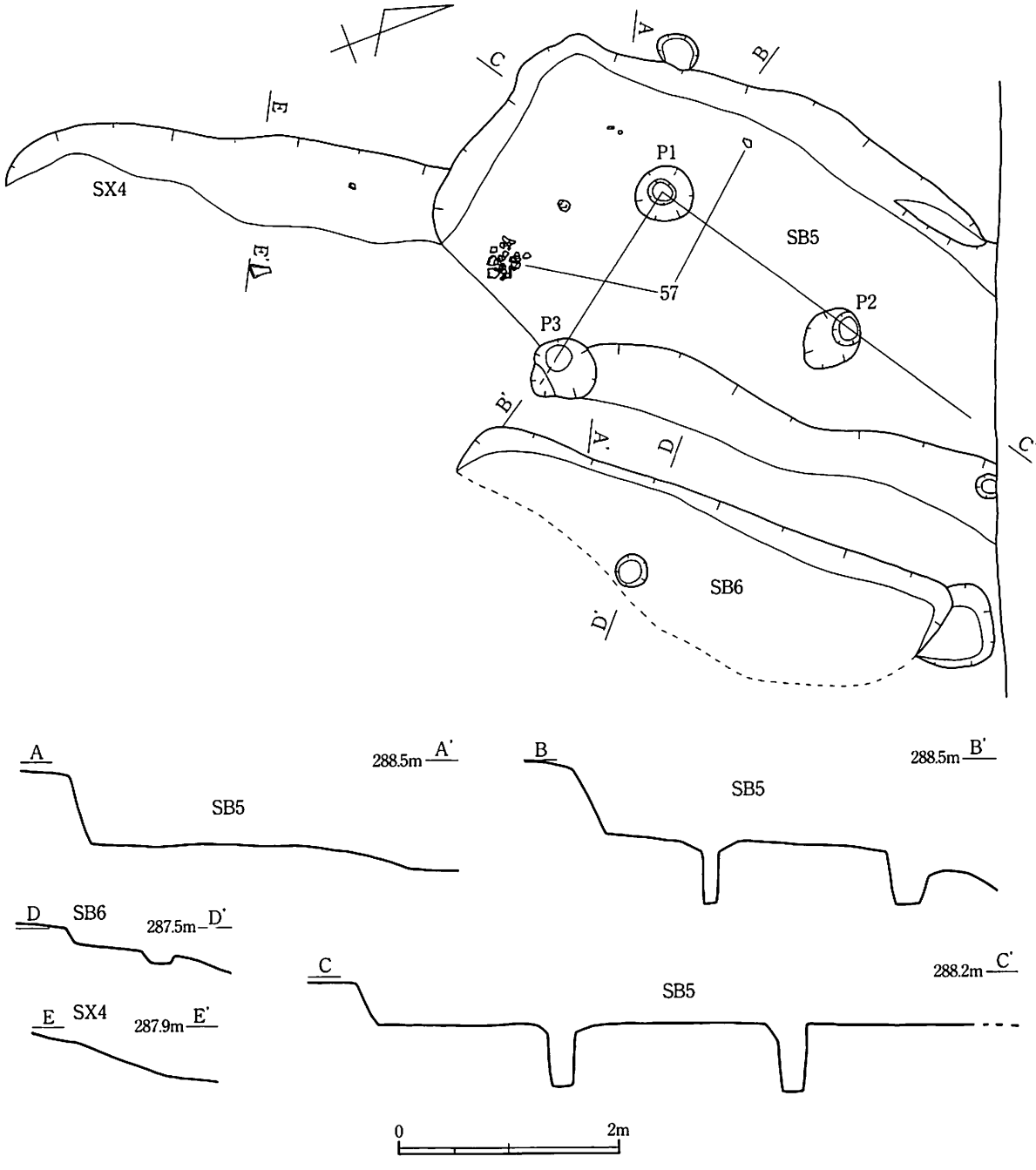
柱穴は１本確認できた。規模は0.30ｍ×0.27ｍ，深さ0.10ｍである。壁溝は確認できなかった。また出土遺物は確認できなかった。



SB4　土層説明

1　灰黒色粘質土
2　茶褐色粘質土
3　暗茶褐色粘質土
4　淡灰黒色粘質土
5　淡茶褐色粘質土
6　暗灰黒色粘質土
7　灰黒色粘質土
8　暗黄褐色粘質土
9　灰黒色粘質土
10　暗茶褐色粘質土
11　淡茶褐色粘質土
12　暗黄褐色粘質土
13　淡黄褐色粘質土
14　明茶褐色粘質土
15　明黄褐色粘質土
16　黒褐色粘質土
17　暗黒褐色粘質土

第15図　浅谷山1号遺跡ＳＢ４実測図（1：60）（アミ目は焼土）

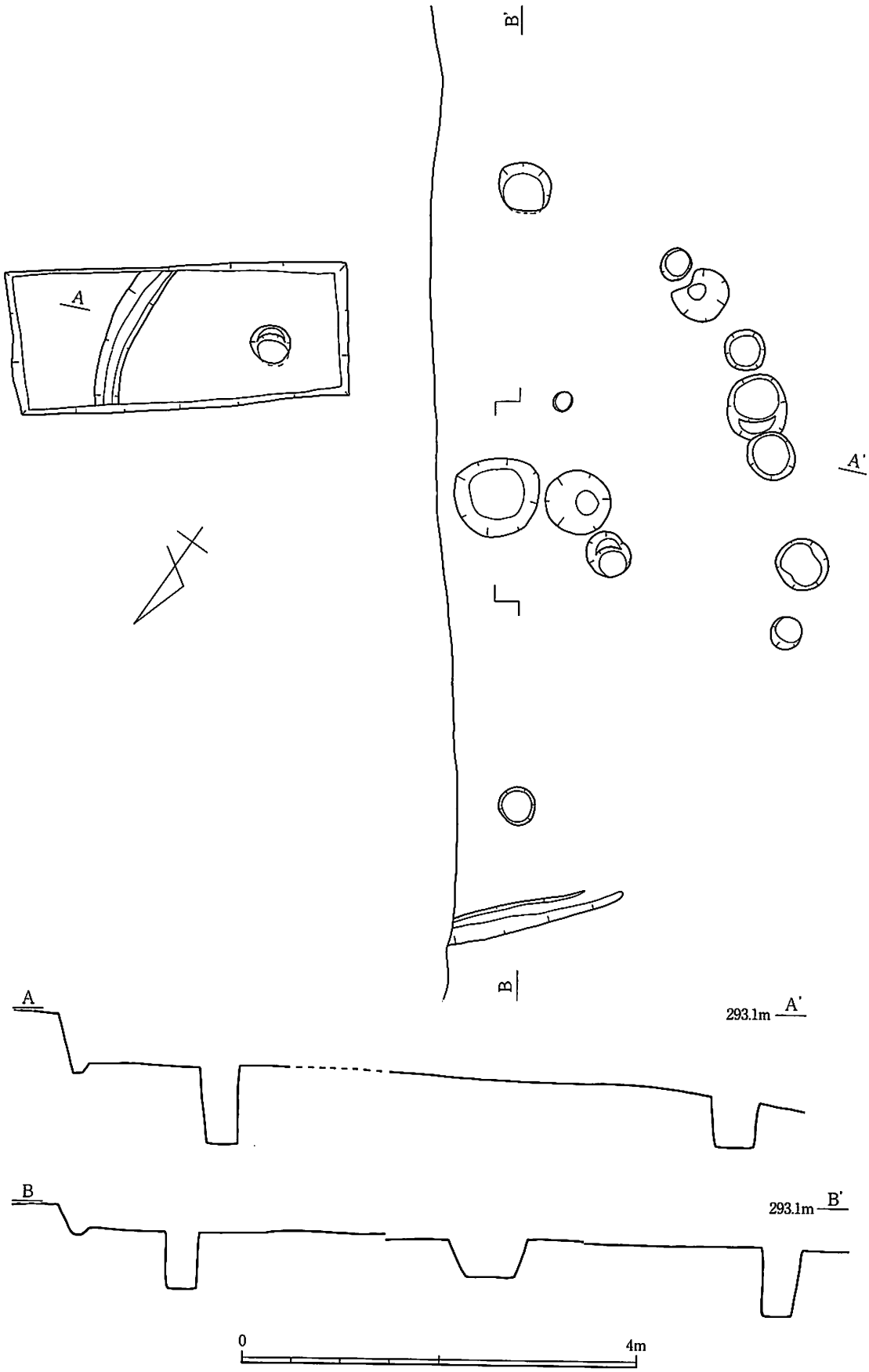


第16図　浅谷山１号遺跡ＳＢ５・ＳＢ６・ＳＸ４実測図（１：60）

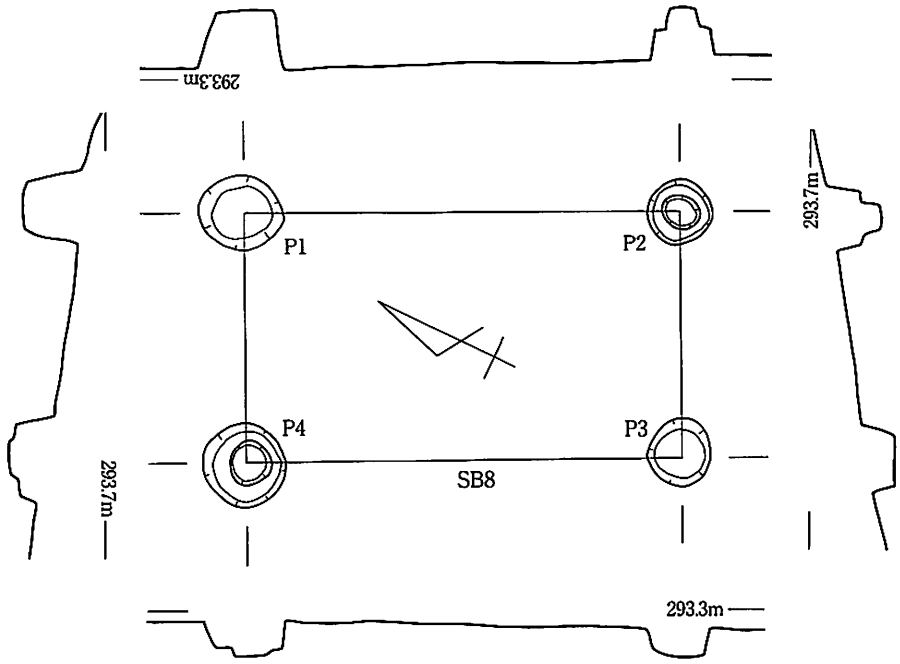
ＳＢ７（第17図・図版9c）

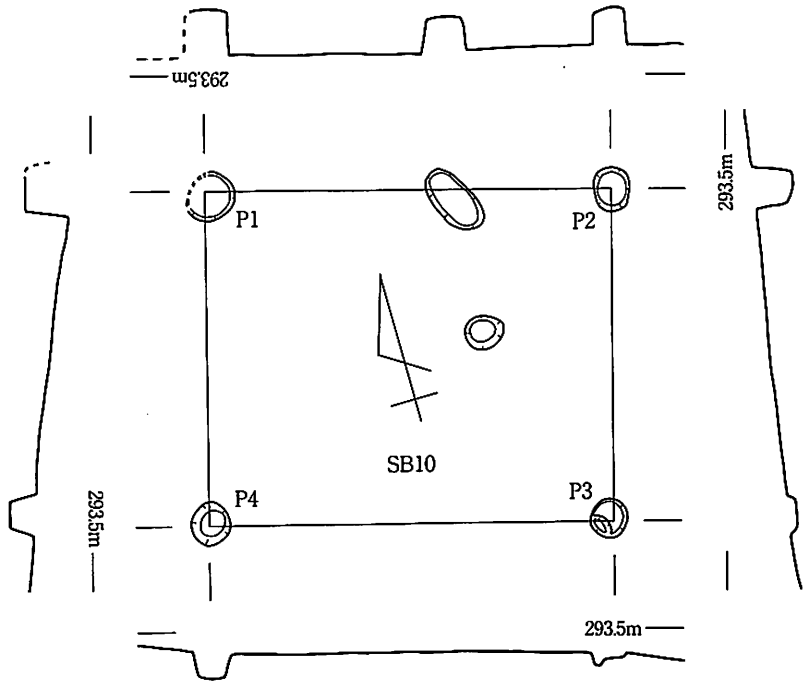
調査区のほぼ中央に位置する。周辺にはＳＢ４が南側５ｍに，ＳＢ８が北西19ｍに存在する。北東の調査区境の断面で確認できたので，調査区外を一部確認のために試掘坑を設定し掘り下げた。調査区内で確認できたのは柱穴と壁溝の一部である。

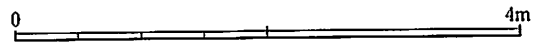
試掘坑及び柱穴等の状況から本住居跡は直径が概ね８ｍの円形の住居跡と思われる。検出面から床面までの深さは0.50ｍである。斜面に位置するため南西側の遺存状況が悪い。



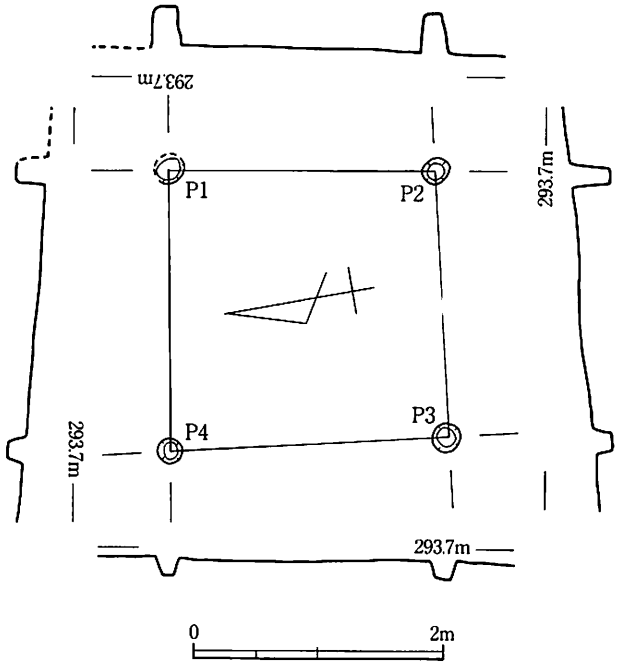
第17図　浅谷山1号遺跡ＳＢ７実測図（1：60）







第18図　浅谷山1号遺跡ＳＢ８・ＳＢ10実測図（1：60）



第19図 浅谷山1号遺跡ＳＢ９実測図（1：60）

柱等の構造については不明であるが，図上で判断する限りは６本柱の可能性が強い。

遺物は磨り石（93）が出土している。

Ｂ　掘立柱建物跡

ＳＢ８（第18図・図版10ａ）

調査区中央部からやや北側に位置する。周辺にはＳＸ５が南東側20ｍに，ＳＢ９が北西側３ｍに存在する。変則的な１間×１間の建物跡である。主軸の方位はＮ26°　Ｅである。

Ｐ１は0.57ｍ×0.56ｍ，深さ0.47ｍ，Ｐ２は0.50ｍ×0.49ｍ，深さ0.46ｍ，Ｐ３は0.53ｍ×0.48ｍ，深さ0.27ｍ，Ｐ４は0.66ｍ×0.63ｍ，深さ0.36ｍである。各柱穴の距離はＰ１－Ｐ２が3.5ｍ，Ｐ２－Ｐ３が2.0ｍ，Ｐ３－Ｐ４が3.5ｍ，Ｐ４－Ｐ１が2.0ｍである。柱間距離は長い方と短い方の比率が７：５となっている。遺物は出土していない。

ＳＢ９（第19図・図版10ｂ）

調査区の北側に位置する。周辺にはＳＢ８が南側３ｍに，ＳＢ１０が北側4.5ｍに存在する。建物の規模は１間×１間の建物跡である。主軸の方位はＮ10°　30′　15″　Ｅである。

Ｐ１は0.22ｍ×0.23ｍ，深さ0.32ｍ，Ｐ２は0.19ｍ×0.22ｍ，深さ0.31ｍ，Ｐ３は0.21ｍ×0.20ｍ，深さ0.16ｍ，Ｐ４は0.20ｍ×0.19ｍ，深さ0.15ｍである。各柱穴の距離はＰ１－Ｐ２が2.12ｍ，Ｐ２－Ｐ３が2.12ｍ，Ｐ３－Ｐ４が2.22ｍ，Ｐ４－Ｐ１が2.25ｍである。

ＳＢ10（第18図・図版10ｃ）

調査区の北側に位置する。周辺にはＳＢ９が南側4.5ｍに，ＳＫ３が北西側19ｍに存在する。建物の規模は１間×１間の建物跡である。主軸の方位はＮ75°　Ｗである。

Ｐ１は0.39ｍ×0.36ｍ，深さ0.35ｍ，Ｐ２は0.34ｍ×0.29ｍ，深さ0.33ｍ，Ｐ３は0.29ｍ×0.28ｍ，深さ0.06ｍ，Ｐ４は0.32ｍ×0.30ｍ，深さ0.20ｍである。各柱穴の距離はＰ１－Ｐ２が3.23ｍ，Ｐ２－Ｐ３が2.62ｍ，Ｐ３－Ｐ４が3.22ｍ，Ｐ４－Ｐ１が2.64ｍである。

C　土坑

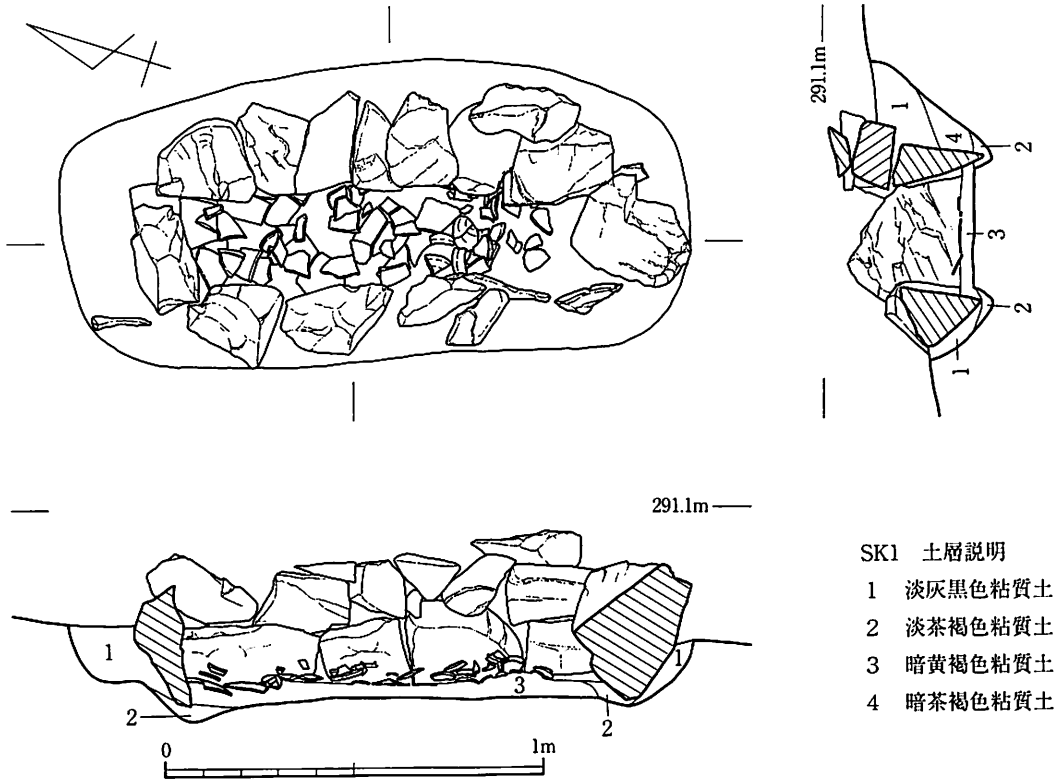
ＳＫ１（第20図・図版11，12 a）

調査区の中央部やや南側に位置する。周辺にはＳＸ１が南側５ｍに，ＳＢ３が北側４ｍに存在する。小型の竪穴式石室と思われる。内法幅は北側で0.27 m，中央部で幅0.34 m，南側で0.28 mで，長さは1.05 mである。主軸の方位はＮ 17°　45′　Ｗである。南西へ傾く斜面のため西側の遺存状況が少し不良である。

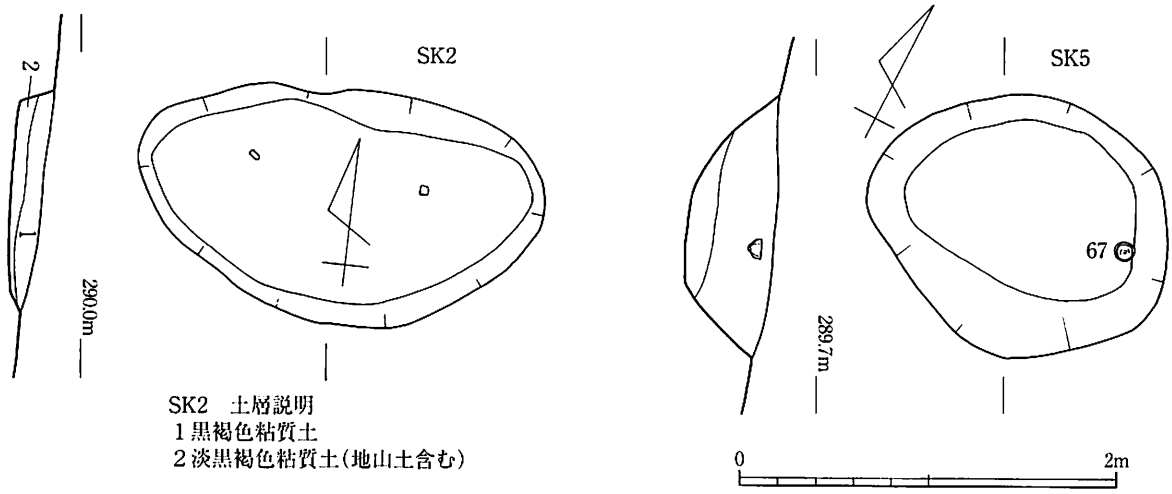
石室基底面に使用している石材は長方形の石材の広口面を横に寝かせて使用している。比較的遺存状態の良かった東側ではこの基底石の上に一段ないしは２段で小口面を内にして小さな石材を積み上げている。上端の高さは概ね短辺側の北及び南側の小口部分の石材の上端の高さに揃えているようである。遺存状況の悪い西側も同様であったと思われ，構築時は現状の基底石の上に１～２段分の礫を積み上げたものと想定できる。ただし，石室の上部を被覆した石材は不明である。転落石が石室の側石と推定できることから，板材で被覆していた可能性も存在する。

床面は須恵器と土師器で覆われており，そのほとんどは破壊されていた。この破壊した土器片を列べて床としている。須恵器の杯身や杯蓋も使用されていたが，それ以上に甕の胴部片が多く使用されていた。

掘方は長さ1.66 m，幅0.76 m，深さ0.26 mの隅の丸い長方形をしている。基底石の部分は一段掘り込んで安定を図っている。



第20図　浅谷山１号遺跡ＳＫ１実測図（１：20）



第21図　浅谷山1号遺跡ＳＫ２・ＳＫ５実測図（1：40）

石室に伴う溝や盛り土は検出できなかった。

遺物には須恵器（61～63），土師器（64・65）がある。これらはすべて土器床を構成する部品である。副葬品は確認できなかった。

ＳＫ２（第21図・図版12b）

調査区の南側に位置する。周辺には浅谷山西古墳が南西1.5ｍに，ＳＸ２が北西10.5ｍに，ＳＢ５が南東８ｍに存在する。規模は2.17ｍ×1.25ｍ，深さ0.23ｍで，平面形は不整な楕円形である。断面は逆台形で坑底面はわずかに南側に傾斜する。土器片が出土している。

ＳＫ３（第22図・図版13a・13b）

調査区の北端部に位置する。周辺にはＳＫ４が西側５ｍに，ＳＢ10が南東側19ｍに存在する。上面の形状は1.10ｍ×0.81ｍの長方形で，底面までの深さは1.24ｍである。底面のほぼ中央部には径0.20ｍ・深さ0.56ｍの小坑がある。形状等から落とし穴と思われる。

ＳＫ４（第22図・図版13c・13d）

調査区の北端部に位置する。周辺にはＳＫ３が東側５ｍに存在する。遺構の西側は調査区外となっている。上面の形状は1.44ｍ×0.86ｍの長方形で，底面までの深さは1.2ｍである。底面のほぼ中央部には径0.32ｍ・深さ0.44ｍの小坑がある。形状等から落とし穴と思われる。

ＳＫ５（第21図，12c）

調査区の南端部に位置する。周辺には浅谷山西古墳が北側3.5ｍに，ＳＸ４が北東側16.5ｍに存在する。土坑の規模は1.64ｍ×1.39ｍ・深さ0.50ｍで，平面形は不整な円形である。上面から土師器（66）が出土している。

D　性格不明遺構

ＳＸ１（第23図・図版13e）

調査区の南側に位置する。周辺にはＳＫ１が北側3.5ｍに，ＳＢ１が南側８ｍにあり，ＳＢ２と南側で接しており，ＳＢ２を一部破壊している。長さ9.5ｍ，幅1.47ｍ，深さ0.16ｍの段状の遺構である。

南西に傾く斜面上に位置しているので，南西側は一部を除いて自然地形に移行する。

底面には壁溝や柱穴は見あたらない。

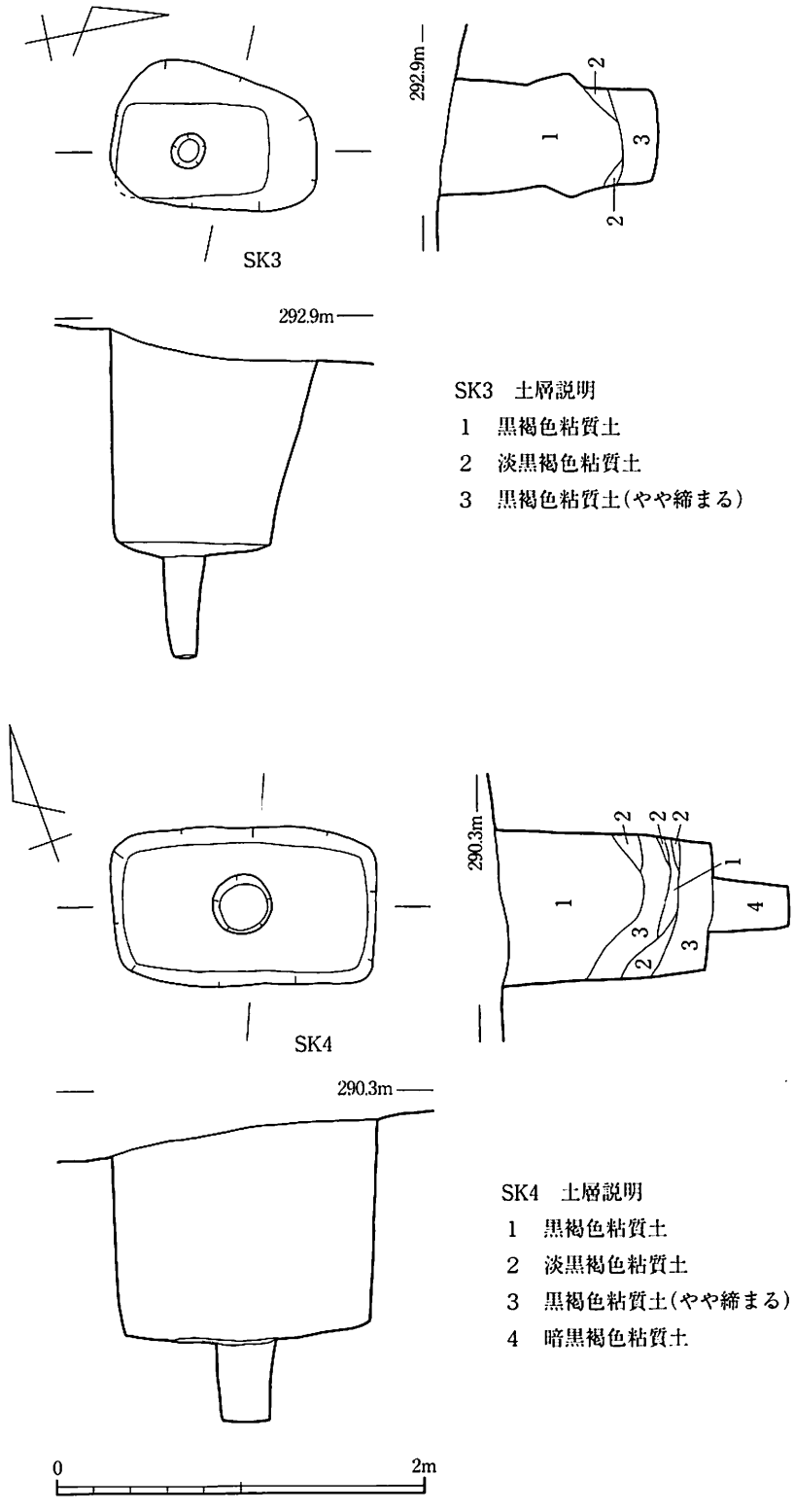
遺物は須恵器（67）が底面から出土している。

ＳＸ２（第23図）

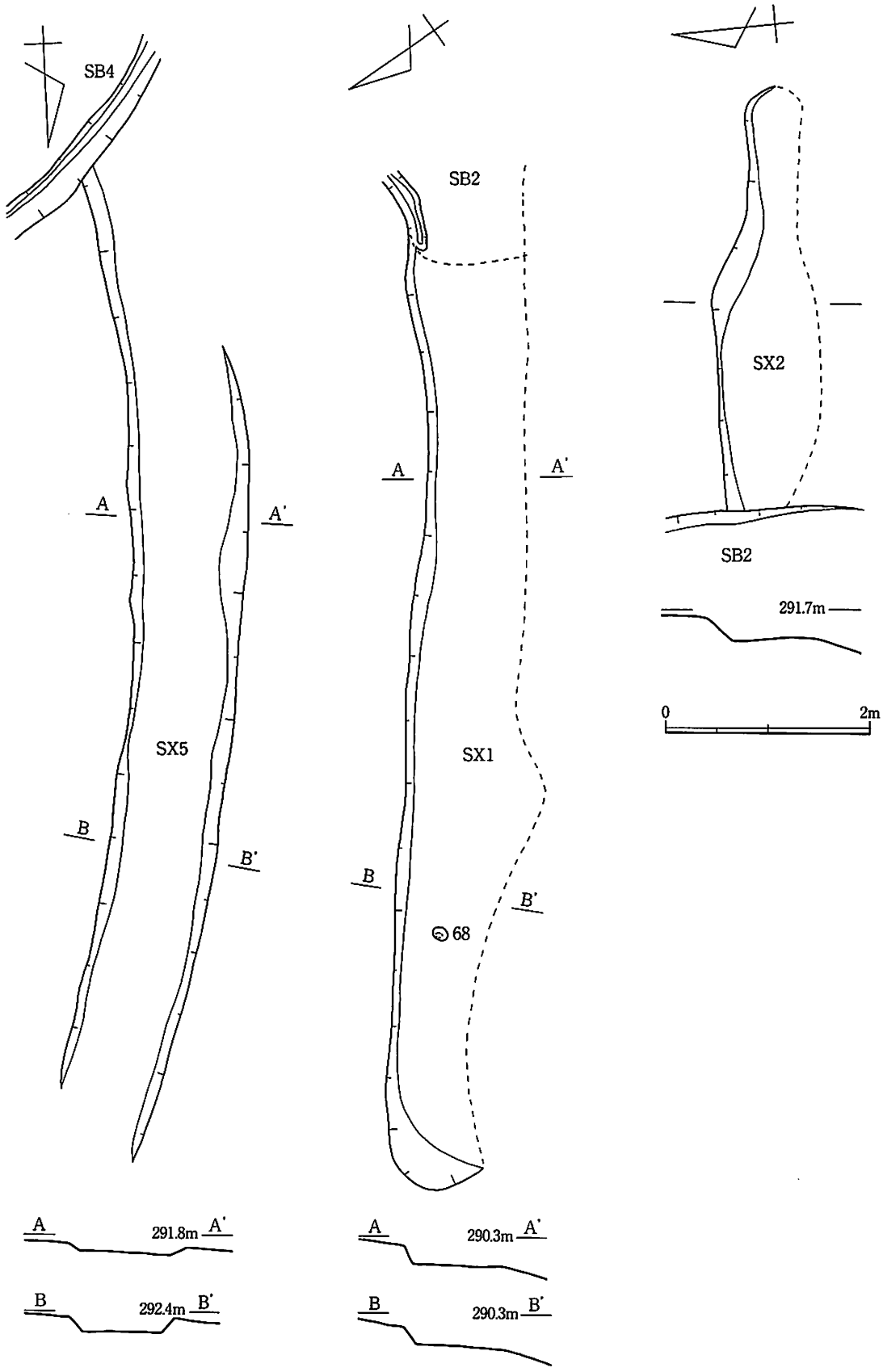
調査区の南側に位置する。周辺にはＳＫ１が北西側16ｍに，浅谷山西古墳が南側４ｍにあり，西側でＳＢ２に接しており，一部をＳＢ２により破壊されている。南に傾く斜面に位置しているので南側では一部を除いて自然地形に移行する。

現状の規模は長さ4.16ｍ，幅1.02ｍ，深さ0.22ｍの段状を呈している。

ＳＸ１同様に壁溝や柱穴は見あたらない。



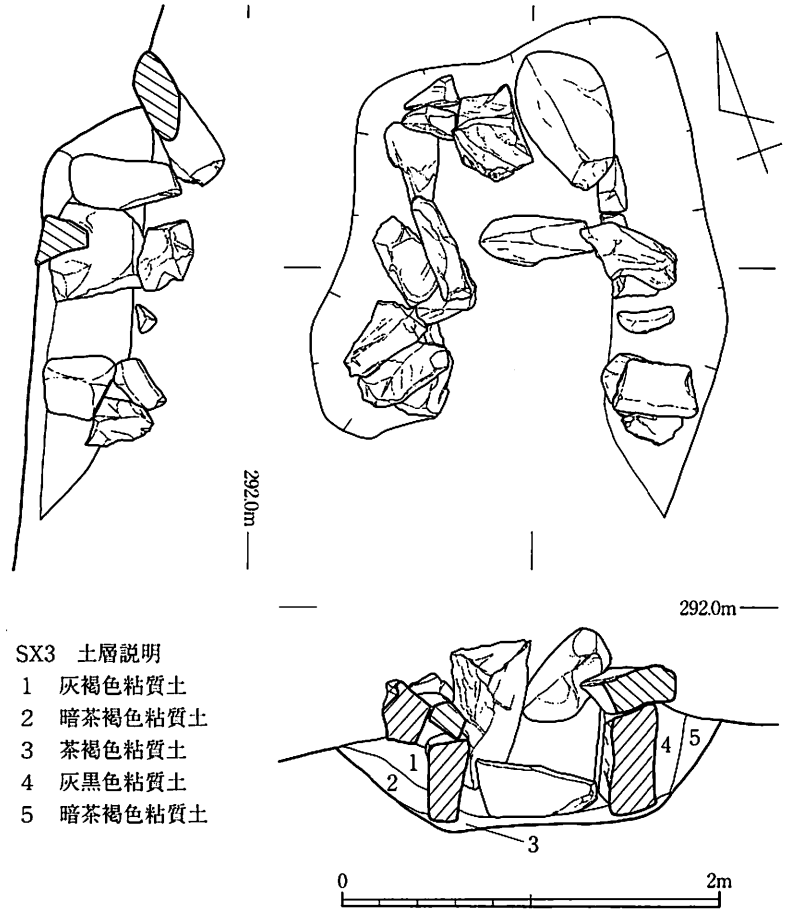
第22図　浅谷山１号遺跡ＳＫ３・ＳＫ４実測図（１：40）



第23図　浅谷山1号遺跡ＳＸ１・ＳＸ２・ＳＸ５実測図（１：60）

ＳＸ３（第24図・図版14ａ・14ｂ）

遺跡の中央部から少し南に位置する。周辺には南側1.5ｍにＳＢ３が存在する。石材をコ字型に配する石組み遺構である。開口部から奥に当たる北側の壁は長さ0.40ｍで，柱状形の石材を立てて使用しており，また，中央からやや東側よりにある石材は東側の壁の上端に架高しており，0.40ｍ×0.45ｍで石材のない空間が存在する。東側の壁は現存長0.72ｍ，高さ0.38ｍである。基底面に使用した石材は広口面を横長に使用している。その上に小口面を内側にした石材を乗せる。西側の壁は現存長0.79ｍ・高さ0.78ｍで，基底面に使用した石材は東側の壁と同様に広口面を横長に使用し，その上に１段分小さな石材を乗せている。底面のやや奥寄りに奥壁と平行して横長に石材が一枚置かれている。



第24図　浅谷山１号遺跡ＳＸ３実測図（１：20）

石材の組み方自体は疎らな部分もあり，石室のようにしっかり組まれている様子は見受けられない。掘方は幅0.83ｍ・長さ1.36ｍ・深さ0.28ｍである。坑底面は北から南にかけてほんの少し傾斜している。

なお遺構の回りには赤褐色に焼けたような痕が存在した。簡易的な屋外炉の可能性もあろう。

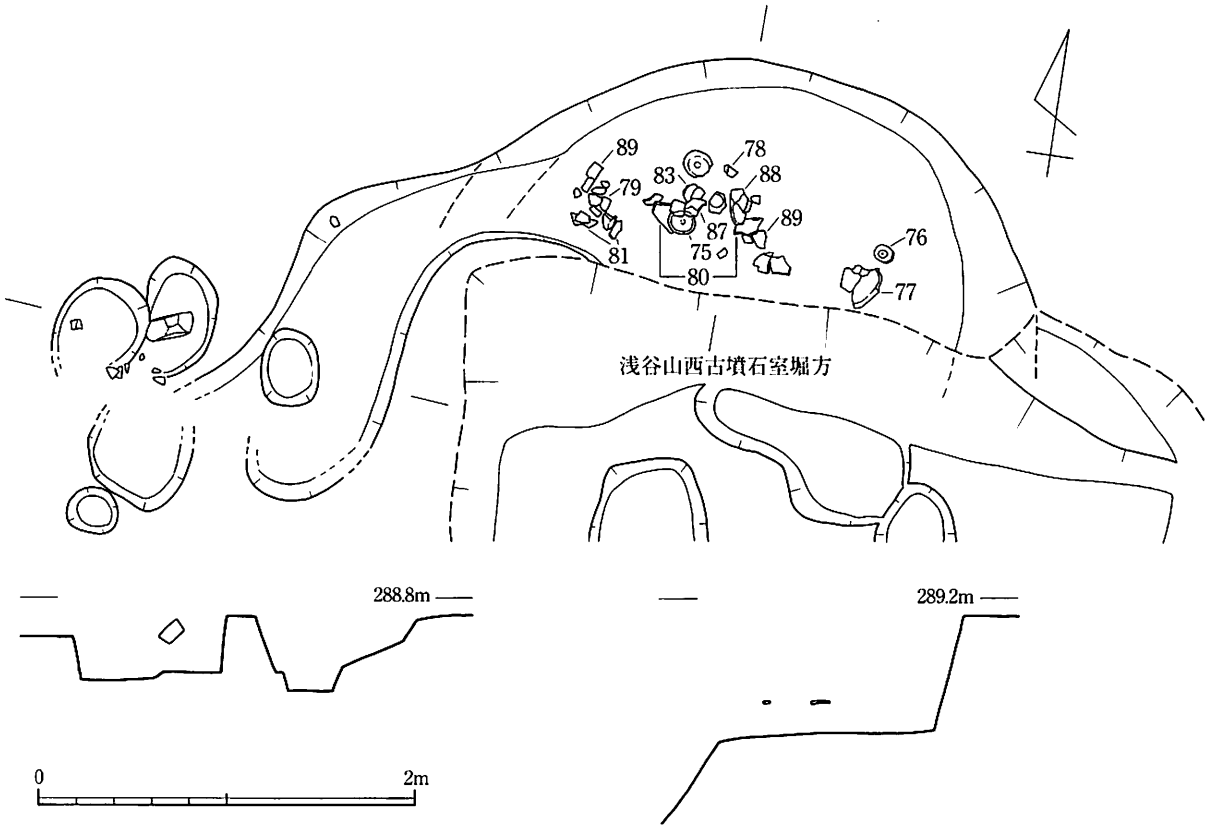
ＳＸ４（第16図・図版９ｂ）

調査区の南東端に位置する。周辺には浅谷山西古墳が西側5.5ｍに，ＳＫ２が北西側10ｍにあり，ＳＢ５と東側で接する。現状規模は3.97m×0.9mである。なお床面は一定していない。

出土遺物には須恵器（69・70）がある。

ＳＸ５（第23図）

調査区の中央に位置する。周辺にはＳＢ８が北西側20ｍに，ＳＢ３が南東側20.5ｍにあり，北



第25図　浅谷山１号遺跡ＳＸ６実測図（１：40）

側でＳＢ７さらに南側でＳＢ４に接している。ＳＢ４とＳＢ７を破壊している。現状では北東方向に延びると思われるが，調査区外のため詳細は不明である。

長さ 9.0 m，幅 1.06 m，深さ 0.15 ～ 0.09 mで断面が逆台形の溝状の遺構である。底面は周辺の地形に沿って北から南に傾斜する。遺物は出土していない。ＳＢ４の南側の上場から南西に延びる長さ 5.28 m，幅 1.01m，深さ 0.12 ～ 0.06 mの段状遺構のようなものがあるいはこの続きになる可能性もある。

ＳＸ６（第24図・図版14ｃ）

調査区の南側に位置する。浅谷山西古墳の堀方を検出している最中に発見した遺構で，古墳造営時に大半を破壊されている。円形ないしは楕円形の平面形をしていたと思われるが，石室堀方に大半を破壊されているため不明な部分が多い。現状では東西方向 3.08 m×南北方向 1.23 m，検出面からの深さ 0.63 mである。遺構の上面から土師器及び須恵器が出土した。

（3）出土遺物

遺物は各遺構および調査区内から弥生土器・土師器・須恵器・石器が出土している。遺物の多くは竪穴住居跡からの出土であり，土坑や不明遺構からの出土は土器床のある竪穴式石室（ＳＫ１）やＳＸ６を除けば僅少であった。

各遺物については住居跡，土坑，性格不明遺構の順に記述した。

Ａ　土器類

ＳＢ１（1～19）

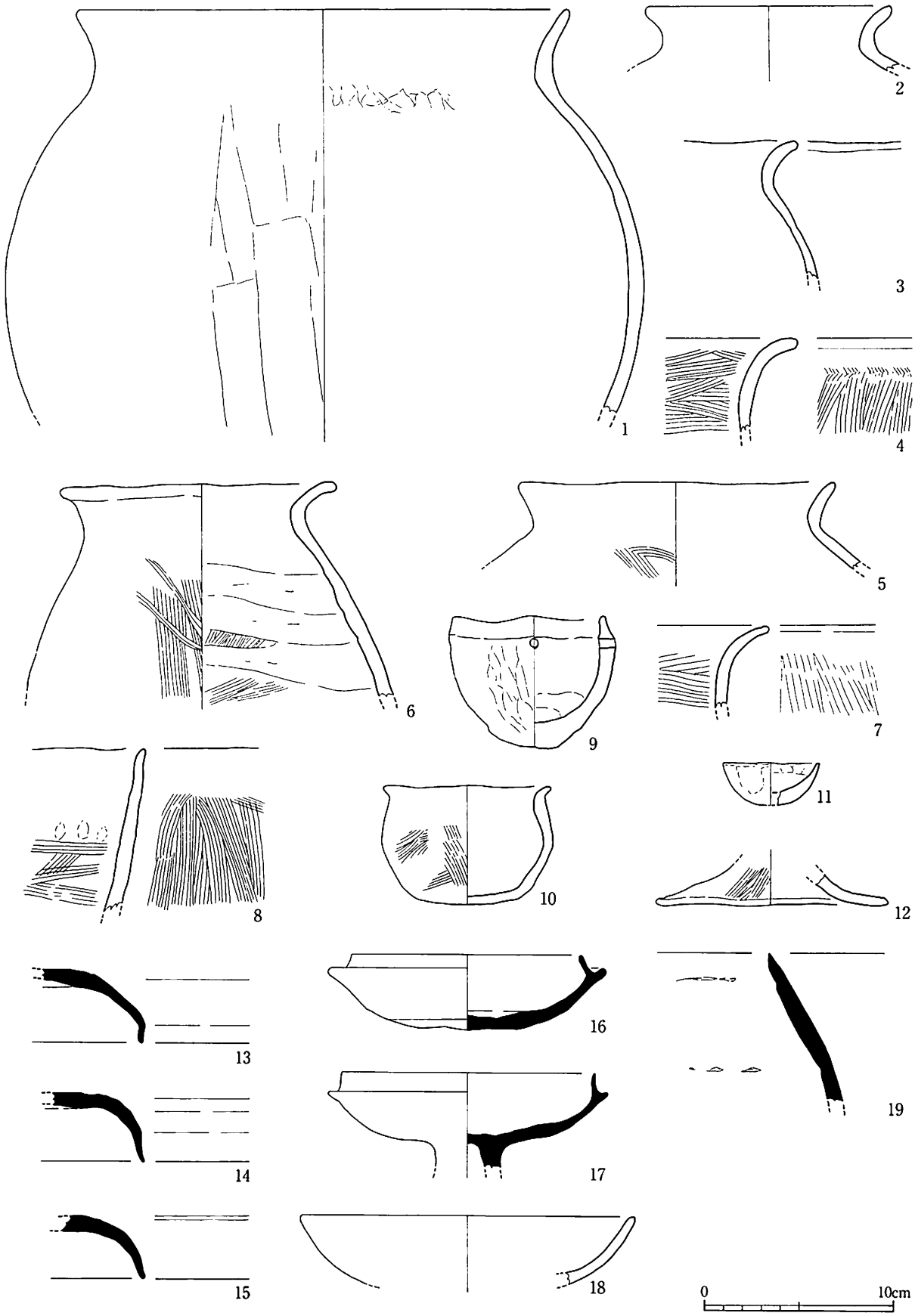
土師器（1～12・18）と須恵器（13～17・19）が出土している。

2・4・6は壺形土器である。2は頸部から口縁部で復元口径は12.6cmである。頸部はく字形に屈曲して，やや上外方に開きながら端部にいたる。端部は丸くおさめている。外面は横方向のナデ，内面頸部境までは横方向のナデである。4は頸部上半から口縁部片である。頸部が上方に緩い弧を描きながら立ち上がる頸部の中位あたりであろうと思われ，上方に少しだけ開いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。口縁部周辺は横方向のナデで，外面は縦方向のハケメ，内面は横方向のハケメである。6は胴部中位上半から口縁部である。口径は13.7cmである。胴部は最大胴部が器体のやや下方にある卵形と思われ，胴部中位から斜め上方内側に延びて頸部にいたる。頸部はく字形に強く屈曲し，短く外側に外反気味に斜め上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。胴部外面は縦方向のハケメ，頸部から口縁部はヨコナデ，胴部内面はハケメをした後にヘラ削りを施す。

1・3・5・7は甕形土器である。1は胴部下半から口縁部である。復元口径は25.6cm，復元胴部径は33.8cmである。胴部は球胴形である。頸部は緩くく字形に屈曲し，外側に少しだけ開き気味に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。胴部外面に板ナデが，胴部内面はナデである。3は胴部上半から口縁部片である。胴部上半はやや内側に弧を描きながら頸部屈曲部にいたる。頸部はく字形に緩く屈曲し斜め外側上方にやや外湾しつつ延びて端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。調整は外面頸部以下はナデ，頸部から口縁部はヨコナデ，内面頸部以下はヘラ削り後ナデである。5は頸部から口縁部である。復元口径は16.3cmである。頸部はく字形に緩く屈曲し，やや外側に開きつつまっすぐ立ち上がり口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。外面頸部はハケメを施し，一部についてはその上をなでている。口縁部は横方向のナデである。7は頸部から口縁部片である。頸部からほぼ真っすぐに上方に立ち上がり，口縁端部付近で外側に広がって口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。口縁端部付近は横方向のナデ，頸部外面は縦方向のハケメ，頸部内面は横方向のハケメである。

8は甑である。口縁部片である。少しだけ外側に開きながらまっすぐ上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。胴部外面は縦方向のハケメ，口縁部はヨコナデ，胴部内面は横方向のハケメである。

9・10は椀形土器である。9は完形品である。口径は7.8cm，器高は7.0cmである。口縁部の



第26図　浅谷山1号遺跡出土遺物実測図（1）（1：3）

直下に径５mmの小孔が対向するように穿たれている。底部は歪ながらも丸底で，体部は緩やかに弧を描いて上方に延びて口縁端部にいたる。小孔部分から上方に短く延びて端部にいたる。端部はやや角張気味におさめている。底部から胴部外面は粗いナデ，口縁部は横方向のナデ，内面は横方向のナデである。10は底部から口縁部である。復元口径8.8cm，器高6.2cmである。底部はやや丸みを持つ平底で，体部は外側に少し開いて上方に延び胴部中位付近で内側に少しだけ屈折して頸部にいたる。頸部は外側に短く外反して口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめる。底部外面はナデ，胴部はハケメ，口縁部は横方向のナデ，口縁部以下の内面は削り後でなでている。

11は手捏土器である。底部から口縁部である。復元口径5.0cm，器高2.3cmである。底部は緩い丸底で，体部は斜め外側に向かってやや内湾しつつ延びて端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめている。調整はナデである。

12は高坏である。脚部下半から脚端部である。復元脚径は12.2cmである。脚部下半は強く外側にラッパ上に広がり，脚端部にいたる。脚端部は角張気味におさめている。外面はハケメ後ナデ，脚端部から内面はナデである。

18は椀である。口縁部である。復元口径17.4cmである。体部から口縁部である。体部は外が斜め上方に内湾しつつ緩やかな弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。調整は回転ナデである。

13～15は杯蓋で，いずれも天井部から口縁部片である。13は天井部が少しだけ丸みを持ち，体部は斜め外側下方に真っ直ぐのびて口縁直上で短く垂下して口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。天井部はヘラ切り，以下は回転ナデである。14は天井部は概ね平らで，外側下方に弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめている。天井部外面はヘラ削り後一部ナデ，体部は回転ナデ，天井部内面中央に定方向のナデを施す。15は天井部はほぼ平らと思われ，体部は下方斜めに向けて緩やかに弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は少し角張り気味におさめている。天井部外面はヘラ削り後ナデ，体部から口縁部は回転ナデ，天井部内面中央に定方向のナデがある。

16は杯身である。底部から口縁部である。復元口径11.9cm，復元受け部径14.5cm，器高3.9cm，受け部高0.9cmである。底部は平底気味で，体部は斜め上方に緩やかに弧を描いて受け部にいたる。受け部は外にわずかに延びて端部を丸くおさめている。口縁部は受け部から内側上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部はやや尖り気味におさめている。底部外面はヘラ切りしたあとナデ，体部から口縁部は回転ナデ，底部内面中央に定方向のナデが施される。

17は高坏である。脚柱部から坏部である。口径は13.2cm，受け部径14.8cm，受け部高1.0cm，脚柱径3.7cmである。坏部底部はやや丸みを帯びている。体部は外側上方に緩やかに延びて受け部にいたる。受け部は外側に水平方向に短くのび，断面は三角形となり端部は尖りぎみにおさめている。口縁部は若干外反しつつ，ほぼ垂直に立ち上がって口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめている。坏部底部外面はヘラ削り後ナデ，体部から口縁部は回転ナデ，底部内面中央に定方向のナデを施す。

19 は無頸壺で，口縁部片である。斜め上方内側に少し傾斜して直線的に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめている。外面は平行叩きが，内面は横方向のナデである。

ＳＢ２（20 ～ 24）

弥生土器（24）と須恵器（20 ～ 23）が出土している。

20・21 は杯蓋である。20 は天井部から口縁部である。口径 12.8cm，器高 3.5cm である。天井部はほぼ平である。体部は弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部はやや尖り気味におさめている。天井部外面はヘラ削り，体部は回転ナデ，天井部内面に定方向のナデがある。21 は天井部から口縁部である。器体の歪みが著しい。天井部は中央部が窪んでいる。体部は弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。天井部外面はヘラ削り，体部から口縁部は回転ナデ，天井部内面は定方向のナデを施している。

22･23 は杯身である。22 は口縁部片である。受け部は外側に水平に延びて端部をやや尖り気味におさめている。口縁部は受け部からやや斜め内側方向に真っ直ぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめている。調整は回転ナデである。23 は口縁部片である。外側に開き気味に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。調整は回転ナデである。

24 は壺形土器もしくは甕形土器の底部片である。底部は平底で，体部は外側斜め上方に延びる。底部外面はナデ，体部外面はハケメ，内面はナデである。体部外面にススが付着している。

ＳＢ３（25）

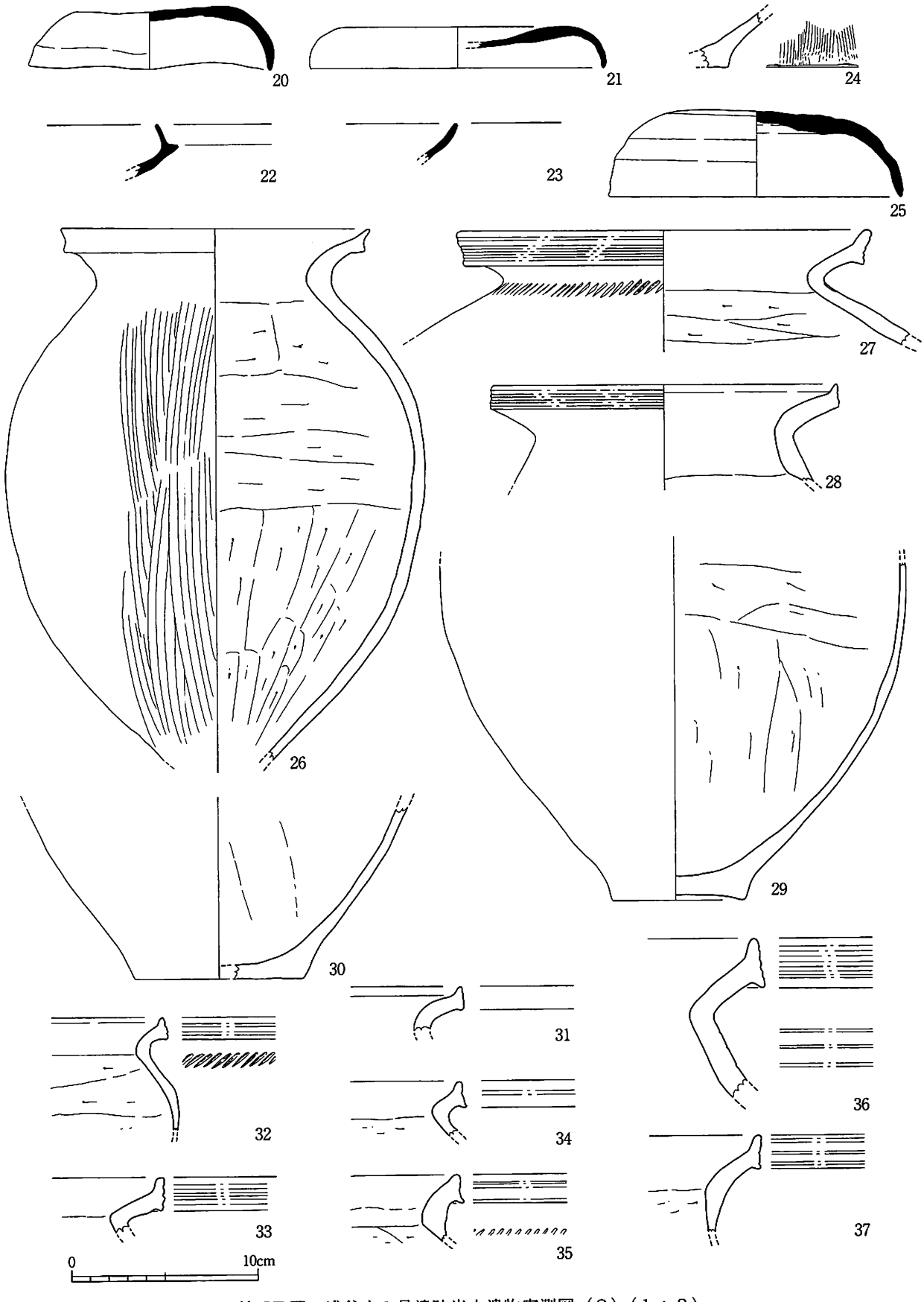
須恵器杯蓋が出土している。口径 15.5cm，器高 4.7cm である。天井部は少し丸みを持つ。体部は内側に弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめている。天井部外面はヘラ削り，体部から口縁部は回転ナデ，天井部内面は定方向のナデである。

ＳＢ４（26 ～ 56）

弥生土器（26 ～ 55）と土師質土器（56）が出土している。

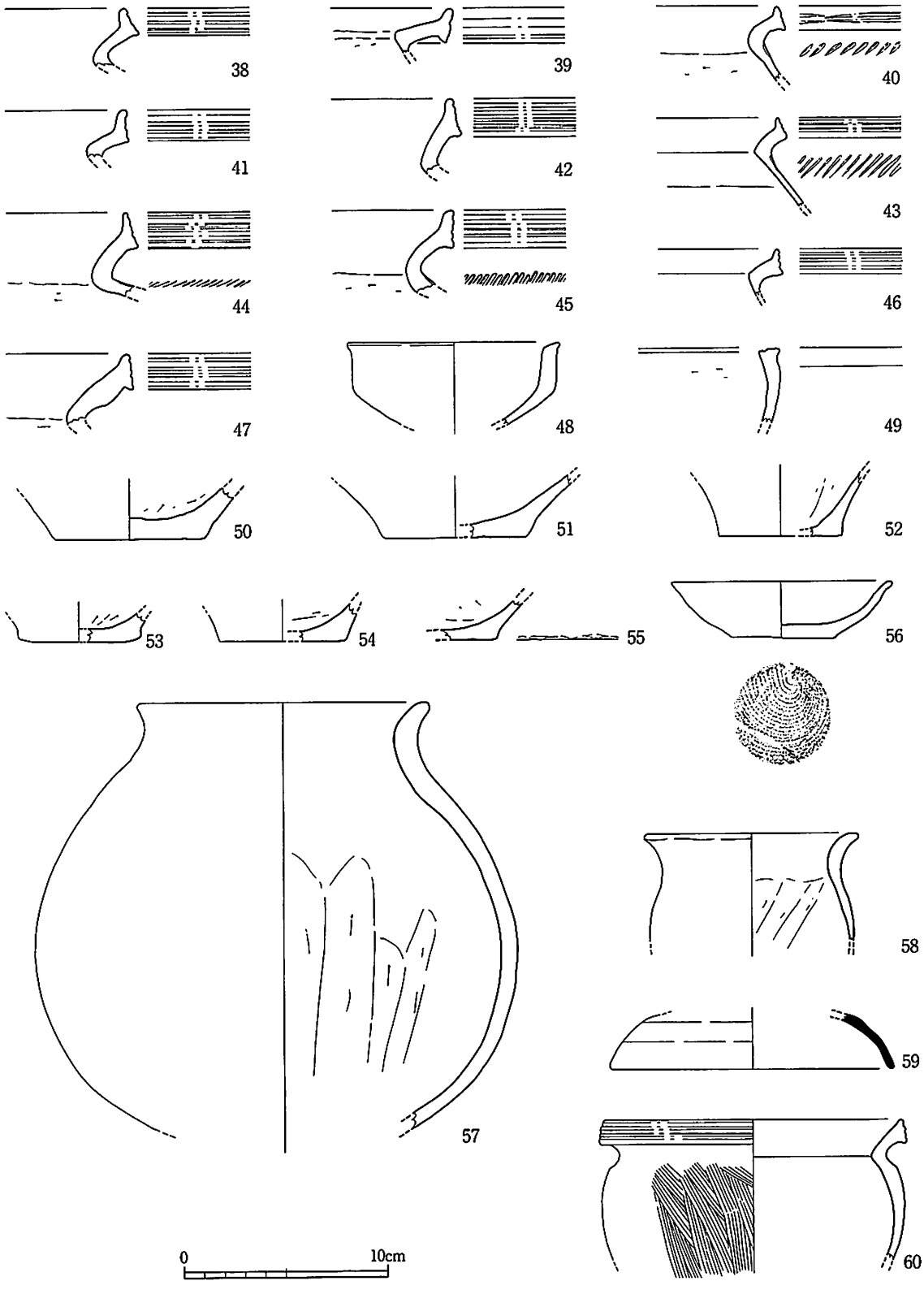
28・31・36・37 は壺形土器である。28 は頸部から口縁部である。復元口径 18.6cm である。頸部はく字形に鋭く屈折して，外側に開いて口縁部にいたる。口縁部は上方に若干拡張しており，端部は尖り気味におさめている。口縁部には凹線を３条巡らせている。調整については不明である。31 は口縁部片である。強く外反しており，端部を上方に拡張している。口縁端部は尖り気味におさめている。調整は横方向のナデである。36 は胴部上半から口縁部片である。胴部はやや内傾しつつ上方に延びて頸部にいたる。胴部には凹線が３条巡っている。頸部はく字形に屈折する。口縁部は上方及び下方に拡張されており，凹線が４条巡っている。拡張された端部は上方は丸くおさめ，下方は若干角張気味におさめている。胴部上半から口縁部は横方向のナデで調整している。37 は頸部上半から口縁部片である。頸部は斜め上方に緩やかにのびて口縁部にいたる。口縁部は上方及び下方に拡張している。口縁部には凹線が３条巡る。拡張された口縁端部はいずれも丸くおさめている。頸部外面から口縁部内面は横方向のナデ，頸部内面以下はヘラ削りである。

26･27･32 ～ 35･38 ～ 47 は甕形土器である。26 は胴部下半から口縁部である。口径は 16.5cm，復元胴部径は 22.4cm である。胴部形状は球体を上下に伸ばしたような長胴形で最大胴部が器体中



第27図　浅谷山1号遺跡出土遺物実測図（2）（1：3）

央から少し上位にある。頸部はくの字形に屈曲して，外側に強く開いて口縁部にいたる。口縁部は上方に少し拡張しており，口縁外面は少し窪む。口縁端部は尖り気味におさめている。胴部外面は縦方向のハケメ，頸部から口縁部はヨコナデ，頸部内面下半から胴部中位にかけては横方向ヘラ削り，胴部内面中以下は縦方向のヘラ削りである。27 は胴部上半から口縁部である。復元口径は 21.5cm である。胴部上半は内側に強く窄まりながら頸部にいたる。頸部はく字形に強く屈曲し，外側に開いて口縁部にいたる。屈曲部の直下に連続刺突文を巡らす。口縁部は上方と下方に拡張している。口縁部外面に凹線が 4 条巡る。拡張した口縁端部の上面には平たい端面を持つ。下方の端部は角張気味におさめている。胴部外面から口縁部内面は横方向のナデ，頸部内面以下はヘラ削りである。32 は胴部中位から口縁部である。胴部は球形と思われ，緩やかに内傾しながら頸部にいたる。頸部直下に連続刺突文を巡らせる。頸部はくの字に屈曲し，外側に強く開いて口縁部にいたる。口縁部は上方に拡張され，凹線が二条巡る。端部は尖り気味におさめている。口縁部外面はナデ，口縁部内面はヨコナデ，頸部内面はヘラ削り後一部なでている。33 は頸部から口縁部片である。頸部はく字形に屈曲し，外側に強く開いて真っ直ぐ延び口縁部にいたる。口縁部は上方に拡張している。凹線が 3 条巡る。口縁端部は丸くおさめている。調整は横方向のナデである。34 は頸部から口縁部片である。頸部はく字形に屈曲して，斜め上方に短く延びて口縁部にいたる。口縁部は上下に拡張されている。凹線が 1 条巡る。下方端部は尖り気味におさめており，上方端部は丸くおさめている。頸部外面から口縁部内面にかけてはヨコナデ，頸部内面はヘラ削りである。35 は頸部から口縁部片である。頸部はほぼ垂直に延びて口縁部にいたる。胴部境には連続刺突文が巡る。口縁部は下方にわずかに拡張され，拡張部分が若干窪む。拡張した端部を尖り気味におさめている。口縁部はヨコナデ，頸部内面はヘラ削りである。38 は頸部から口縁部である。頸部はく字形に緩く屈曲し，斜め上方に延びて口縁部にいたる。口縁部は上方に拡張され，凹線が三条巡る。拡張部は若干内側に真っ直ぐ立ち上がる。端部は丸くおさめている。調整は横方向のナデである。39 は頸部上半から口縁部片である。頸部は外側に強く開いて口縁部にいたる。口縁部は上下に拡張し，凹線が二条巡る。上方に拡張した端部は丸く，下方に拡張した端部はやや尖り気味におさめている。調整は横方向のナデである。40 は頸部から口縁部片である。頸部はく字形に緩く屈曲し，外側に開いて口縁部にいたる。口縁部は上方に拡張され，凹線が 2 条巡る。口縁端部は少し尖り気味におさめている。頸部直下に連続刺突文が巡っている。頸部外面から口縁部内面は横方向のナデ，頸部内面以下はヘラ削りである。41 は頸部上半から口縁部片である。頸部は外側に強く開いて，口縁部にいたる。口縁部は上方に拡張され，凹線が 4 条巡る。拡張部はほぼ垂直に立ち上がり，端部を丸くおさめている。調整は横方向のナデである。42 は頸部上半から口縁部片である。頸部は若干外側に開きつつ上方に延びて口縁部にいたる。口縁部は上下に拡張され，凹線が 5 条巡る。端部は丸くおさめている。調整は横方向のナデである。43 は胴部上半から口縁部片である。胴部は斜め内側に直線的に延びて頸部にいたる。頸部直下に連続刺突文が巡っている。頸部はく字形に緩く屈曲し，外側斜め上方に延びて口縁部にいたる。口縁部は上方に拡張され，凹線が 3 条巡る。口縁端部は尖り気味におさめている。口縁部内面は



第28図　浅谷山1号遺跡出土遺物実測図（3）（1：3）

横方向のナデ，頸部内面以下はヘラ削りである。44 は頸部から口縁部片である。頸部はく字形に緩く屈曲し，外側斜め上方に延びて口縁部にいたる。頸部直下に連続刺突文が巡る。口縁部は上方に拡張されて，凹線が５条めぐる。調整は頸部外面から口縁部内面は横方向のナデ，頸部内面以下はヘラ削りである。45 は頸部から口縁部片である。頸部はく字形に緩く屈曲し，外側斜め上方に開いて口縁部にいたる。頸部直下に連続刺突文が巡る。口縁部は上方に拡張され，凹線が五条巡る。頸部外面から口縁部内面は横方向のナデ，頸部内面以下はヘラ削りである。46 は頸部から口縁部である。頸部は強く外側に開いて口縁部にいたる。口縁部は上方に拡張され，凹線が３条巡る。頸部外面から口縁部内面は横方向のなで，頸部内面以下はヘラ削り後ナデである。47 は頸部上半から口縁部片である。頸部は外側斜め上方に延びて口縁部にいたる。口縁部は端部を上下に拡張し，凹線が４条巡る。頸部外面から口縁部内面は横方向のなで，頸部内面以下はヘラ削りである。

48 は高坏の坏部体部から口縁部である。復元口径は 10.3cm である。体部はハ字形に外側斜め上方に延びる。頸部付近で内側に屈折して垂直に立ち上がり口縁部へいたる。口縁部は外側に若干拡張され，端面をなす。端部は尖り気味におさめる。頸部外面から内面は横方向のナデである。

49 は椀の口縁部片である。若干内傾しつつほぼ垂直に立ち上がり，外方に若干拡張される。口縁部は端面をなし，凹線が２条巡る。外面は横方向のなで，内面はヘラ削り後ナデである。

29・30・50 ～ 54 は壺形土器または甕形土器の底部である。29 は底部から胴部中位である。底部径 7.2cm である。底部は若干くぼみ気味の平底である。胴部はやや長胴型である。底部外面はナデ，胴部は中位より上が横方向のヘラ削り，以下は縦方向のヘラ削りである。30 は底部から胴部下半である。底部径 9.1cm である。平底で，胴部は斜め上方へ緩やかに弧を描いて立ち上がる。底部外面はナデ，内面はヘラ削り後ナデである。

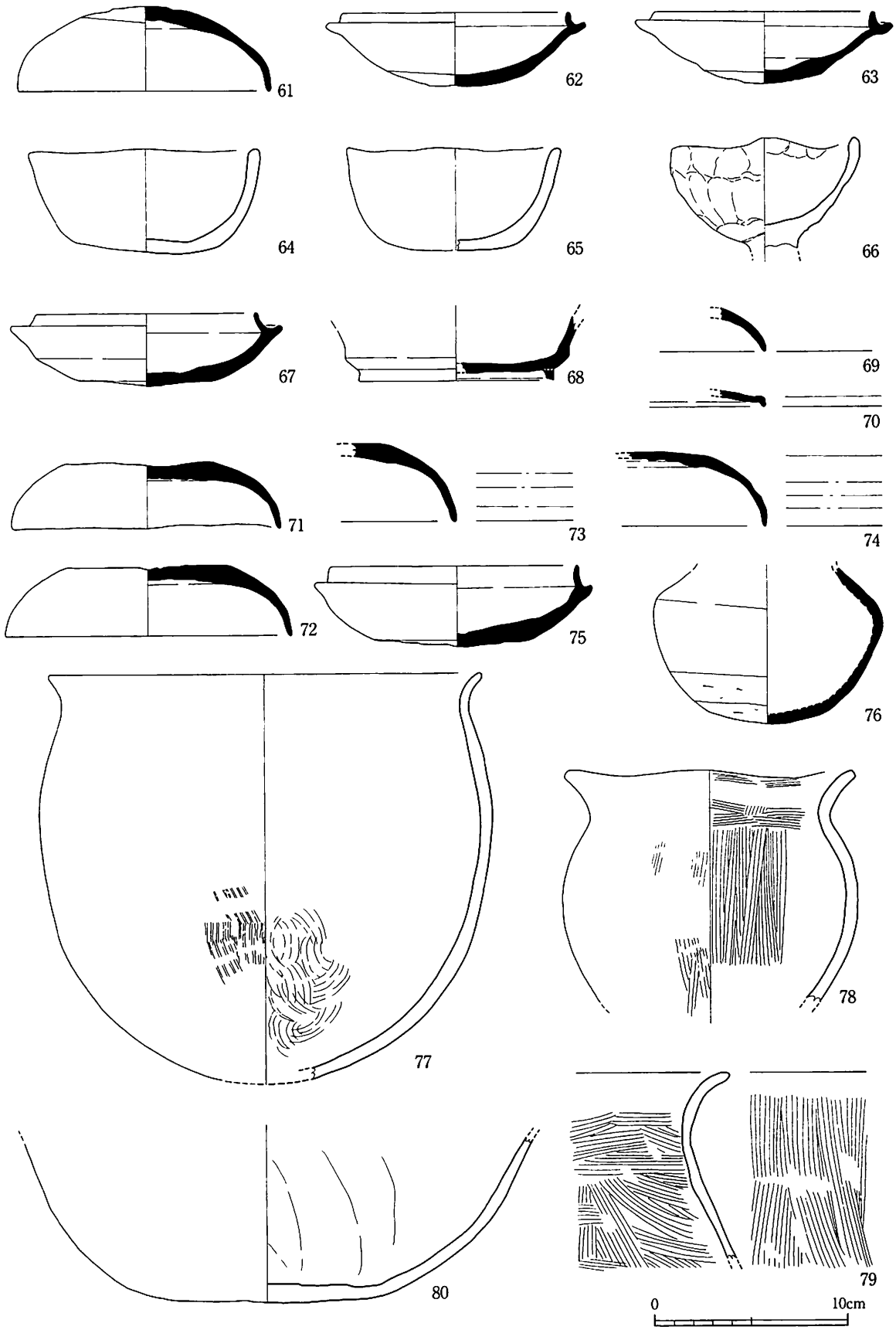
50 は底部から胴部下半である。復元底径 7.5cm である。平底で，胴部は緩やかに立ち上がる。外面はナデ，内面はヘラ削りである。底部接地面の少し上の胴部にススが付着する。51 は底部から胴部下半である。復元底径は 7.0cm である。底部は平底である。体部は緩く斜め上方に広がる。外面はナデ，内面は粗いナデである。52 は底部から胴部下半である。復元底径 6.1cm である。底部は平底である。体部は斜め上方に延びる。外面はナデ，内面はヘラ削り後ナデである。53 は底部である。復元底径 6.0cm である。平底である。外面はナデ，内面はヘラ削りである。54 は底部である。復元底径 6.2cm である。平底である。外面はナデ，内面はヘラ削りである。胴部外面底部との接地面より若干高いところからススの付着が認められる。55 は底部片である。平底である。外面はナデ，内面はヘラ削り後ナデである。

56 は皿の完形品である。口径 10.5cm，底部径 5.1cm，器高 2.8cm である。底部は平底である。体部は外上方に緩やかに延びて口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。底部外面は回転糸切り，体部以下は回転ナデである。

ＳＢ５（57 ～ 59）

土師器（57・58）と須恵器（59）が出土している。

57 は壺形土器の胴部下半から口縁部である。口径は 13.8cm，胴部径は 23.6cm である。胴部は



第29図　浅谷山1号遺跡出土遺物実測図（4）（1：3）

球体形である。頸部は緩く屈曲して，やや外反しつつ上方に延びて，口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。頸部内面以下はヘラ削りである。

58は甕形土器である。胴部上半から口縁部である。復元口径は10.2cmである。胴部は少し内側に傾斜して，頸部にいたる。頸部は緩く外側に屈曲して口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。胴部外面はナデ，口縁部はヨコナデ，頸部内面以下はヘラ削りである。

59は杯蓋である。体部から口縁部である。復元口径は13.5cmである。体部は緩やかな弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。調整は回転ナデである。

ＳＢ８（60）

弥生土器の甕形土器が出土している。胴部中位から口縁部である。復元口径14.4cmである。胴部は最大径が口縁の近くにある半月状である。頸部はく字形に緩く屈曲し，斜め上方に延びて口縁部にいたる。口縁部は下方に拡張され，３条凹線が巡る。胴部外面はハケメ，口縁部はヨコナデ，頸部内面以下はヘラ削り後ナデである。

ＳＫ１（61～65）

須恵器（61～63）と土師器（64・65）が出土している。

61は杯蓋である。ほぼ完形品である。口径12.9cm，器高4.5cmである。天井部は丸みを持ち，体部は緩やかな弧を描いて口縁部にいたる。口縁部は端部付近で垂直に曲がる。端部は丸くおさめている。天井部外面はヘラ削り，体部以下は回転ナデ，天井部中央に定方向のナデがある。

62・63は杯身である。ともに完形品である。62は口径11.6cm，器高3.8cm，受け部径13.6cm，受け部高0.6cmである。底部は丸みを持つ。体部は緩やかに弧を描いて斜め上方に延びる。受け部は水平方向に内湾して延び，端部を角張り気味におさめる。口縁部はほぼ垂直に短く立ち上がり，端部を丸くおさめる。底部外面はヘラ削り，体部から口縁部は回転ナデ，底部内面中央に定方向のナデがある。63は口径11.2cm，器高3.7cm，受け部径13.3cm，受け部高0.7cmである。底部は丸みをもち，体部は斜め上方に真っ直ぐ延びて受け部にいたる。受け部は水平方向にやや内湾して延び，端部を丸くおさめる。口縁部は垂直に短く立ち上がり端部をやや尖り気味におさめる。底部外面はヘラ削り，体部から口縁部は回転ナデ，底部内面中央に定方向のナデがある。

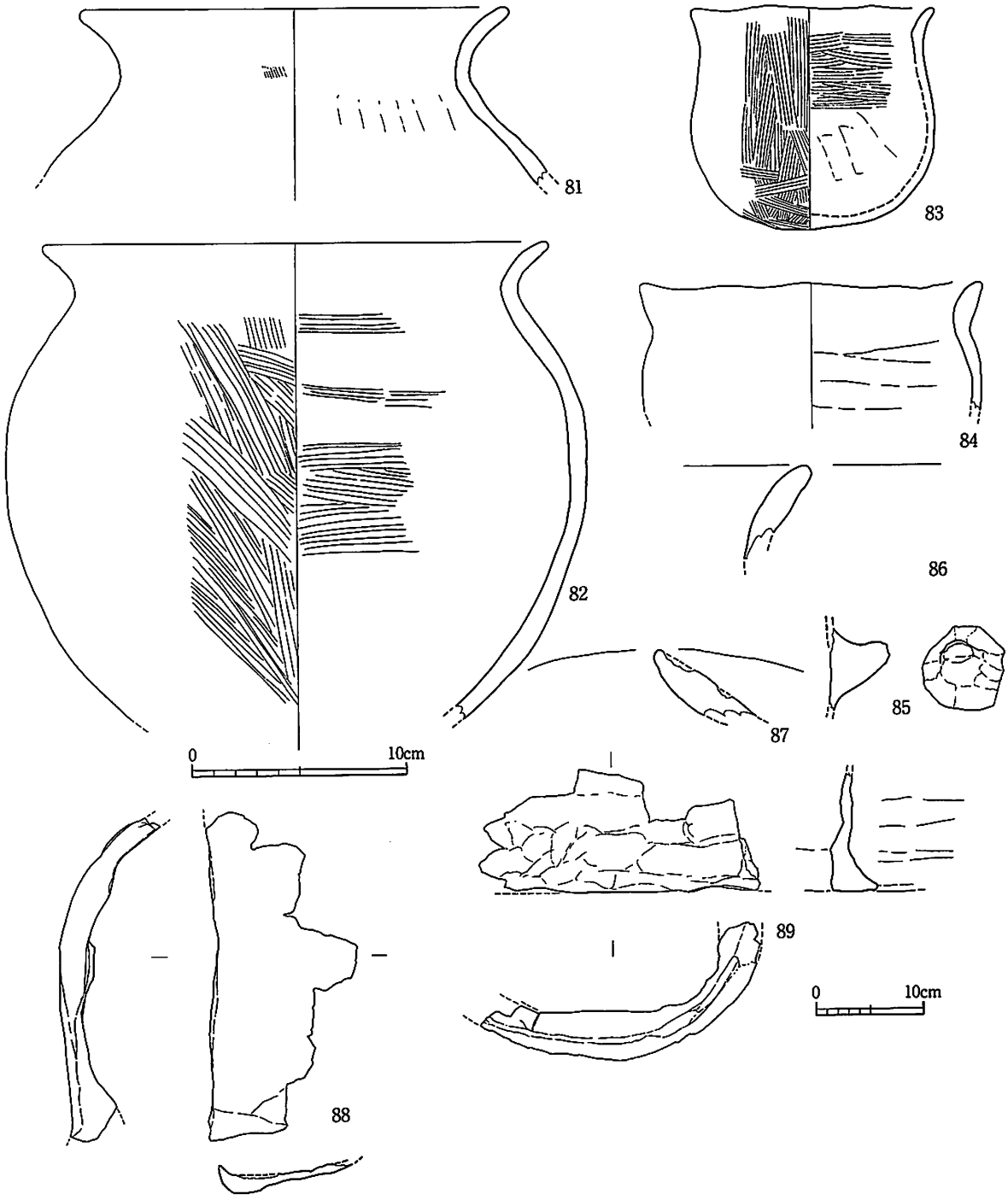
64・65は椀である。完形品である。64は口径11.6cm，器高5.5cmである。底部は若干丸みを持つ平底で，体部はほぼ垂直方向に立ち上がり，口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。65は口径10.6cm，器高5.3cmである。底部はほぼ平底で，体部は垂直方向に内湾しつつ立ち上がり，口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。

ＳＫ５（66）

土師器の手捏ね土器が出土した。高坏と思われ，脚柱部上半から口縁部である。口径は9.5cmである。坏底部は丸く，体部は弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめているが，高さは一定していない。外面は指ナデ，内面はヨコナデである。

ＳＸ１（67）

須恵器杯身が出土した。完形品である。口径は11.2cm，器高3.7cm，受け部径14.0cm，受け部



第30図　浅谷山1号遺跡出土遺物実測図（5）（1：3，1：6）

高 0.8cm である。底部はわずかに丸みを帯びており，体部は緩やかに弧を描いて受け部にいたる。受け部は短く斜め上方に延びて，端部をやや角張気味におさめる。口縁部はやや内側に内湾気味に立ち上がり，端部を丸くおさめる。底部外面はヘラ削り，体部から口縁部は回転ナデ，底部内面中央は定方向のナデである。

ＳＸ３（68）

須恵器杯身が出土した。底部から体部下半である。復元底径 10.0cm，高台高 0.6cm である。底部は平底である。高台は断面四角形である。体部は垂直方向に立ち上がる。底部外面はヘラ削り，高台は貼り付けで回転ナデ，体部は回転ナデである。

ＳＸ４（69 ～ 70）

須恵器杯蓋（69・70）が出土している。口縁部片である。69 は体部から緩やかな弧を描く。口縁端部は尖り気味におさめる。調整は回転ナデである。70 は平坦な天井から続く体部で，口縁端部を折り返すように垂下させている。口縁端部は尖り気味におさめる。調整は回転ナデである。

ＳＸ６（71 ～ 89）

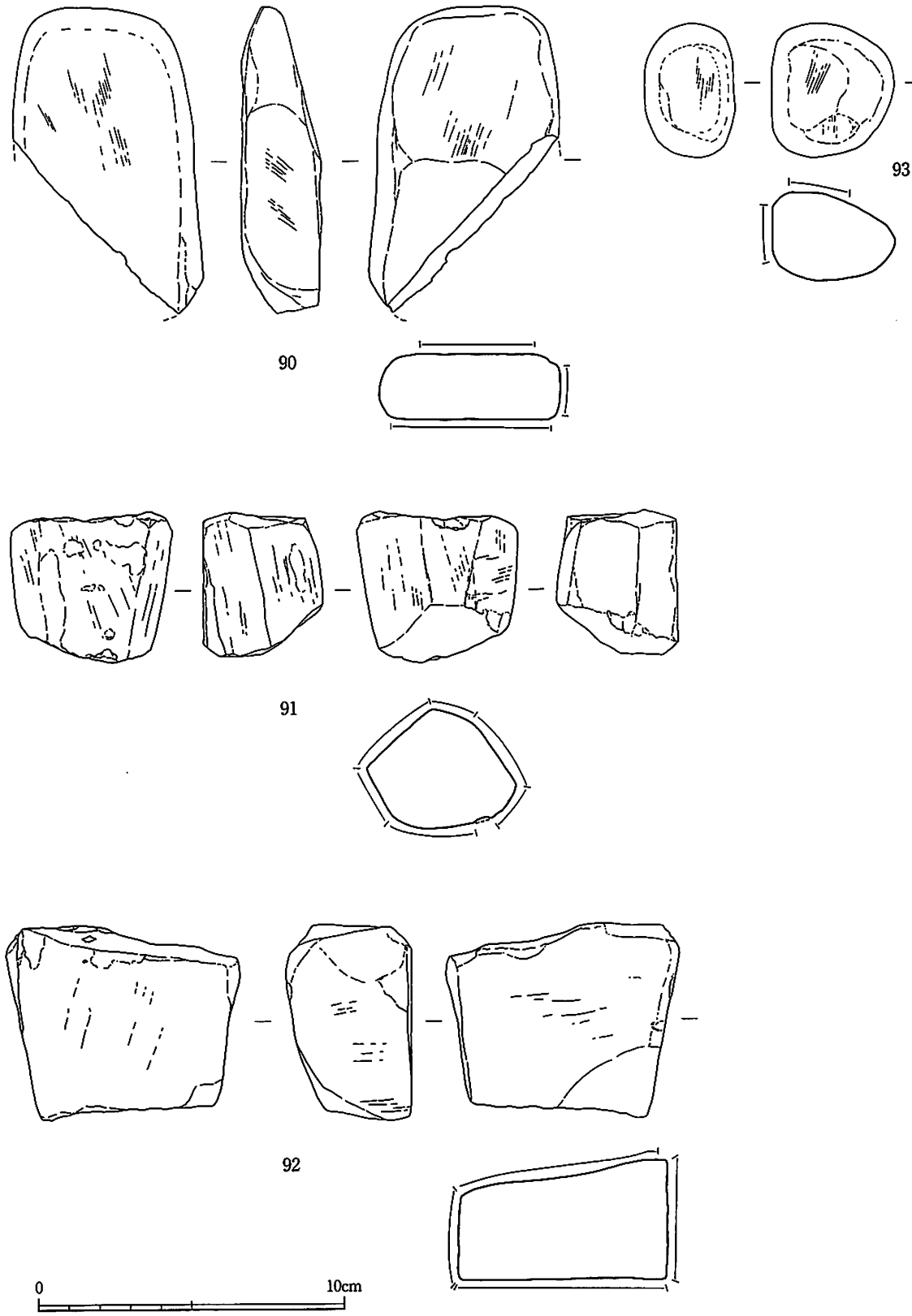
須恵器（71 ～ 76）と土師器（77 ～ 89）が出土している。

71 ～ 74 は杯蓋である。71 は天井部から口縁部である。復元口径 13.8cm，器高 3.4cm である。天井部は平らである。体部は緩やかに弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめる。天井部外面はヘラ削り，体部から口縁部は回転ナデである。72 はほぼ完形品である。口径は 14.6cm，器高 3.6cm である。天井部は平坦で，体部は緩やかに弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめる。天井部外面はヘラ削り，体部から口縁部は回転ナデである。73 は天井部から口縁部片である。体部は緩やかに弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめる。天井部外面はヘラ削り，体部から口縁部は回転ナデ，天井部内面は定方向のナデである。74 は天井部から口縁部片である。天井部はわずかに丸みを持つ。体部は緩やかに弧を描いて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味におさめる。天井部外面はヘラ削り，体部から口縁部は回転ナデである。

75 は杯身である。ほぼ完形品である。口径は 12.6cm，器高は 4.1cm，受け部径 14.8cm，受け部高 1.1cm である。底部は少し丸みを持つ。体部は緩やかに弧を描いて受け部にいたる。受け部は外側にわずかに延びて端部を尖り気味におさめている。口縁部は若干内湾しつつ垂直に立ち上がり，端部を丸くおさめている。底部外面はヘラ削り，体部から口縁部は及び内面は回転ナデである。

76 は坩である。底部から頸部付近である。胴部径は 11.8cm である。底部は丸みを持っている。胴部は中位より若干上に最大胴部がある肩の張った胴形で，胴部上半から頸部はく字形にやや窄まって頸部にいたる。底部外面はヘラ削り，胴部外面 1/3 より上は回転ナデ，内面は回転ナデである。

79・81 は壺形土器である。胴部上半から口縁部片である。頸部付近でわずかに外反して口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。口縁部周辺はヨコナデ，外面は縦方向のハケメ，内面は横方向のハケメである。81 は胴部上半から口縁部である。復元口径は 19.7cm である。頸部はく字形に屈曲し外側斜め上方へやや外反して口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。調整等は不明である。



第31図　浅谷山1号遺跡出土遺物実測図（6）（1：2）

77・78・82～84は甕形土器である。77は底部から口縁部である。復元口径は22.4cm，復元胴部径は23.6cmである。胴部がわずかに口縁部よりも大きい。胴部は球体状である。頸部でく字形に屈曲して外側斜め上方に少し延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。調整は横方向のナデであるが，胴部外面に平行叩きの痕が，内面に同心円叩きの痕が一部残る。生焼けの須恵器の可能性もある。78は胴部下半から口縁部である。復元口径は14.6cm，復元胴部径は16.2cmである。胴部は倒卵形である。頸部はくの字に屈曲して外側斜め上方にやや外反しつつ延びて口縁端部にいたる。口縁は角張気味におさめる。口縁の高さは一定していない。胴部外面は縦方向のハケメ，口縁部内面は横方向のハケメ，頸部以下は縦方向のハケメである。82は胴部下半から口縁部である。復元口径23.0cm，復元胴部径27.1cmである。胴部は最大胴部が中央部の若干上位に位置する倒卵形をなす。頸部はく字形に緩く屈曲して，外側に真っ直ぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。胴部外面は斜め方向のハケメ，口縁部はヨコナデ，胴部内面は横方向のハケメで，一部にヨコナデが施される。また胴部から口縁部直下にかけてはススが付着していた。83はほぼ完形品である。底部は丸底で，胴部はやや内傾するもののほぼ垂直に立ち上がり，頸部でわずかに外側に屈曲して口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。底部から頸部はハケメ，口縁部はヨコナデ，胴部上半内面は横方向のハケメ，胴部中位以下は板ナデである。84は胴部中位から口縁部である。復元口径は15.6cmである。頸部でわずかに屈曲して外側斜め上方に延びて口縁端部にたる。口縁端部はやや尖り気味におさめる。口縁部は若干内側に肥厚する。胴部外面上半から頸部はナデ，口縁部はヨコナデ，頸部内面以下はナデである。

80は底部である。底部から胴部下半である。底部はやや丸みを持つ平底である。胴部は緩やかに弧を描いて胴部中位にいたる。底部外面はナデ，胴部内面は横ナデである。

85は把手である。長さ5.2cmである。先端が少し曲がって尖る角状を呈している。手捏ねで全体的に粗い造りである。竈形土器の把手とも考えられる。

86～89は竈形土器である。同一個体と思われる。全形を窺え得ないが，86は釜孔付近，87は焚き口上部の庇，88は焚き口の左側，89は奥壁側と思われる。度重なる使用のためか器壁は剥がれやすくなっており，遺存状況は不良である。

B　石器

90は磨り石である。ＳＢ１の床面付近から出土している。長さ20.1cm，幅12.1cm，厚さ4.2cm，重さ1558.1ｇである。長方体の短辺側の一部を欠損するが，３面に顕著な擦痕が観察できる。

91・92は砥石である。91はＳＢ４の床面近くから出土している。長さ9.4cm，幅10.6cm，厚さ7.7cm，重さ1084.2ｇである。６角柱状の石材の各面に擦痕が残っている。上下端を欠失する。92はＳＢ４の住居跡のほぼ中央にある土坑内埋土中からの出土である。長さ15.4cm，幅12.8cm，厚さ7.7cm，重さ2142.1ｇである。四面に擦痕が残っている。

93は磨石である。ＳＢ７のピット内から出土した。長さ7.8cm，幅8.0cm，厚さ5.8cm，重さ618.4ｇである。こぶし大の握りやすい球体状の石材である。一部に擦痕が残っていた。

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
1	土師器	甕	胴部中位～口縁部	復元口径256mm，復元胴部径338mm	黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SB1	胴部中位下半スス付着
2	土師器	壺	口縁部	復元口径126mm	黄褐色	微砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SB1	
3	土師器	甕	胴部上半～口縁部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	良い	普通	SB1	
4	土師器	壺	口縁部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SB1	
5	土師器	甕	口縁部	復元口径163mm	黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	やや不良	SB1	
6	土師器	壺	胴部上半～口縁部	口径137mm	黄褐色	微砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SB1	
7	土師器	甕	口縁部		黒褐色	微砂粒を含む	普通	普通	SB1	
8	土師器	甑	口縁部		黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや良い	SB1	
9	土師器	椀	底部～口縁部	口径78mm，器高70mm	淡黄白色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SB1	手捏ね土器
10	土師器	椀	底部～口縁部	復元口径88mm，器高62mm	淡黄橙色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SB1	
11	土師器	手捏ね土器	底部～口縁部	復元口径50mm，器高23mm	黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB1	
12	土師器	高坏	脚部	復元脚径122mm	黄褐色	砂粒を割と多く含む	やや甘い	やや不良	SB1	
13	須恵器	杯蓋	天井～口縁部		青灰色	砂粒を割と多く含む	普通	普通	SB1	
14	須恵器	杯蓋	天井～口縁部		青灰色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB1	
15	須恵器	杯蓋	口縁部		淡黄白色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SB1	
16	須恵器	杯身	天井～口縁部	復元口径119mm，器高39mm，復元受け部径145mm，受け部高9mm	淡青灰色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SB1	
17	須恵器	高坏		口径132mm，受け部径148mm，受け部高10mm，脚柱径37mm	黄白色	砂粒を割と多く含む	やや甘い	やや不良	SB1	
18	土師器	椀	体部～口縁部	復元口径174mm	淡黄褐色	微砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SB1	
19	須恵器	無頸壺	口縁部		淡青灰色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SB1	
20	須恵器	杯蓋	天井～口縁部	口径128mm，器高35mm	青灰色	砂粒を割と多く含む	良い	良い	SB2	
21	須恵器	杯蓋	天井～口縁部	復元口径155mm，器高22mm	淡青白色	砂粒を少し含む	良い	良い	SB2	
22	須恵器	杯身	口縁部		淡黄白色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB2	
23	須恵器	杯身	口縁部		灰白色	微砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SB2	
24	弥生土器		底部		淡黄褐色	砂粒を割と多く含む	普通	普通	SB2	
25	須恵器	杯身	底部～口縁部	口径155mm，器高47mm	黄白色	砂粒を少し含む	甘い	不良	SB3	
26	弥生土器	甕	胴部下半～口縁部	口径165mm，復元胴部径224mm	黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB4	
27	弥生土器	甕	口縁部	復元口径215mm	淡黄褐色	砂粒を割と多く含む	普通	普通	SB4	
28	弥生土器	壺	口縁部	復元口径186mm	淡黄褐色	微砂粒を割と多く含む	やや甘い	不良	SB4	
29	弥生土器		底部～胴部中位	底部径72mm	淡黄褐色	砂粒を割と多く含む	普通	やや不良	SB4	
30	弥生土器		底部～胴部下半	底部径91mm	黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB4	
31	弥生土器	壺	口縁部		黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB4	
32	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	やや不良	SB4	
33	弥生土器	甕	口縁部		淡黒褐色	砂粒を割と多く含む	良い	良い	SB4	凹線３条
34	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒を割と多く含む	普通	普通	SB4	
35	弥生土器	甕	口縁部		黄灰色	砂粒を少し含む	やや良い	普通	SB4	
36	弥生土器	壺	口縁部		淡黄褐色	砂粒を割と多く含む	普通	やや不良	SB4	
37	弥生土器	壺	口縁部		黄褐色	砂粒を割と多く含む	普通	普通	SB4	
38	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SB4	
39	弥生土器	甕	口縁部		淡黒褐色	砂粒を割と多く含む	普通	やや不良	SB4	
40	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	やや良い	やや良い	SB4	
41	弥生土器	甕	口縁部		淡黄白色	砂粒を少し含む	普通	やや良い	SB4	
42	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	微砂粒を含む	やや良い	普通	SB4	
43	弥生土器	壺	口縁部		黄褐色	微砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SB4	
44	弥生土器	甕	口縁部		淡黒褐色	微砂粒を含む	普通	普通	SB4	
45	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒を多く含む	普通	普通	SB4	
46	弥生土器	甕	口縁部		淡黒褐色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SB4	
47	弥生土器	甕	口縁部		黒褐色	砂粒を割と多く含む	普通	やや良い	SB4	
48	弥生土器	高坏	口縁部	復元口径103mm	淡灰白色	微砂粒を割と多く含む	やや甘い	やや不良	SB4	
49	弥生土器	椀	口縁部		淡黄白色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SB4	
50	弥生土器		底部	復元底径75mm	黒褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB4	

第３表　浅谷山１号遺跡出土遺物観察表（１）

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
51	弥生土器		底部	復元底径70mm	淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SB4	
52	弥生土器		底部	復元底径61mm	淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	SB4	
53	弥生土器		底部	復元底径60mm	淡黄褐色	砂粒を割と多く含む	普通	普通	SB4	
54	弥生土器		底部	復元底径62mm	淡黄褐色	砂粒を割と多く含む	やや良い	普通	SB4	
55	弥生土器		底部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SB4	
56	土師質土器	皿	底部～口縁部	口径105mm，底径51mm，28mm	淡黄褐色	微砂粒を少し含む	やや甘い	普通	SB4	
57	土師器	壺	胴部中位～口縁部	口径138mm，胴部径236mm	黄褐色	微砂粒を含む	普通	やや不良	SB5	
58	土師器	甕	胴部上半～口縁部	復元口径102mm	淡黄褐色	微砂粒を少し含む	やや甘い	普通	SB5	
59	須恵器	杯蓋	口縁部	復元口径135mm	淡黄灰色	微砂粒を含む	普通	普通	SB5	
60	弥生土器	甕	胴部～口縁部	復元口径144mm	黒褐色	砂粒を少し含む	良い	良い	SB8	
61	須恵器	杯蓋	天井～口縁部	口径129mm，器高45mm	淡青灰色	砂粒を少し含む	普通	普通	SK1	
62	須恵器	杯身	底部～口縁部	口径116mm，器高38mm，受け部径136mm，受け部高6mm	淡青灰色	砂粒を割と多く含む	普通	普通	SK1	
63	須恵器	杯身	底部～口縁部	口径112mm，受け部径133mm，器高37mm，受け部高7mm	淡青灰色	砂粒を割と多く含む	普通	普通	SK1	
64	土師器	椀	底部～口縁部	口径116mm，器高55mm	黄褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	不良	SK1	
65	土師器	椀	底部～口縁部	口径106mm，器高53mm	黄褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	不良	SK1	
66	土師器	高坏	体部～口縁部	口径95mm	黄褐色	砂粒を含む	普通	やや良い	SK5	手捏ね土器
67	須恵器	杯身	底部～口縁部	口径112mm，受け部径140mm，器高37mm，受け部高8mm	淡青灰色	砂粒を少し含む	普通	普通	SX1	
68	須恵器	杯身	底部～体部	復元底径100mm，高台高6mm	淡青灰色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SX3	
69	須恵器	杯蓋	口縁部		茶褐色	微砂粒を含む	良い	良い	SX4	
70	須恵器	杯蓋	口縁部		淡青灰色	砂粒を少し含む	良い	良い	SX4	
71	須恵器	杯蓋	天井～口縁部	復元口径138mm，器高34mm	淡青灰色	砂粒を含む	普通	良い	SX6	
72	須恵器	杯蓋	天井～口縁部	口径146mm，器高36mm	淡青灰色	砂粒を割と多く含む	普通	普通	SX6	
73	須恵器	杯蓋	口縁部		淡青灰色	微砂粒を割と多く含む	良い	良い	SX6	
74	須恵器	杯蓋	天井～口縁部		黄褐色	微砂粒を少し含む	甘い	やや不良	SX6	
75	須恵器	杯身	底部～口縁部	口径126mm，受け部径148mm，器高41mm，受け部高11mm	淡青白色	微砂粒を少し含む	普通	普通	SX6	
76	須恵器	坩	底部～口縁部	胴部径118mm	淡青灰色	砂粒を割と多く含む	普通	普通	SX6	
77	土師器	甕	底部～口縁部	復元口径224mm，復元胴部径236mm	黄褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SX6	生焼け須恵器？
78	土師器	甕	胴部下半～口縁部	復元口径146mm，復元胴部径162mm	黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	やや不良	SX6	
79	土師器	壺	口縁部		黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SX6	
80	土師器		底部		黒褐色	微砂粒を割と多く含む	普通	普通	SX6	
81	土師器	甕	胴部上半～口縁部	復元口径197mm	黄褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	不良	SX6	
82	土師器	甕	胴部下半～口縁部	復元口径230mm，復元胴部径271mm	黄褐色	微砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	SX6	
83	土師器	甕	底部～口縁部	口径111mm，器高105mm	黒褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SX6	
84	土師器	甕	胴部上半～口縁部	復元口径156mm	淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや良い	SX6	
85	土師器		把手		黄褐色	微砂粒を含む	普通	やや不良	SX6	
86	土師器	竈	口縁部		黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SX6	86～89は同一個体。二次焼成を受けているため器壁は脆い。
87	土師器	竈	庇部		黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SX6	
88	土師器	竈	焚き口部		黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SX6	
89	土師器	竈	脚部		黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	SX6	

第3表　浅谷山1号遺跡出土遺物観察表（2）

（4）ま と め

浅谷山１号遺跡では前述したように竪穴住居跡７，掘立柱建物跡３，土坑５（小型竪穴式石室１，落とし穴２を含む），不明遺構６を検出した。ここでは調査から派生するいくつかの事柄について述べ，まとめにかえることとする。

本遺跡で検出した竪穴住居跡は平面形が円形もしくは楕円形と方形のものに分かれる。出土遺物から見れば前者は弥生時代後半頃，後者は６世紀前半から中頃と推定でき，弥生時代から古墳時代への住居平面形の変遷と一致している。

弥生時代の住居跡ＳＢ４・ＳＢ７はいずれも直径が８ｍ程の規模を持ち，柱穴も６・10本と推定でき，この時期の住居跡としては比較的大きな部類にはいる。南西部分が斜面の自然地形に移行して床面が途中で消滅するＳＢ４の床面積を推定で計算すると約40㎡となり，本間（京間）の畳に換算すれば21畳分になる。

さらに検証するためにここでは庄原市内で発掘調査が実施されたほぼ同時代の集落跡で多くの住居跡を検出した和田原Ｄ地点遺跡[1]と布掛遺跡[2]のデーターを用いて一軒あたりの床面積を算出してみることにする。

和田原遺跡は弥生時代中期～後期末にかけての集落跡で竪穴住居跡が拡張分も含めて67軒確認されている。時期的な変遷過程を省いて単純に判明している住居件数で床面積の平均を出すと約16㎡となる。ここから母群と離れた関係にある床面積が最小のものと30㎡以上のものを除いて平均を求めると約14㎡（本間間換算で7.5畳分）となった。

布掛遺跡は弥生時代中期から古墳時代後期にかけて継続的に営まれた集落跡である。１次と２次の計二回の発掘調査により竪穴住居跡（拡張部分も含む）62軒が確認されている。このうち床面積の判明している住居跡について和田原Ｄ地点遺跡同様に平均値を算出すると19.6㎡となる。このうち分布から離れている40㎡以上の住居跡を除いて再計算すると約17㎡（本間間換算で９畳分）となった。念のため，弥生時代の住居跡に限定すると18.2㎡となったが，この中で分布域から大きくずれる住居跡を除いて再計算すると16.4㎡となった。

以上のように両遺跡から算出した数値は14～16㎡となった。ここでは両遺跡の間の数値である15㎡を平均的な１棟の床面積として使用する。

ところで，かつて大型の竪穴住居について考察した[3]際に算出した同時期の遺跡での一般的な竪穴住居跡のサイズは15～26㎡となったのであるが，15㎡が弥生時代の集落跡からの数値であったことを考えるとこのあたりが妥当な数字なのかも知れない。

この数値を当てはめると本遺跡で検出したＳＢ４は平均的な住居跡の2.6倍の床面積を持つことになる。これら規模の大きな竪穴住居跡については通常の居住という機能のほかに集落内での公共的な施設例えば集会所とか共同作業場なども想定できるが，本遺跡で検出したのはこのクラスの住居跡だけだったので，位置づけや性格については不明といわざるを得ない。

落し穴（陥穴）

落し穴は一般的には丘陵斜面に複数配され，遺物を伴わないのが通例である。その年代については少量の出土遺物やほかの遺構との切り合い関係などから縄文時代とされているものが多い。調査例としては縄文時代の遺跡が多い東日本が数量共に多い。中国地方では日本海側に多いが，中国山地沿いにも散発的であるが検出例が報告されている。平面形は長方形，方形，円形，楕円形など様々な形があり，深さは1.5ｍ程で，壁面は垂直である場合が多い。土坑の底面には溝やピットがあるもの，とくにないものがある。底面には逆茂木状の棒を立て，動物を殺傷したり，飛翔力を削いだりする仕掛けをしていたと考えられている。[4]

庄原市近辺では宮脇遺跡[5]や石谷２号遺跡[6]，岡遺跡[7]，段遺跡[8]，松ヶ迫Ａ地点遺跡[9]，緑岩遺跡[10]などに調査例がある。本遺跡のＳＫ３，ＳＫ４は主軸の方向がほぼ同じ方向で，底面までは1.5ｍ程と深く，土坑壁面はほぼ垂直で，坑底面の中央部あたりに直径20cm程の深いピットが存在する点など落し穴と判断するに十分な状況を示している。遺物は出土していないが，縄文時代頃の落し穴であろう。

小型竪穴式石室

等高線にほぼ並行して構築されているが，天井石及び西側の側石の一部を欠失している。墳丘を確認することはできなかったが，存在したとしても低墳丘であったと思われる。箱形石棺の側石上に一段ないし二段ほど石材を小口積みしたような石室である。時期については土器床に使用した須恵器から６世紀の後半と思われる。

同様の石室は浅谷山東Ｂ地点遺跡SK11[11]（７世紀前半から中葉頃）や馬立第２号古墳埋葬施設[12]（６世紀中頃），月貞寺第30号古墳Ａ・Ｂ主体[13]（五世紀後葉から６世紀前半），上四拾貫第10号古墳Ａ主体部[14]（６世紀前半），上定古墳群３号竪穴式石室[15]（７世紀中葉）などがある。

県内においては５世紀後半から六世紀の前半にかけてこの種の石室が広く分布するが，横穴式石室の導入に伴いほとんど見られなくなる傾向にある。しかしながら，当地域においては依然として採用されており，伝統的な葬法が強く残っているようである。

註

（1）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　『和田原Ｄ地点遺跡』 1999年
（2）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　『布掛遺跡・大仙１号遺跡・大仙２号遺跡発掘調査報告書』 2003年
　財団法人広島県教育事業団　『布掛け遺跡・大槙神遺跡』 2007年
（3）財団法人広島県教育事業団　『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（６） 2008年
（4）今村啓爾　「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究２　－生業－』 雄山閣　1983年
（5）財団法人広島県教育事業団　『宮脇遺跡発掘調査報告』 2004年
（6）未報告，当調査室で2009年に発掘調査を実施。
（7）未報告，当調査室で2008年に発掘調査を実施。
（8）未報告，当調査室で2006年に発掘調査を実施。
（9）広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』 1981年
（10）広島県教育委員会　『緑岩古墳』 1983年
（11）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　『浅谷山東Ｂ地点遺跡・清水３号遺跡』 1998年
（12）註（11）に同じ
（13）広島県教育委員会　「月貞寺古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（１） 1978年
（14）広島県教育委員会　「上四拾貫古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（１） 1978年
（15）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　「上定古墳群の調査」『大判・上定・殿山』 1987年

3　小深遺跡

（1）調査の概要

小深遺跡は広島県庄原市上原町小深に所在する。

遺跡は国兼池の北西にあり，標高317ｍを最高所とする比較的なだらかな丘陵状の山塊から南西に緩やかに伸びた尾根上に位置する。遺跡の東西両側は小さな谷状の地形となっている。

遺跡周辺の地形は高低差のあまりない標高が同じような山や谷が複雑に入り組んだ状況である。現状では周辺に可耕地らしき場所は国兼池を除けば見あたらない。

各調査区の概要

遺跡の調査前の状況は灌木が茂る山林であった。今回の調査地は遺跡の内でも北から南に傾斜する斜面に当たる。公園内の調査ということで，調査区以外の樹木は現状のまま残すこととし，工事部分に限定して調査を実施した。調査区は北側（山側）から南側（谷側）の順にＡ区･Ｂ区･Ｃ区と呼称した。

表土から検出面までは基本的には重機を使用して掘り下げを行い，調査区外の工事済みの土砂置き場に機械で運搬して排土した。検出面までの深さは場所によって異なるが，概ね50～80cm程度であった。Ａ区やＢ区よりもＣ区のほうが表土以下のクロボクの堆積が厚く検出面は深くなった。以上のことから斜面の下側（標高の低い方）が斜面の上側（標高の高い方）よりも相対的に堆積土がよく溜まっていると予想できる。

各々の調査区の遺構検出状況については以下のとおりである。

Ａ区（第33図・図版21ｂ・21ｃ）

今回調査した地点の最も北側に位置する。細長い円弧状の調査区である。性格不明遺構２（ＳＸ１・ＳＸ２）と土坑１（ＳＫ１）を検出している。この他に調査区内から弥生土器が数点出土している。

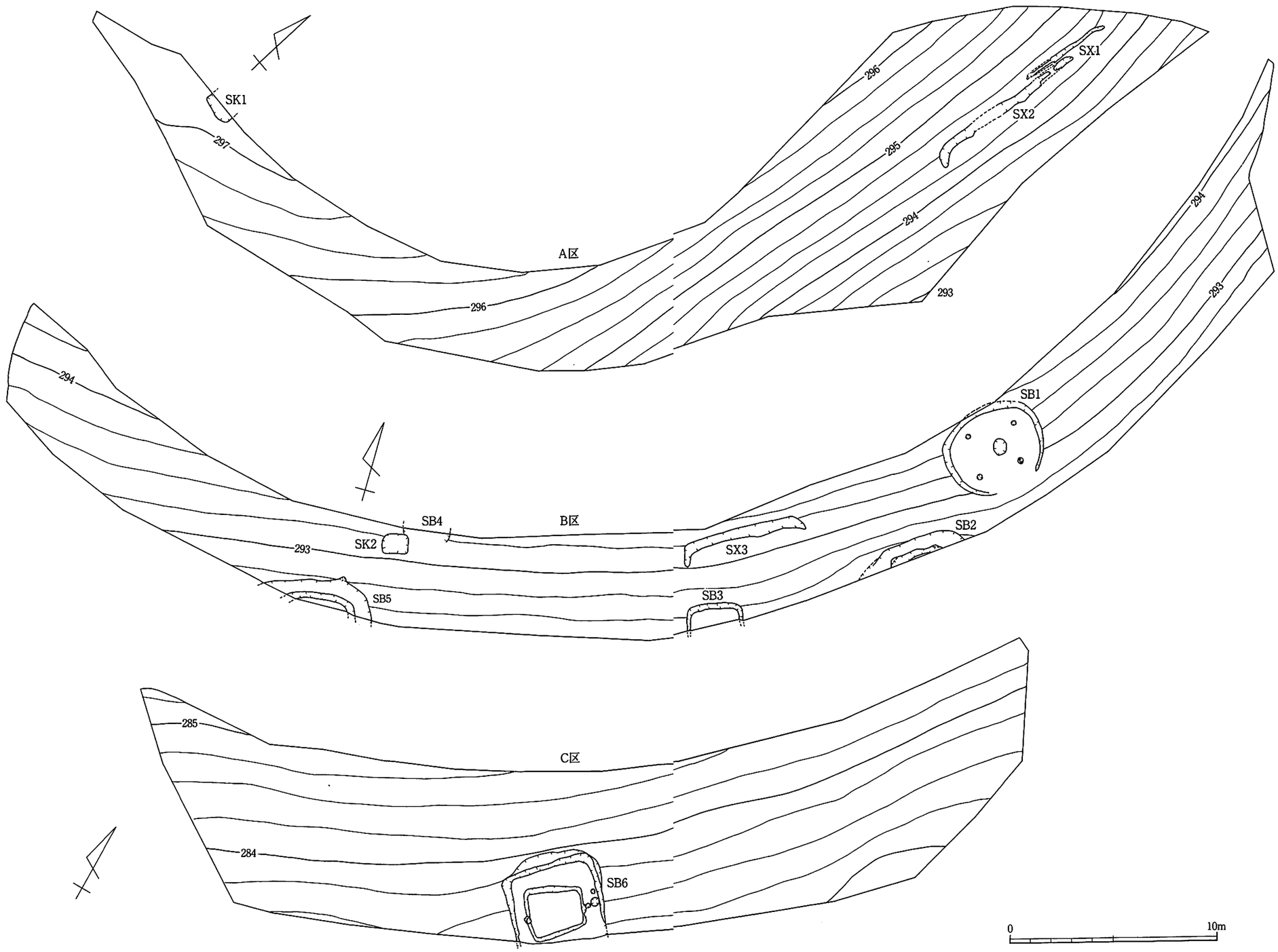
Ｂ区（第33図・図版22・23ａ）

Ａ区の南隣に位置する。Ａ区同様に円弧状の細長い調査区である。竪穴住居跡５（ＳＢ１～ＳＢ５），土坑１（ＳＫ２），性格不明遺構１（ＳＸ３）を検出した。この内，全形の判明したのはＳＢ１，ＳＫ２，ＳＸ３で，この他のＳＢ２～ＳＢ５については調査区外に大半の部分が存在しており，詳細については不明なものが多い。

Ｃ区（第33図・図版23ｂ・23ｃ）

最も南側＝標高の低いところにあり，Ｂ区とは南東に34ｍ離れている。竪穴住居跡１（ＳＢ６）を検出した。

第32図　小深進跡周辺地形図（1：1000）



第33図　小深遺跡遺構配置図（1：200）

（2）検出した遺構

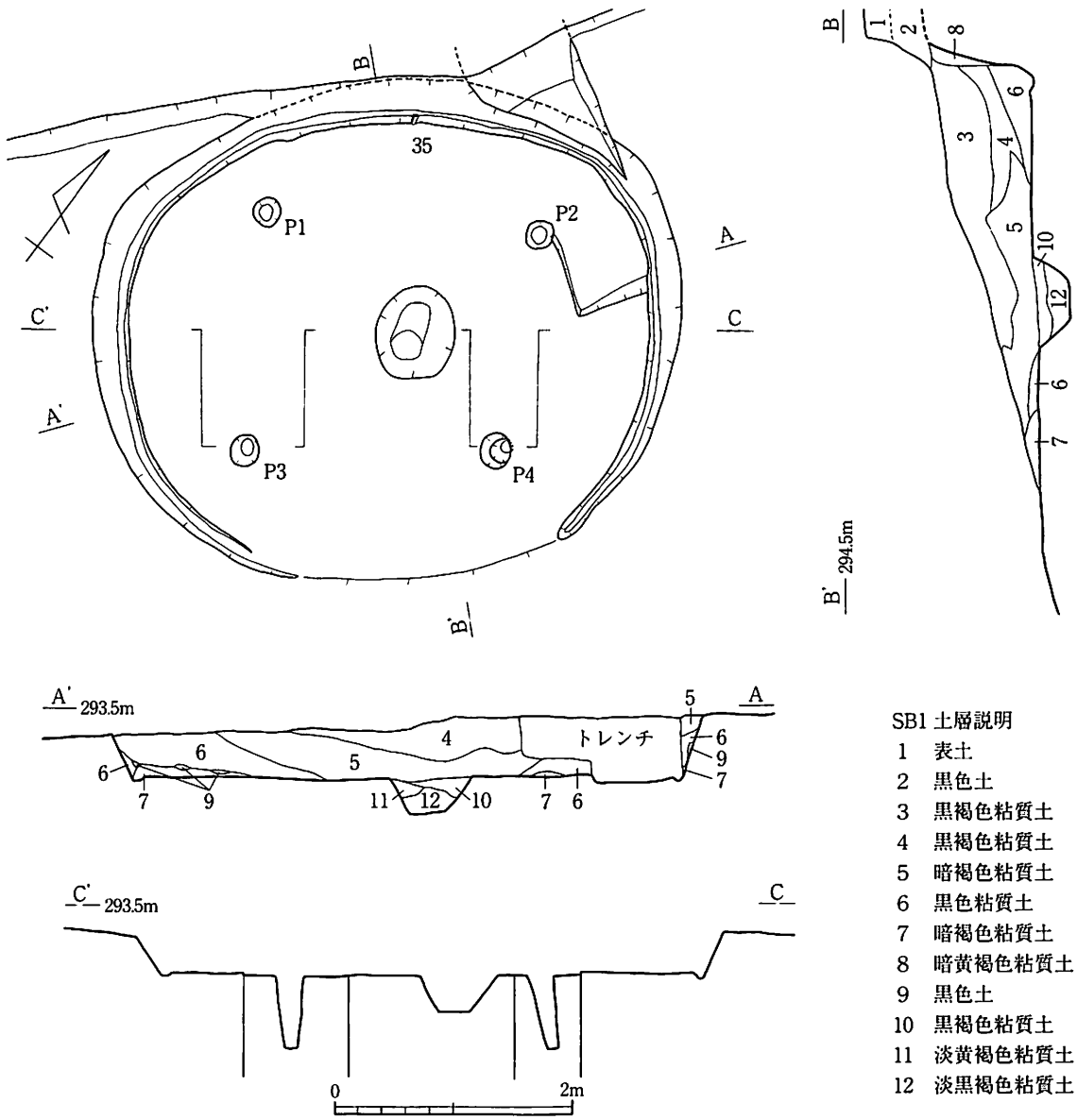
A　住居跡

弥生時代後期から古墳時代前半にかけての竪穴住居跡（ＳＢ１～ＳＢ６）６軒を検出した。竪穴住居跡はＢ区で大半を検出しており，この他にはＣ区の地形変換点付近で一軒検出したのみである。ただし調査区の制約により，竪穴住居跡の多くが一部分しか確認できなかった。全形もしくは規模を推定できるたのはわずかに２軒だけである。

竪穴住居跡

ＳＢ１（第34図・図版23ｃ・24）

本住居跡はＢ区の中央からやや北側に位置し，ＳＢ２からは北へ3.5ｍ離れている。検出面は



第34図　小深遺跡ＳＢ１実測図（１：60）

北から南へ下る斜面となっている。また，北側は調査区外のため一部不詳の部分が存在する。

平面形は4.9 m × 3.9 mの楕円形である。南側では壁の立ち上がりは確認できなかった。検出面からの深さは深い所で87cmであった。

床面はほぼ平坦である。柱穴は4カ所に配されている。各柱穴の大きさは径30～25cm，深さは45～56cmである。柱間距離は各々Ｐ１－Ｐ２が230cm，Ｐ３－Ｐ４が220cm，Ｐ１－Ｐ３が195cm，Ｐ２－Ｐ４が180cmである。

住居跡床面の中央部から若干東寄りに79 × 66cm，深さ32cmの楕円形の土坑がある。埋土中からは炭化物などは出土しなかったが，土坑の壁が赤変していたので，炉跡であろうと思われる。

遺物は弥生土器が出土している。ただし多くの土器は完全に床面から浮いており，床面近くからは鉄器（第41図35）とガラス玉（第41図37，38）が出土した。

ＳＢ２（第35図・図版25 a）

Ｂ区の中央部から東側に位置する。ＳＢ１から南西に3.5 m程離れた所に存在する。住居跡の大半は南側の未調査区に存在すると思われ，北端部の状況を確認したに留まる。

平面形は方形ないしは長方形と思われるが詳細は不明である。検出面からの深さは75cmである。外側に広がる幅広のテラスは住居跡に伴うと思われる。

床面は平坦になると思われる。幅20cm深さ５～４cmの溝が壁際にあることから，この溝は壁に沿って巡ると思われる。

遺物は弥生土器が埋土中から若干出土した。

ＳＢ３（第35図・図版25 b）

Ｂ区のほぼ中央部に位置する。ＳＢ２の西側6.8 mに存在する。南側の調査区境で検出した住居跡である。遺構の南側は山道により相当部分が削平攪乱されている。

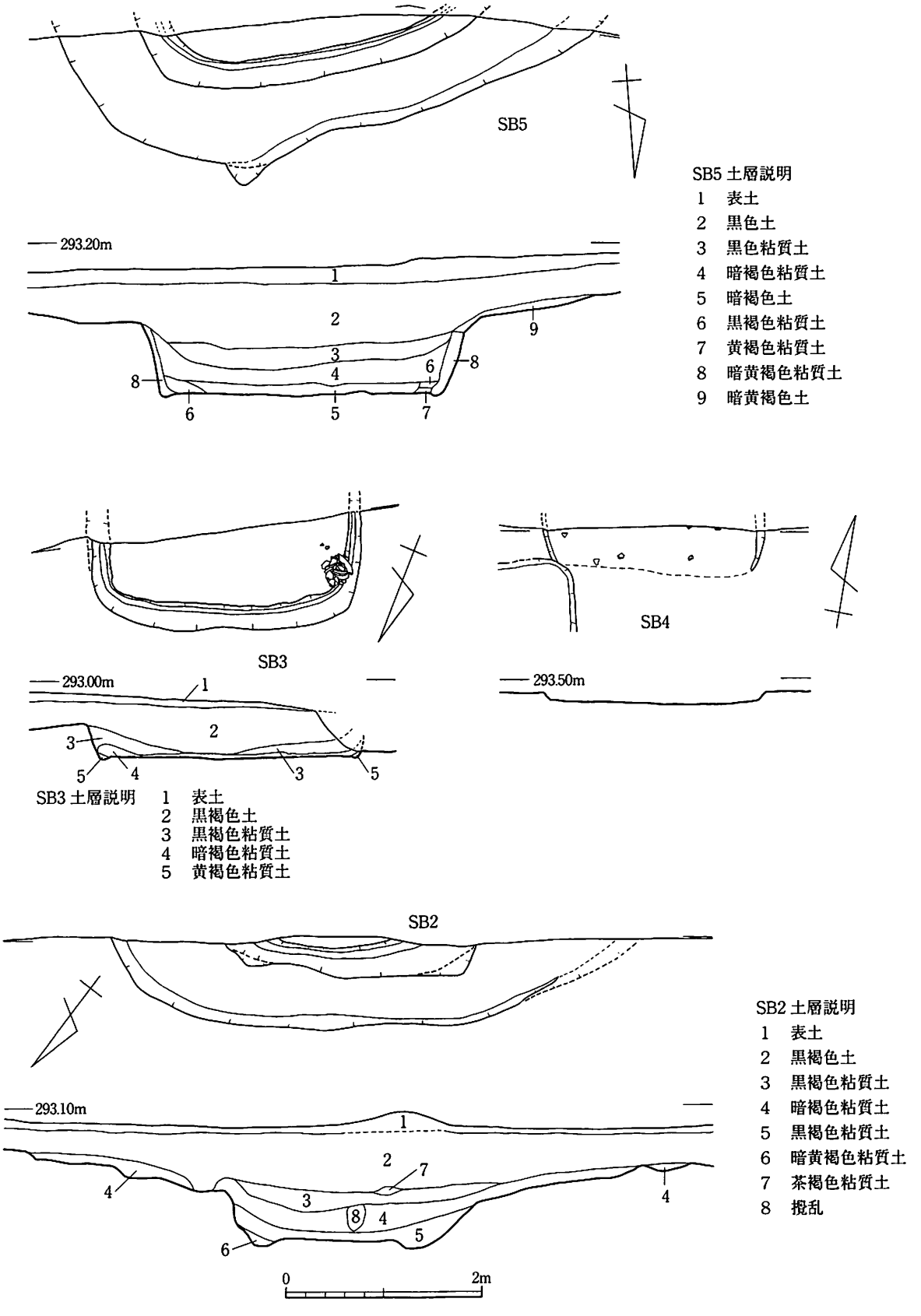
平面形は一辺が2.6 m程度の方形を呈すると思われる。検出面からの深さは36cmである。北から南にかけて斜面となっている。

床面はほぼ平らになると思われ，壁沿いに幅25cm深さ５cmの溝が巡っている。柱穴等は確認できなかった。

遺物は北西の隅で弥生土器（第39図８）が床面直上からまとまって出土している。また埋土中からも弥生土器が若干出土している。

ＳＢ４（第35図・図版25c）

Ｂ区の中央部から若干北西よりにある。ＳＢ３から西へ12.4 mに位置する。確認できたのは僅かに南側の部分のみで，しかも検出面は北から南に傾斜しているため，極めて遺存状況が悪かった。



第35図 小深遺跡ＳＢ２～ＳＢ５実測図（１：60）

規模は不明である。平面形については北側に僅かに残存する立ち上がり部分から推定すれば方形になると思われる。

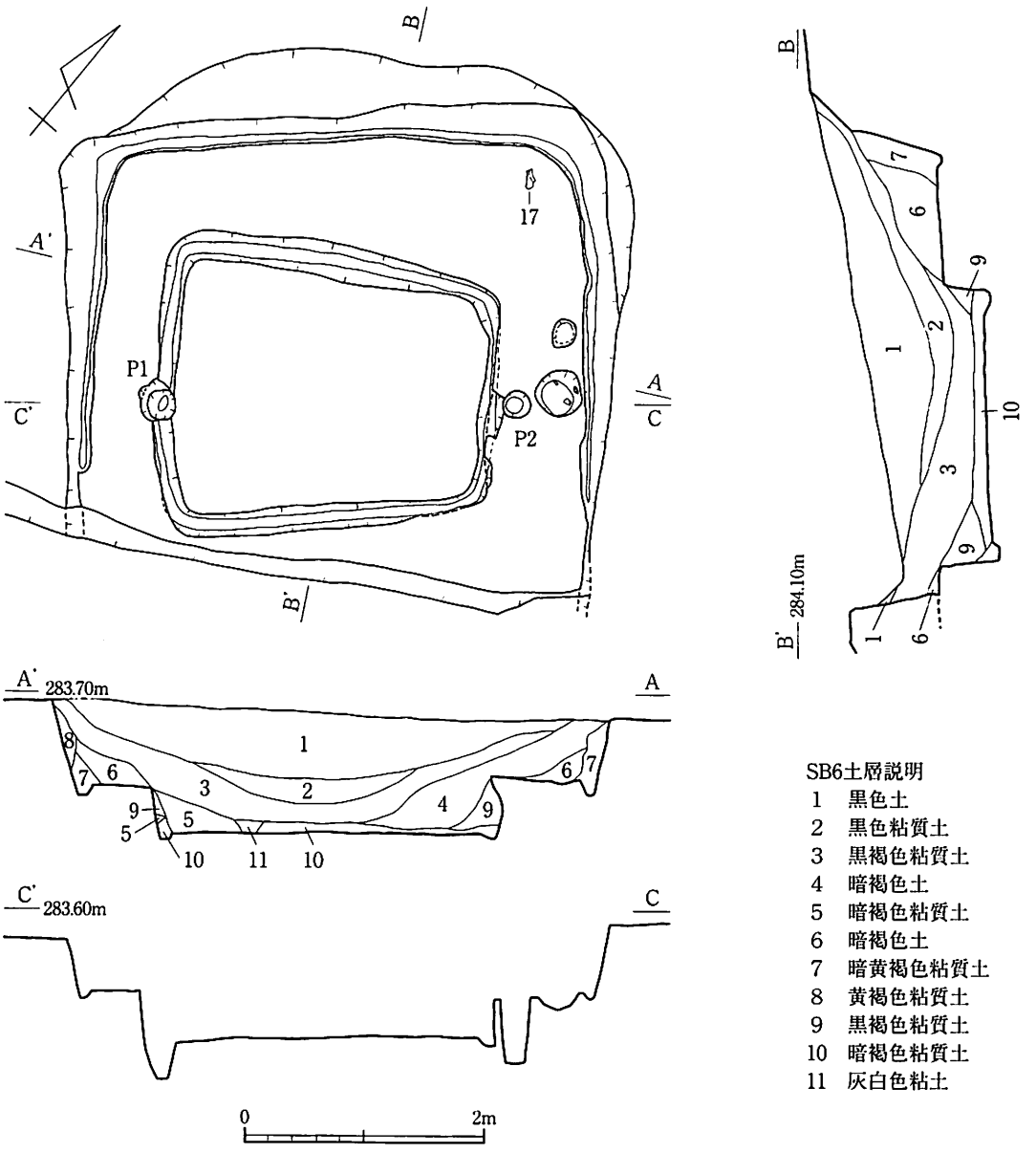
床面はほぼ平らである。

遺物は床面直上から弥生土器（第39図９）が出土している。

ＳＢ５（第35図・図版26ａ）

Ｂ区の中央部から若干北西よりにある。ＳＢ４から南へ3.4ｍに位置する。北側の一部が確認できた。その他の部分は未調査区に存在する。

規模については不明である。平面形は概ね隅丸方形ないしは楕円形を呈すると思われる。床面



第36図　小深遺跡ＳＢ６実測図（１：60）

までの深さは101cmである。

床面はほぼ平坦で，壁に沿って幅15cm深さ4cmの溝が巡る。外側に存在する緩い平坦部は住居跡に伴うと思われる。

遺物は埋土中から刀子（第41図36）や弥生土器が出土した。

ＳＢ６（第36図・図版26ｂ・26ｃ・27）

Ｃ区のほぼ中央部やや南側に位置する。南側部分については調査区外に続くため確認できなかった。

平面形は一辺が4.2ｍ程の方形を呈すると思われる。北から南へ下る斜面に位置している。床面までの深さは134cm～58cmである。

床面は概ね平坦であるが，住居跡の壁に沿って幅20cm深さ10cmの溝が巡っている。平坦面は２面あって，内側の床面よりも一段高い平坦面は深さ106～31cm，幅120～70cmで壁に沿って設けられている。この外側の平坦部から深さ24cmで床面となる。そしてこの床面にも外側の平坦面の壁に沿って幅20cm深さ5cmの壁溝が巡っている。床面の平面形は204～154cm×250cmの台形状で主柱穴は東西に配されている。Ｐ１は径30cm深さ59cm，Ｐ２は径25cm，深さ55cmのいずれも円形で，柱間距離は2.9ｍであった。

遺物は外側の平坦部の直上で土師器甕（第39図17）が出土している。この他に埋土中から土師器片に混じって鉄滓が数点出土している。

Ｂ　土坑

Ａ区とＢ区で一基ずつ検出した。

ＳＫ１（第37図・図版28ａ）

Ａ区の西端部，調査区北側境に存在する。ＳＸ２から南西に12.4ｍの位置にある。北から南に僅かに傾斜する斜面にある。

調査区外に伸びるため全形については推定の域を出ない。150×46＋αの長方形ないしは方形の土坑と思われる。検出面から坑底面までの深さは25cmである。

底面は平坦である。遺物等は出土していない。

ＳＫ２（第37図・図版28b・28c）

Ｂ区の中央部から若干西側にあり，ＳＢ４と西端部で接する。北から南に傾斜する斜面に位置する。

125cm×94cm，深さ30cmの平面形が長方形を呈する土坑である。

底面はほぼ平坦である。なお，上面から弥生土器（第39図26）が出土している。

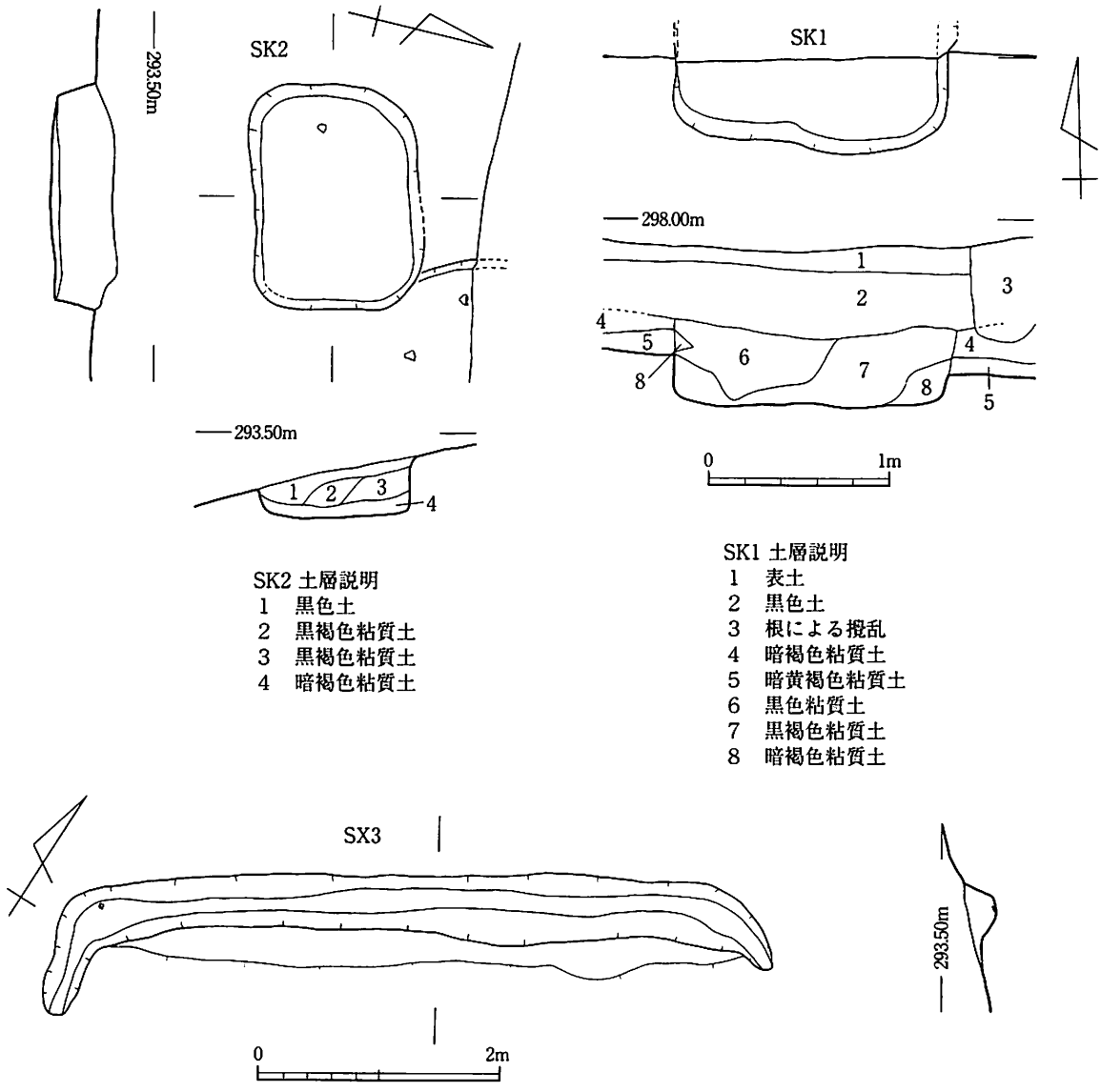
C　性格不明遺構

３基検出した。形状としては溝を確認したのみである。ただし，上面がかなり削平されていると想定すれば，住居跡ないしは住居跡状の遺構（ここでは単に竪穴跡という）の可能性が強いが，確認できないので，性格不明遺構として取り扱った。

ＳＸ１（第38図・図版29ａ・29ｂ）

Ａ区の北端部に位置する。後述するＳＸ２とは切り合い関係にあり，土層観察の結果，ＳＸ１（古）→ＳＸ２（新）と判明した。遺存状況は極めて不良で，山側で溝が確認できたのみである。

幅25～20cm，深さ17～9cm，長さ4.7ｍの溝が巡っている。ＳＸ２と接する辺りで溝の方向が直角に東に折れている。僅かに溝の内側にテラス面を持つが，概ね西から東へ傾斜しており安定しているとは言い難い。また，溝に伴うピット等も検出できなかった。



第37図　小深遺跡ＳＫ１・ＳＫ２・ＳＸ３実測図（１：40，１：60）

ＳＸ２（第38図，図版29ａ・29ｂ）

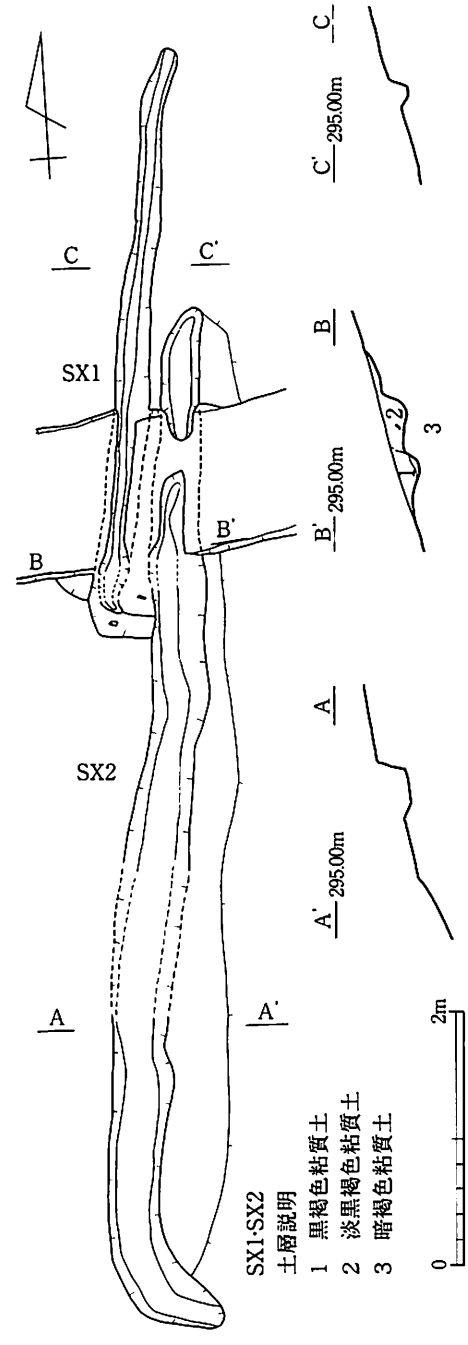
Ａ区の北端部に位置する。ＳＸ１を破壊して造られている。ＳＸ１同様に遺存状況は極めて不良で，山側で溝が確認できたのみである。

幅35～30cm，深さ20～12cm，長さ7.9ｍの溝が巡っている。南北に平行しているが，南側で溝の方向が屈曲して東側にのび，若干変化している。僅かに溝の東側にテラス面を持つが，概ね西から東へ傾斜しており安定しているとは言い難い。また，溝に伴うピット等も検出できなかった。

ＳＸ３（第37図・図版29ｃ）

Ｂ区の中央部から若干東側に存在する。ＳＢ３から北へ２ｍに位置する。北から南に傾斜する斜面にあり，遺存状況は山側の溝部分が存在するのみであった。

幅58～43cm，深さ23～17cm，長さ6.1ｍの溝が巡っている。東西両端付近で南側に屈曲している。この屈曲が遺構の辺の終端を意味すると考えると一辺が5.5ｍ程の竪穴を想定できる。僅かに溝の内側にテラス面を持つが，概ね北から南へ傾斜しており安定しているとは言い難い。また，溝に伴うピット等も検出できなかった。



第38図 小深遺跡ＳＸ１・ＳＸ２
実測図（１：60）

（３）遺物

検出した遺構及び調査区内から土器（弥生土器，土師器）・鉄製品・ガラス製品が出土している。遺物の多くはＳＢ１及びＳＢ６が主で，その他の遺構については調査が一部分に留まったため僅少である。また，試掘調査時に出土した遺物についても掲載した。

Ａ　遺構出土土器（第39図・図版30，31）

１～６はＳＢ１から出土した弥生土器である。１～３は甕形土器である。１は口縁部片で，頸部はく字形に強く外反して広がり，口縁の直下でやや外反しつつ垂直に立ち上がって口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。口縁部には外面に２条の沈線が巡る。調整は内外面ともにヨコナデである。２は胴部下半から口縁部である。最大胴部が器体の若干上位に来る砲弾形の胴部は頸部で少しだけ窄まり，く字形に直線的に伸びるて口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。内面は口縁部がヨコナデ，頸部以下がヘラケズリ，外面は横方向のナデである。３は口縁部片である。緩く外反する口縁部

を上方に少し拡張する。口縁端部は若干尖り気味に収める。口縁直下の屈折部には円形の連続刺突文が巡る。口縁部は内外面ともにヨコナデ，内面頸部以下はヘラケズリである。４・５は底部片である。４は平底である。外面はナデで，内面はヘラケズリ後ナデである。５は平底である。底部は分厚い。内面底部はナデ，内面体部はヘラケズリ，外面はナデである。６は器台の脚部である。脚部はハ字形に直線的に斜め下方に伸びて脚端部に至る。端部は丸く収める。脚部と脚柱部の境には段状の三角形の拡張部が巡る。脚端部内面は横方向のナデ，脚部内面はヘラケズリ後ナデ，外面はヨコナデである。

７はＳＢ２から出土した弥生土器で，甕形土器の口縁部である。頸部からく字形に鋭く外側に開き途中でやや垂直気味に外上方に外湾しつつ伸びて端部に至る。口縁端部は若干角張気味に丸く収める。口縁部外面には波状文が巡る。内面頸部以下はヘラケズリ，その他はヨコナデである。

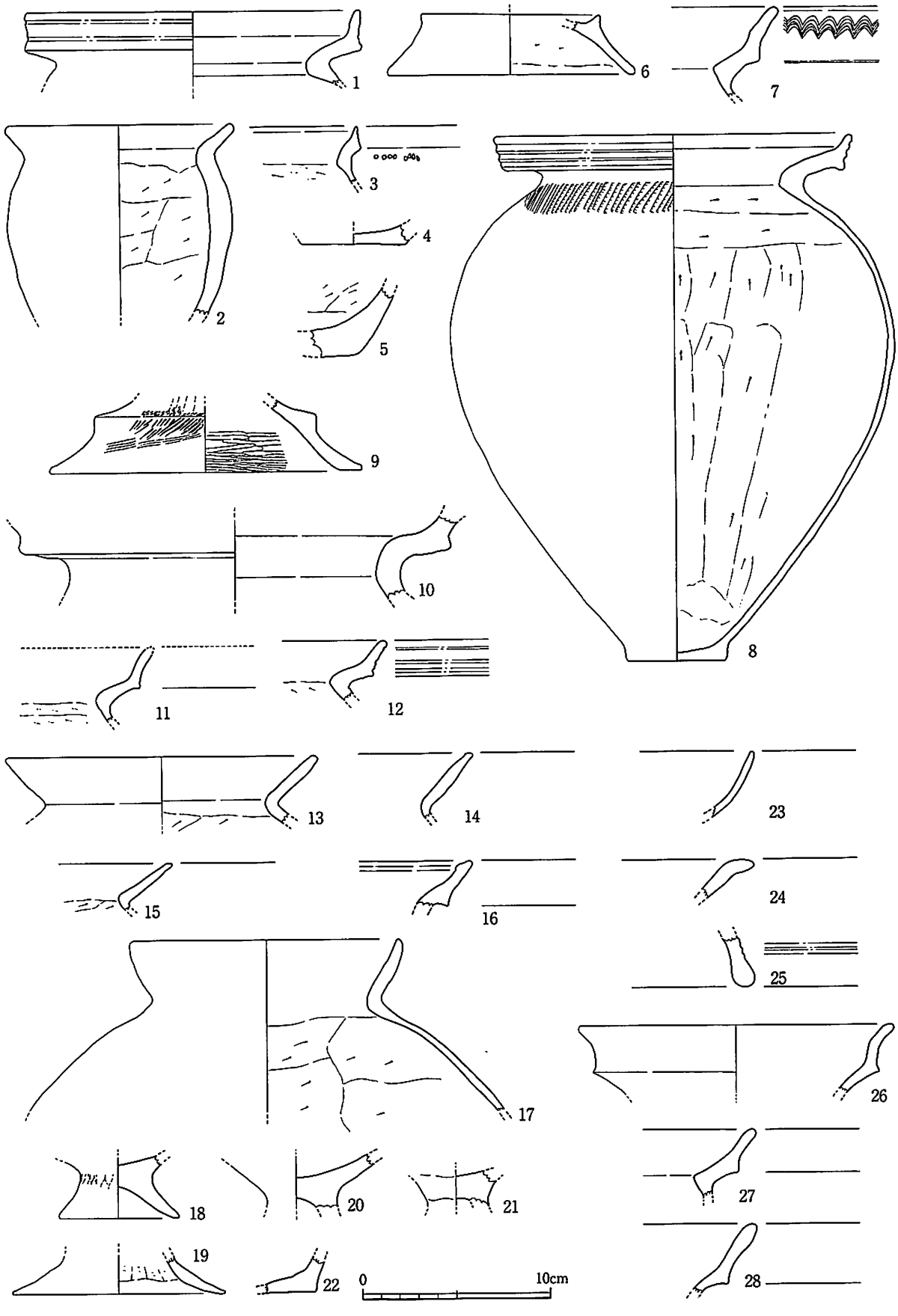
８はＳＢ３から出土した弥生土器である。底部から口縁部で，1/3 程が残っている甕形土器である。底部は平底で，胴部は最大胴部が器体のやや上に来る倒卵形をしており，頸部から口縁部はく字形に強く屈曲し，口縁部に至る。口縁部は上方に拡張する。口縁端部は丸く収めており，外面の拡張部には凹線が３条巡る。胴部上半には連続刺突文が巡る。口縁部内面はヨコナデ，頸部以下はヘラケズリ後粗いナデ，底部はナデである。外面は口縁部から頸部まではナデ，頸部以下は横方向のナデ。頸部から胴部全般にかけてススが付着する。

９はＳＢ４から出土した弥生土器で，高杯の脚部と思われる。脚部は斜め外方にハ字形に直線的に伸び，脚端部に至る。脚端部はやや幅広の平坦面を持つ。外面は端部のやや上方に段を持ち，この段の上下に刺突文が巡る。脚端内面はヘラケズリ後ミガキ。外面は横方向のナデである。

10 ～ 12 はＳＢ５から出土した弥生土器である。10 は壺形土器の頸部上半から口縁部である。口縁端部は欠失している。頸部は緩やかに外側に屈曲し，口縁部に至る。口縁部は外側にやや開き気味に伸びる。頸部と口縁部の境には段がある。内外面ともにヨコナデである。

11･12 は甕形土器である。11 は口縁部片である。く字形に屈曲した頸部から口縁部に至る。口縁部は垂直方向にやや外反気味にのびて口縁端部に至る。内面頸部以下はヘラケズリで，その他はヨコナデである。12 は口縁部片である。く字形に強く屈曲した頸部から口縁部に至る。口縁部は上方にやや外反気味にのびて口縁端部に至る。外面には凹線が３条巡る。内面頸部以下はヘラケズリ，その他はヨコナデである。

13 ～ 25 はＳＢ６から出土した土師器である。13 ～ 17 は甕形土器である。13 は口縁部である。頸部からく字形に屈折し，直線的に斜め上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。頸部以下はヘラケズリ，その他はヨコナデである。14 は口縁部である。頸部からく字形に屈折し，直線的に斜め上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は若干角張気味に収める。調整はヨコナデ，外面にススが付着する。15 は口縁部である。頸部からく字形に強く屈折し，直線的に斜め上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。内面頸部以下はヘラケズリ，他はヨコナデである。外面口縁部直下にススが付着する。16 は口縁部である。頸部は緩く屈曲し口縁部に至る。口縁部はやや開き気味に上方に直線的に伸びて，口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。内側に



第39図　小深遺跡出土遺物実測図（1）（1：3）

担面を持つ。調整はヨコナデである。17は胴部上半から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部はく字形に緩く屈曲して口縁部に至る。口縁部は上方にやや内傾して口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。内面頸部以下はヘラケズリ，口縁部は横方向のナデである。外面には口縁端部から胴部にかけてススが付着する。18～21は高杯である。18は脚部である。ハ字形に斜め下方に伸びて脚端部に至る。脚端部は丸く収める。脚柱部外面の屈曲の具合からすれば，器高はそれほど高くないものと推定できる。外面は横方向のナデで，内面中央部は不定方向のナデである。19は脚部である。脚端部はラッパ状に外側に強く開く。端部は尖り気味に丸く収める。内面柱部はヘラケズリ，他はヨコナデである。20は柱部から杯底部である。棒状の柱部から外側に強く広がりって杯体部に至ると思われる。調整等は不明である。21は杯底部である。底部は緩い丸底となっている。調整等は不明である。22は弥生土器の底部である。平底である。器壁は概して薄い。底部内面はナデ，底部外面はナデ，体部はヨコナデである。23・24は椀である。23は口縁部である。外上方に緩やかに内傾して口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。調整はヨコナデである。器壁は薄い。24は口縁部である。ハ字形に外上方に真っ直ぐ伸びて口縁端部に至る。口縁端部付近で水平方向に屈曲し，端部内面に担面を形成する。端部はやや尖り気味に収める。担面はナデ，他はヨコナデである。23・24は高杯の杯部の可能性もある。25は脚部である。高杯あるいは器台とも考えられる。外面に凹線が２条巡る。端部は丸く収める。端部付近はナデで，他はヨコナデである。

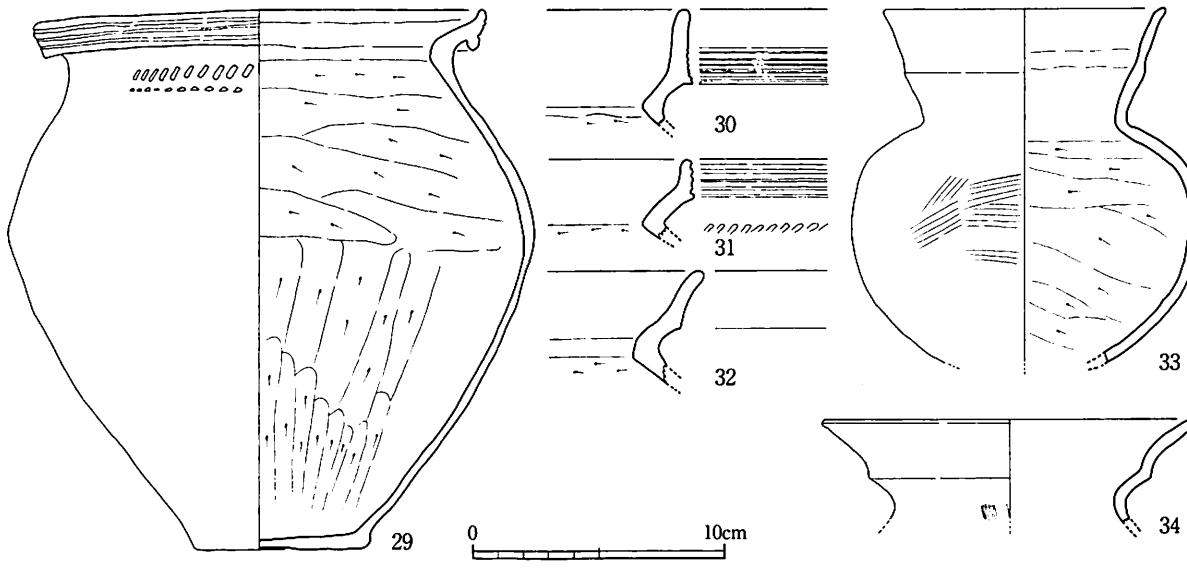
26はＳＫ２から出土した土師器で，甕形土器の口縁部である。頸部はく字形に屈曲して，外上方に真っ直ぐ伸び口縁部に至る。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，途中でやや外反し真直ぐに短く伸び口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。調整は内面はヨコナデ，外面にはススが付着する。

27･28はＳＸ３から出土した弥生土器である。27は口縁部片である。頸部はく字形に屈曲し口縁部に至る。口縁部はやや外反気味に屈曲して外上方に伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸く収めている。内面頸部以下はヘラケズリ，その他はヨコナデである。口縁部にはススが付着する。28は頸部から口縁部である。頸部はく字形に短く屈曲して口縁部に至る。口縁部はやや外反気味に外上方へ伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。内面頸部以下はヘラケズリ，他はヨコナデである。

Ｂ　調査区内出土土器及び試掘調査出土土器

29～34は調査区内（30～32）及び試掘調査時（29，33,34）に出土した土器である。

29～32は弥生土器である。29は甕形土器の底部から口縁部である。底部は平底で，胴部は最大胴部が器体の若干上に来る肩の張らない倒卵形である。頸部はく字形に外側に屈曲して口縁部に至る。口縁部は上方及び下方に拡張され，この拡張部に擬凹線が巡る。端部は丸く収める。胴部上半頸部直下に斜め方向の連続刺突文が巡る。内面頸部以下はヘラケズリで，最大胴部付近でケズリ方向が変化する。口縁部内面は横方向のナデである。30は甕形土器の口縁部である。頸部はく字形に屈曲し，口縁部はほぼ垂直に直線的に立ち上がって口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。口縁部下半には擬凹線が巡る。内面頸部以下はヘラケズリ，その他は横方向のナデである。31は甕形土器の口縁部である。頸部はく字形に外上方に真っ直ぐ伸びて口縁部にいたる。口



第40図　小深遺跡出土遺物実測図（2）（1：3）

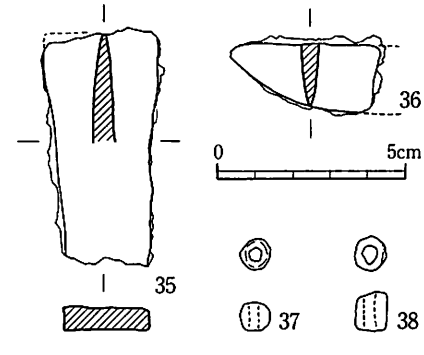
縁部は上方に拡張され，拡張部には凹線が3条巡る。頸部直下には連続刺突文が巡る。内面頸部以下はヘラケズリ，その他はヨコナデである。32は甕形土器の口縁部である。頸部はく字形に屈曲して外側に短く伸びて口縁部に至る。口縁部はやや外反しつつ斜め上方に緩やかに伸びて口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。内面頸部以下はヘラケズリ，その他はヨコナデである。

33･34は土師器である。33は壺形土器の胴部下半から口縁部である。胴部は球胴形で，頸部はく字形に緩やかに屈曲する。口縁部は上方にやや外反しつつ伸びて，中位ですこし内側に屈折して口縁端部に至る。口縁端部は丸く収める。内面頸部以下はヘラケズリ，口縁部は横方向のナデで，胴部外面は上位がヨコナデ，中位がハケメ，下位がナデである。34は器台または甕形土器の口縁部で，頸部はく字形に緩く屈曲して口縁部に至る。口縁部は外上方に緩やかに外反しつつ口縁端部に至る。口縁端部は丸く納める。内面頸部から外面口縁部直下まではヨコナデ，外面頸部はハケメである。

C　金属器・ガラス製品（第41図，図版31）

鉄器は2点出土している。35は鉄鏃で下半を欠失する。残存長63mm，幅31mm，厚さ6mm，残存重量30.1 gである。SB1の床面から少しだけ浮いた状態で出土している。36は刀子の切先部分と思われる。残存長40mm，幅18mm，厚さ5mm，残存重量6.6 gを計る。SB2の埋土中からの出土である。

ガラス製小玉が2点出土している。SB1東側床面からの出土である。37は径4mm，高さ3.5mm，重さ0.08 g，穿孔径1.5mmを計る。38は径4mm，高さ5mm，重さ0.1 g，穿孔径1.5mmを計る。色調はいずれもコバルトブルーである。



第41図　小深遺跡出土遺物実測図（3）（1：2，37・38は実大）

遺物番号	種別	器種	部位	計測値	色調	胎土	焼成	保存状況	出土場所	備考
1	弥生土器	甕	口縁部	復元口径178mm	黄褐色	砂粒を若干含む	普通	やや不良	ＳＢ１埋土	
2	弥生土器	甕	胴部下半～口縁部	復元口径118mm	黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	良い	ＳＢ１埋土	
3	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒を若干含む	良好	普通	ＳＢ１埋土	頸部に円形連続刺突文
4	弥生土器		底部	底部径　55mm	淡黄褐色	砂粒を多く含む	普通	普通	ＳＢ１Ｐ６	
5	弥生土器		底部		淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	普通	ＳＢ１埋土	
6	弥生土器	器台	脚部	脚端部径128mm	黄褐色	砂粒を少し含む	普通	良好	ＳＢ１埋土	
7	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒を少し含む	良い	良好	ＳＢ２埋土	口縁に波状文
8	弥生土器	甕	底部～口縁部	口径186mm, 器高280mm	黄褐色	砂粒を少し含む	良い	良い	ＳＢ３床面	
9	弥生土器	高杯	脚部	脚端部径166mm	黄褐色	砂粒を少し含む	普通	良好	ＳＢ４床面	
10	弥生土器	壺	口縁部	復元頸部径175mm	淡黄褐色	砂粒を多く含む	普通	普通	ＳＢ５埋土	
11	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒を含む	普通	良好	ＳＢ５埋土	
12	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	微砂粒を多く含む	普通	良好	ＳＢ５埋土	
13	土師器	甕	口縁部	復元口径166mm	淡黄褐色	砂粒を若干含む	普通	普通	ＳＢ６埋土ＳＥ	
14	土師器	甕	口縁部		淡黒褐色	砂粒を少し含む	良い	良い	ＳＢ６埋土ＮＥ	
15	土師器	甕	口縁部		黄褐色	微砂粒を少し含む	良い	良い	ＳＢ６埋土ＳＥ	
16	土師器	甕	口縁部		淡黒褐色	砂粒を多く含む	良い	良い	ＳＢ６埋土ＮＥ	
17	土師器	甕	口縁部	復元口径142mm	黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	ＳＢ６床面	
18	土師器	高杯	脚部	脚部径62mm	淡黄褐色	微砂粒を少し含む	普通	やや不良	ＳＢ６埋土ＮＥ	
19	土師器	高杯	脚部		黄褐色	微砂粒少し含む	普通	普通	ＳＢ６埋土ＳＥ	
20	土師器	高杯	脚柱部		淡黄褐色	微砂粒少し含む	普通	やや不良	ＳＢ６埋土ＳＥ	
21	土師器	高杯	柱部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	やや甘い	やや不良	ＳＢ６埋土ＳＥ	
22	弥生土器		底部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	良好	普通	ＳＢ６埋土ＳＷ	
23	土師器	椀	口縁部		黄橙色	微砂粒を少し含む	普通	普通	ＳＢ６東畦	
24	土師器	椀	口縁部		黄白色	砂粒を多く含む	普通	普通	ＳＢ６東畦	
25	土師器		脚部		黄白色	砂粒を多く含む	普通	良い	ＳＢ６埋土ＳＷ	
26	土師器	甕	口縁部	復元口径168mm	黄灰色	微砂粒を少し含む	普通	良好	ＳＫ２埋土	外面スス付着
27	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒を少し含む	良い	良好	ＳＸ３	口縁部にスス付着
28	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒を少し含む	良い	良い	ＳＸ３	
29	弥生土器	甕	底部～口縁部	口径174mm, 器高215mm	黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	試掘４Ｔ住居２	
30	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	良い	良い	調査区北側表採	擬凹線
31	弥生土器	甕	口縁部		黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	Ａ区北半検出面	凹線３条
32	弥生土器	甕	口縁部		淡黄褐色	砂粒を少し含む	普通	普通	Ａ区小ピット	
33	土師器	壺	胴部下半～口縁部	復元口径112mm	黄褐色	微砂粒少し含む	普通	普通	試掘３Ｔ住居１	
34	土師器	器台	口縁部	復元口径148mm	黄褐色	砂粒を少し含む	普通	やや不良	試掘７Ｔ住居６	

第４表　小深遺跡出土遺物観察表

（4）ま と め

今回の小深遺跡の調査はいずれも帯状の調査区でとりわけＡ・Ｂ調査区は幅狭でどちらかといえば線的な調査にならざるを得なかった。しかしながら，線的な調査であるにも拘わらず検出した遺構は調査区外に広がっているものが大半とはいえ竪穴住居跡６軒，土坑２基，性格不明遺構３基を確認した。

ここでは遺跡の立地や遺構の時期などについて若干の検討を加えてまとめとしたい。

１　立地

遺跡が南面する国兼池は江戸時代に造られたため池である。したがって，小深遺跡に集落が営まれた頃の地形については不明であるが，国兼池周辺が生業の糧となる場所であった可能性は高い。

遺跡の全体が明らかになっていないので詳細については不明な部分は多いが，大まかな遺構の分布状況をみれば南側に傾斜する斜面上に散発的に住居跡が展開する状況を垣間見ることが出来る。住居跡の時期については出土遺物から弥生時代後期，弥生時代末，古墳時代前期に大まかに分類できる。

今のところは弥生時代後期の前半から集落として成立し，古墳時代の前期で一応の終焉を迎えると想定できる。

このような集落のあり方は備北丘陵公園内で調査された遺跡では一般的なあり方であって，概ね弥生時代後期頃に集落への定着が始まり，断続的あるいは継続的にせよ古墳時代の末頃に廃絶している。恐らくは本遺跡も面として調査を行えば同じような傾向を示すと考えられる。

２　住居跡

今回の発掘調査で確認した遺構の中で目を引くのはＳＢ６である。この遺構は主柱穴が２本柱の構造となる竪穴住居跡で，出土遺物から古墳時代の前半頃に営まれたと考えられる。平面形は方形で，床面に外側の平面形に沿ったように方形の落ち込みが存在する。この落ち込みと住居の床面との間には切り合い関係を確認できなかった。したがって，内側の落ち込みはこの住居跡に付属すると考えられる。この住居跡はいわば二重の床面構造を持っているといえる。

さらに，内側にある方形の辺の中央部あたりに主柱穴が２本対峙して存在する。そのほかに柱穴が見あたらないので，竪穴住居跡は２本柱構造であったと想定できる。

二本柱構造の竪穴住居跡は庄原市域でもしばしば見受けられ，数としては弥生時代後期に該当するものが圧倒的に多い。本遺跡で発見したＳＢ６と類似する住居跡は管見の限りでは見あたらなかった。

古墳時代になると２本柱構造の竪穴住居跡の出現数は減少する[(1)]。平面形態は一般の住居跡の変遷と歩調を合わせるかのように円形から方形に移行する。庄原市域でもこの傾向はあてはまる。

次にその性格である。中央部に四角く掘られた落ち込みは何を意味するのであろうか。まず，その深さから何かを蓄えるための構造が考えられる。埋土を検討する限りは焼土や炭化物は観察できなかったので，炉のような何らかの火を使う施設は想定できない。

土層からは防湿に使ったような土も見つからなかったので，通年期の貯蔵とは考えがたい。貯蔵用の施設と想定した場合は越冬用の食料などを保存した施設とした方が適切であるのかも知れない。

上面の削平をある程度考えても，ＳＢ６はほかの住居跡よりは深い。この点でも一般の居住施設とは違うと考えた方が蓋然性が高い。

3　旧庄原市域での弥生から古墳にかけての集落跡の特徴

備北丘陵公園内の集落跡の多くは住居跡の占地に特定の傾向を持つようである。

1　住居跡は特定の高さの場所に造られる。しかもこの高さは時代を超えて意識される。

2　1に関連して，遺構が曖昧あるいは見つからない空間が存在する。この空間は往々にして遺構が存在する高さとその下もしくはその上に遺構が存在する高さの間である場合[(2)]が多い。

3　さらに等高線に沿ったように造られる居住空間と居住空間を遮るような等高線を切るような居住空間分断帯が存在する場合[(3)]がある。これらは地形的な制約による場合もあるし，意図的に空間帯を作っていると思われる場合もある。

4　むすび

今回の調査はいわば線の調査のため，不明な部分が多い。そのなかで，等高線に沿うような形での居住地の選択をしており，さらに集落内で居住とは若干異なる性格を持った建物の存在を指摘することができた。類例の増加をまって再考してみたい。

註

（1）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植谷遺跡・根野見遺跡・植谷古墳発掘調査報告書』2002年
三良坂町教育委員会『杉谷遺跡群』2003年

（2）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『国営備北丘陵公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書』1999年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『浅谷山東Ｂ地点遺跡・清水３号遺跡』1998年

（3）註（1）（2）と同じ

図　版

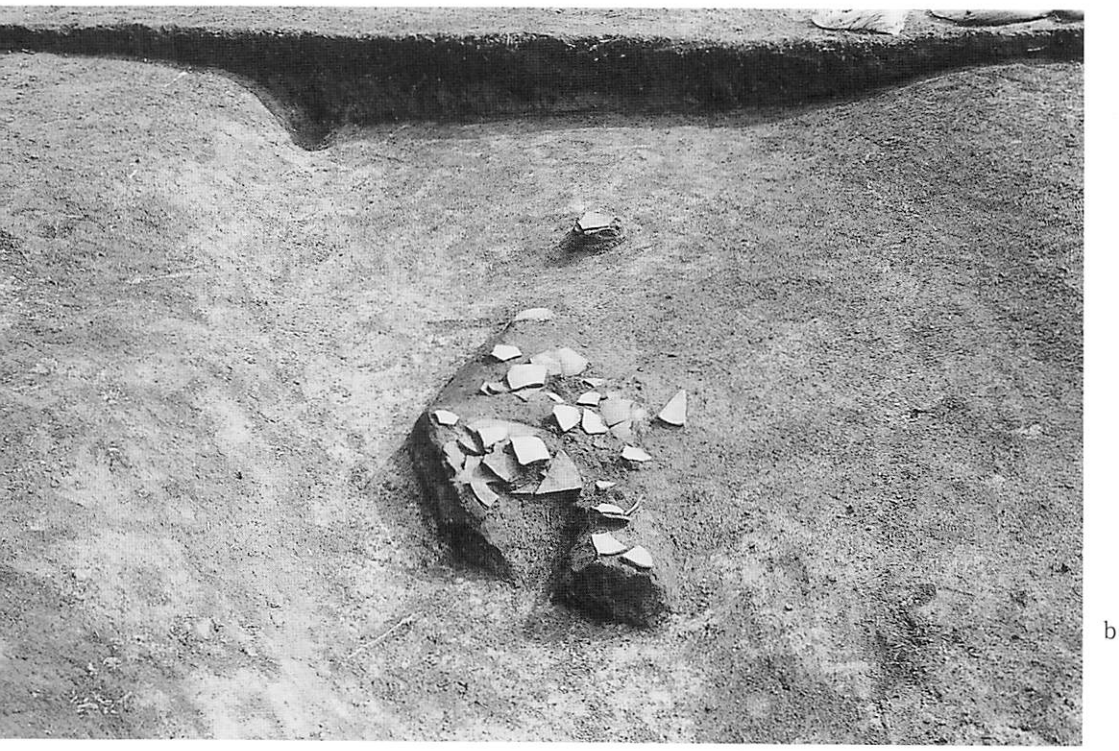
図版 1

a　墳丘検出状況
（南から）

b　調査風景
（西から）

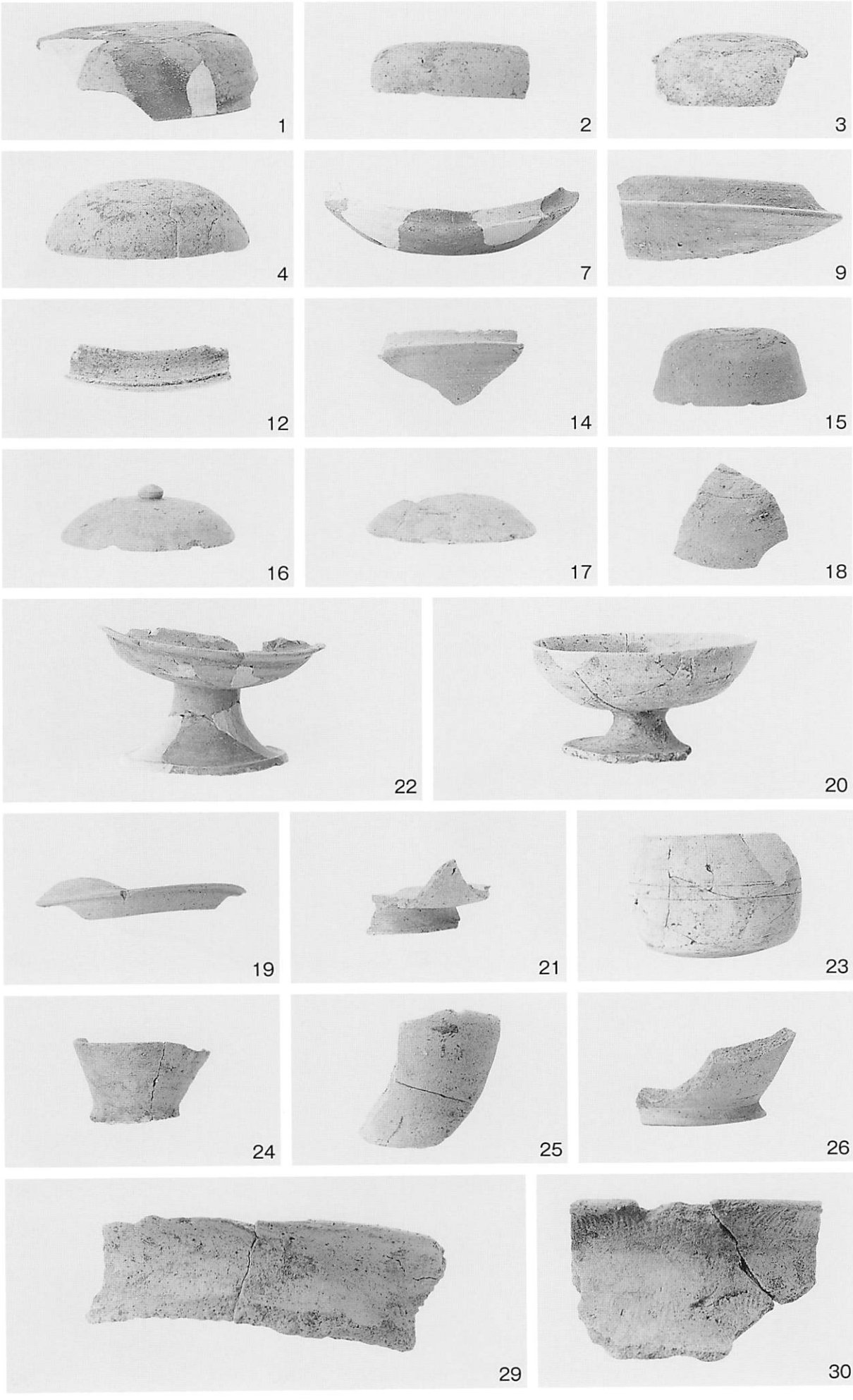
c　土層断面
（南から）

a　石室全景
（南から）

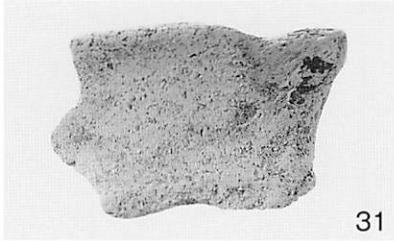


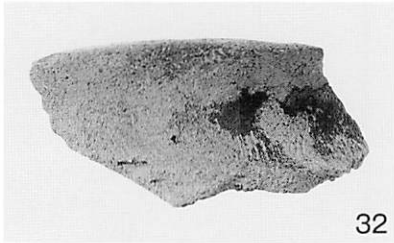
b　周溝内遺物出土状況
（北から）

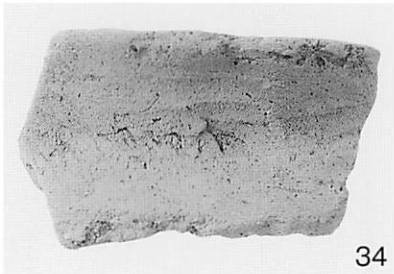
c　石室堀方
（南から）

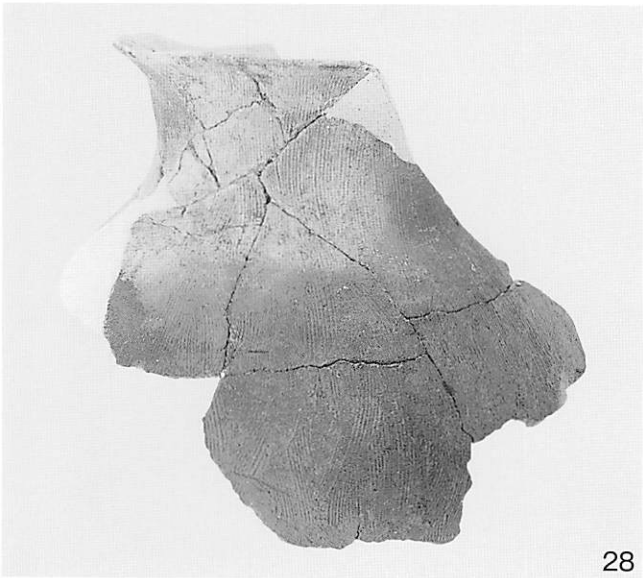


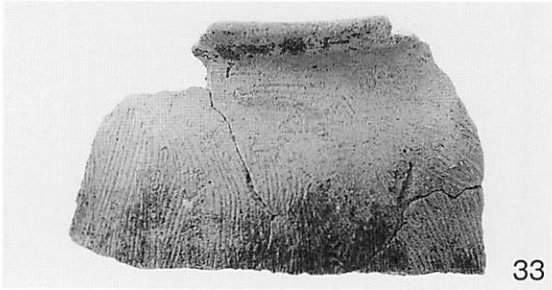
浅谷山西古墳出土遺物（１）

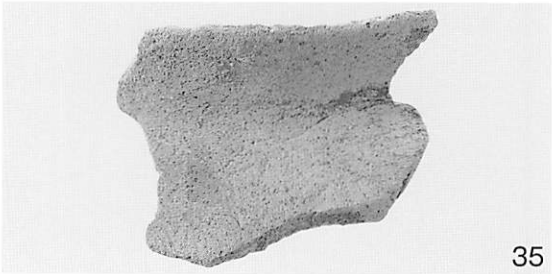


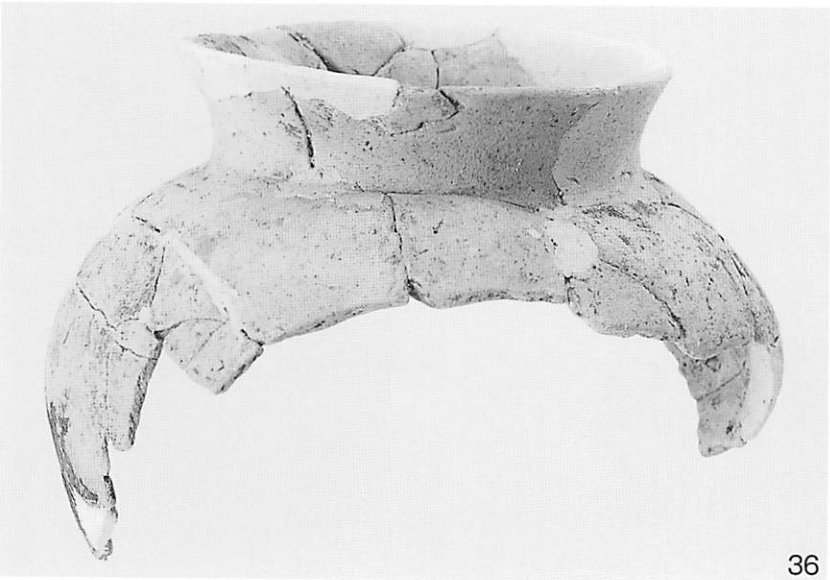


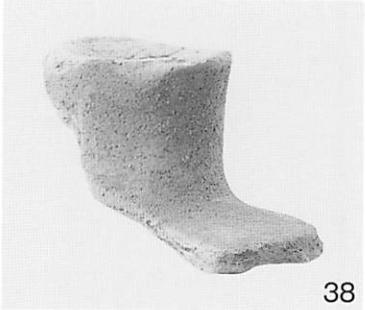


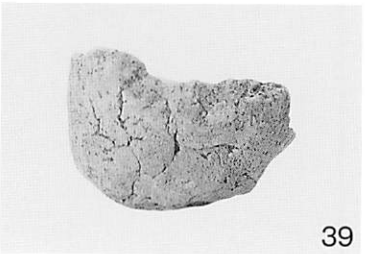




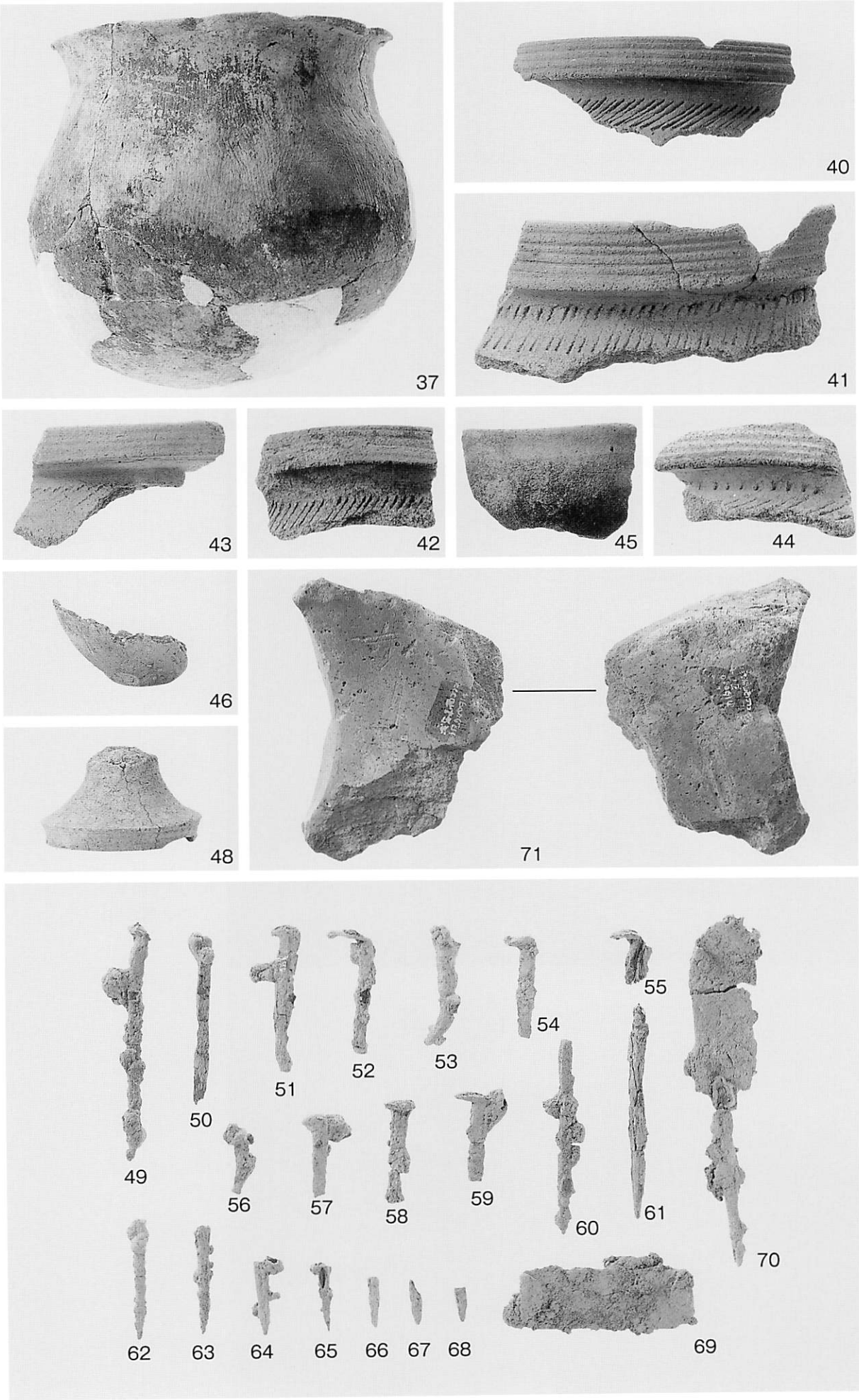








浅谷山西古墳出土遺物（2）



浅谷山西古墳出土遺物（3）

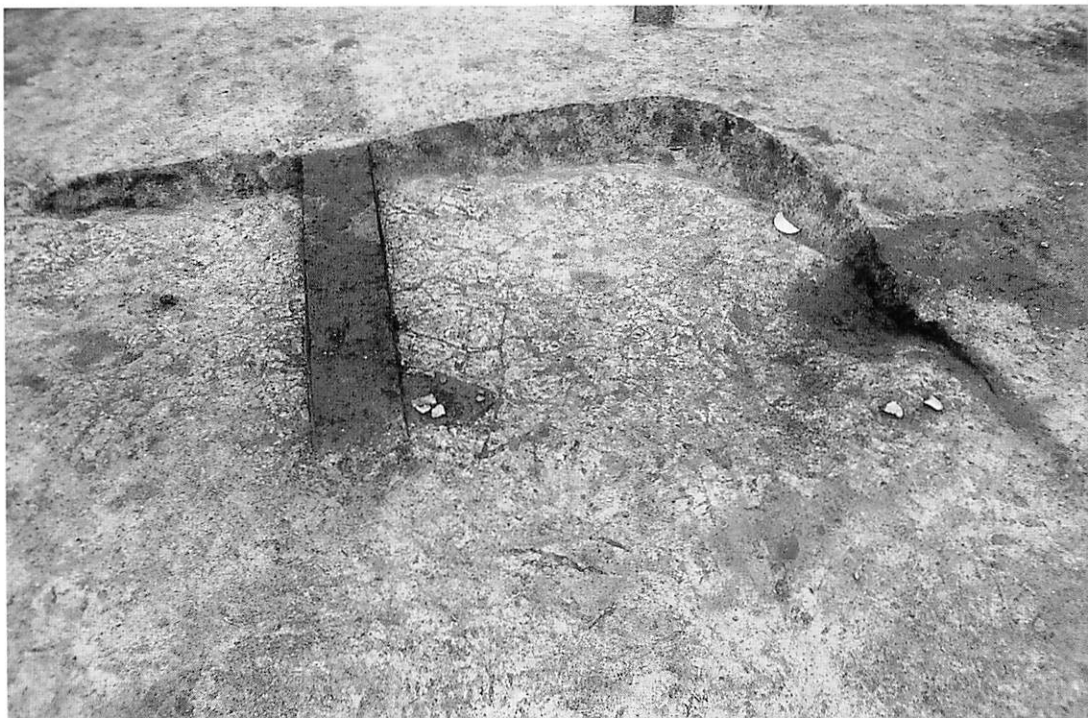
a　調査前全景
（南から）

b　南半部全景
（北西から）

c　北半部全景
（南西から）

a　ＳＢ１土層断面
（南西から）

b　ＳＢ１
（南西から）



c　ＳＢ２
（南から）

図版８

浅谷山１号遺跡

a　ＳＢ３
（南西から）

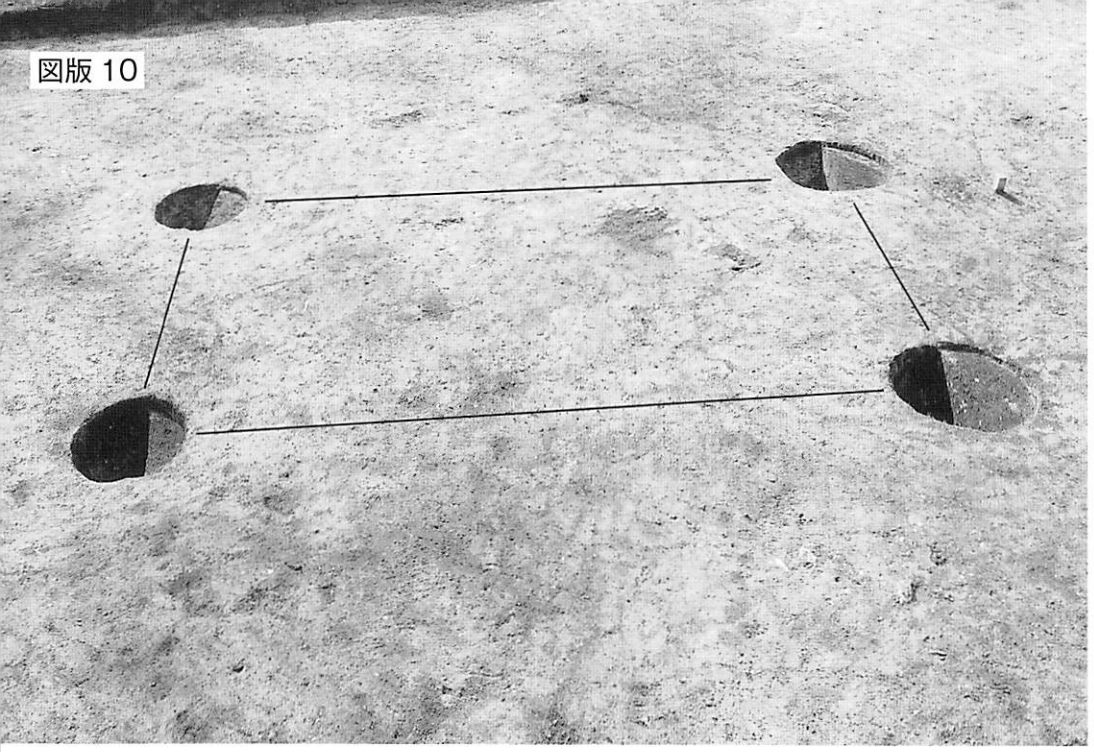
b　ＳＢ４土層断面
（南から）

c　ＳＢ４調査風景
（南西から）

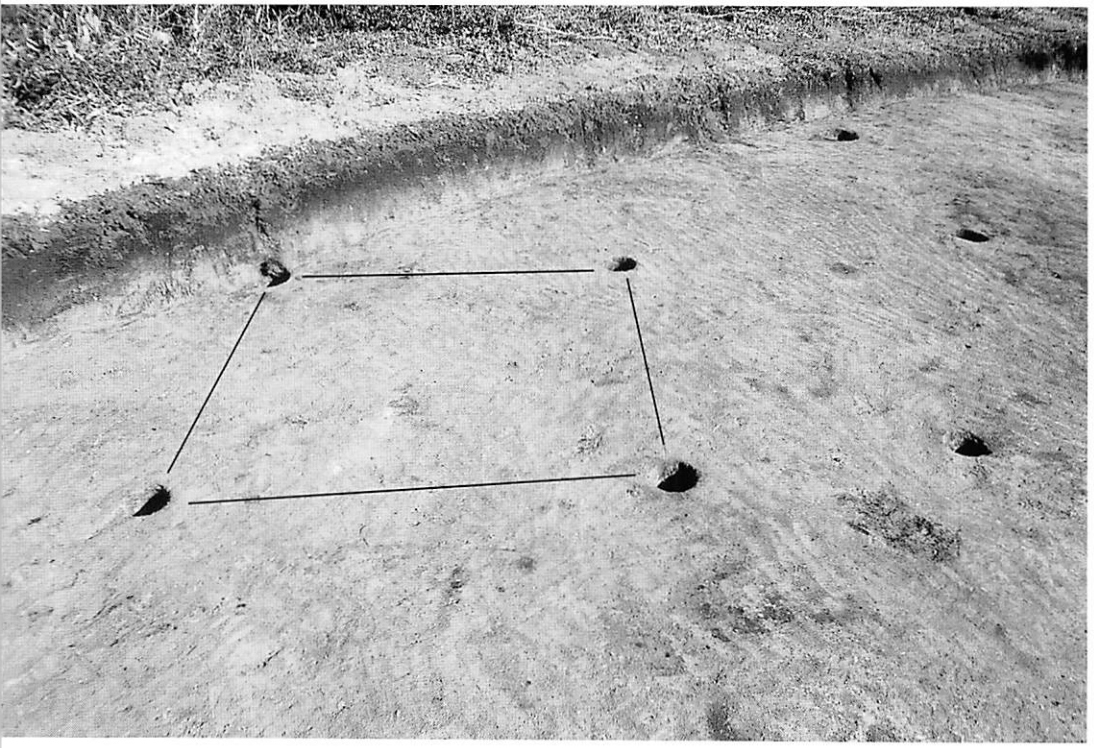
a　ＳＢ４完掘
（北西から）

b　ＳＢ５・ＳＢ６・
ＳＸ４（南西から）

c　ＳＢ７
（南西から）

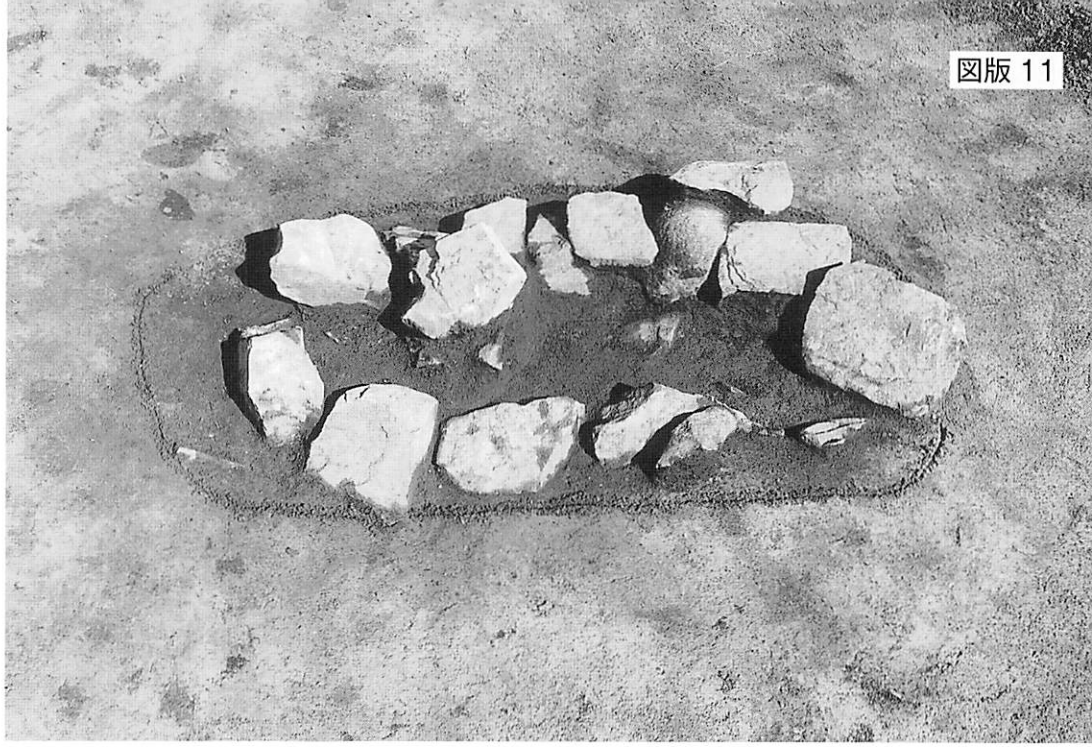


a　ＳＢ８
（南西から）

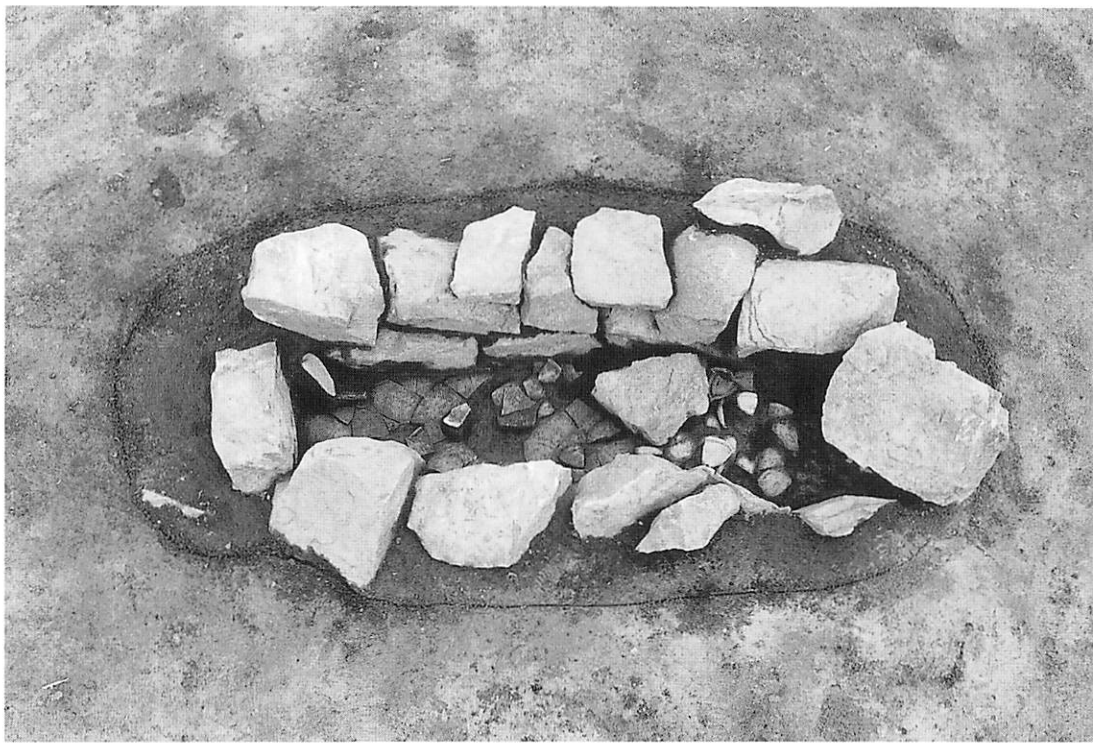


b　ＳＢ９
（西から）

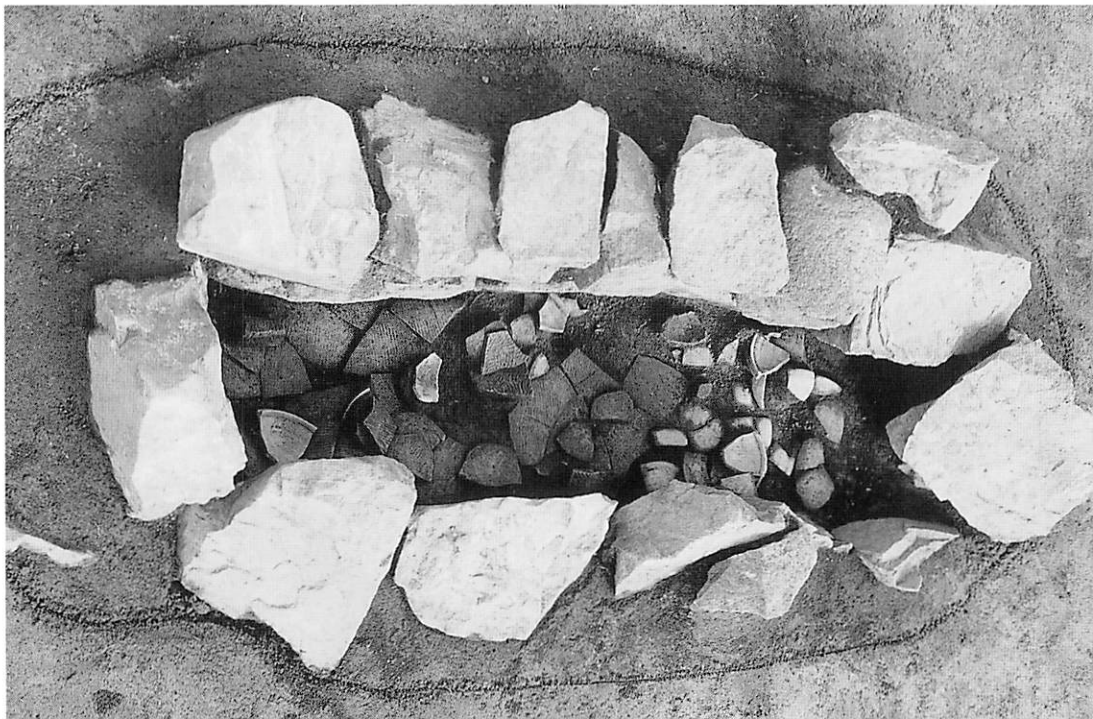
c　ＳＢ10
（西から）



a　ＳＫ１検出状況
（南西から）

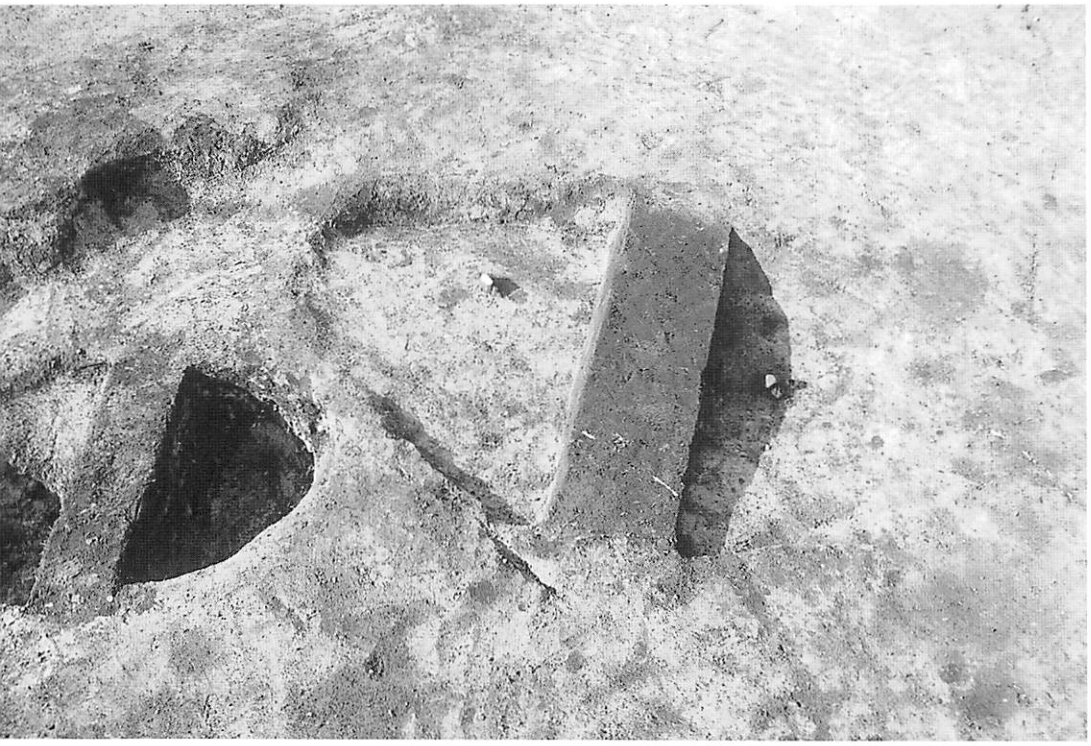


b　ＳＫ１
（南西から）



c　ＳＫ１床面
（南西から）

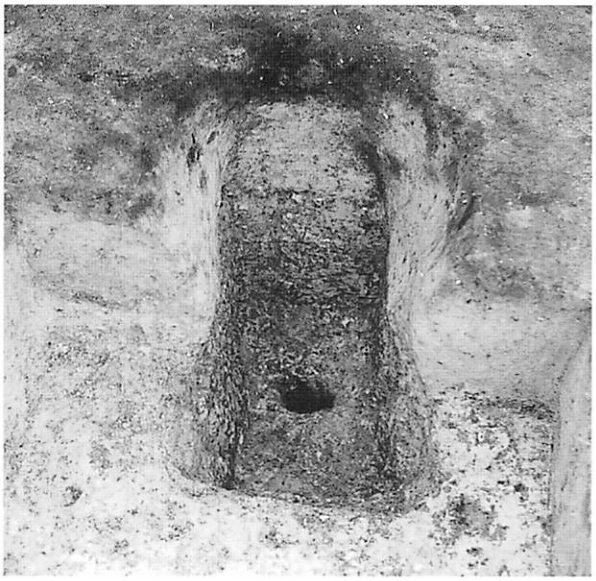
a　ＳＫ１完掘
（南西から）



b　ＳＫ２
（南から）

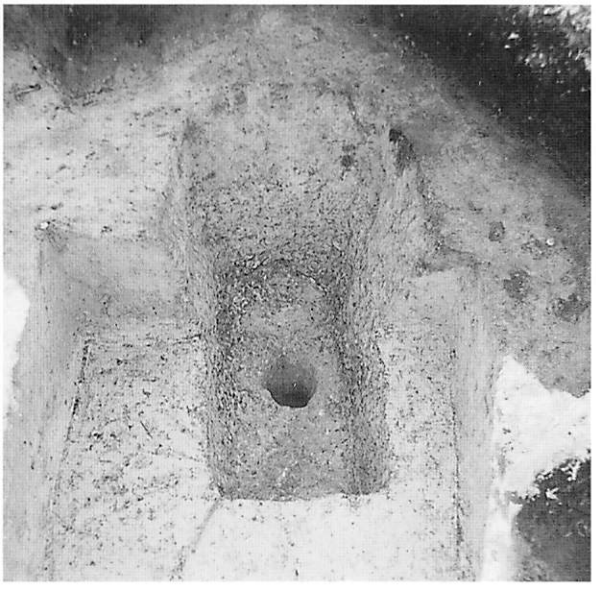
c　ＳＫ５
（北西から）

a　ＳＫ３土層断面（南西から）



b　ＳＫ３（南西から）

c　ＳＫ４土層断面（北東から）



d　ＳＫ４（北東から）

e　ＳＸ１
（北西から）

a　ＳＸ３検出状況
（南から）

b　ＳＸ３完掘
（南から）

c　ＳＸ６
（南から）

a　ＳＢ３遺物出土状況

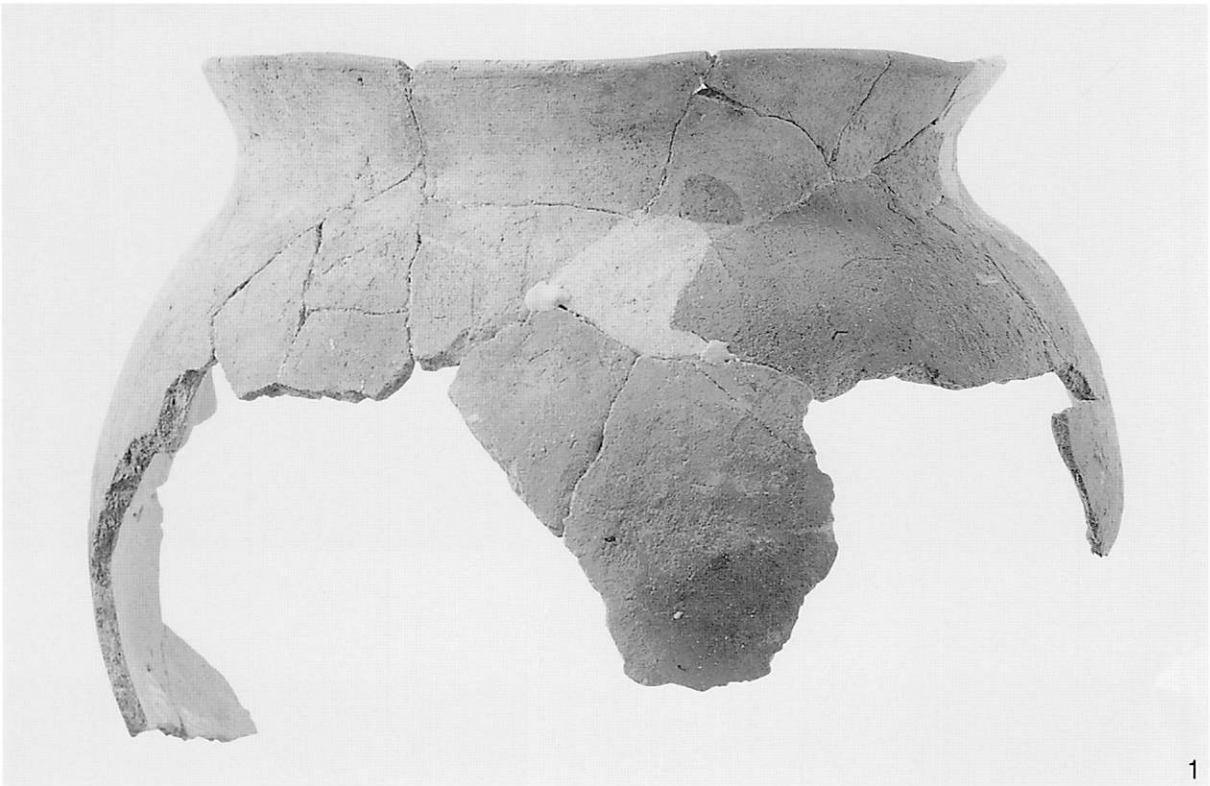
b　ＳＢ４遺物出土状況

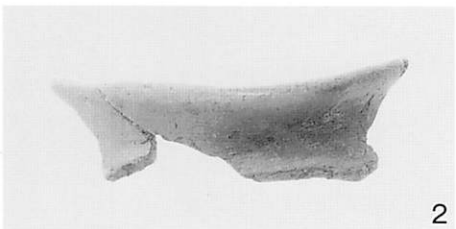
c　ＳＢ５遺物出土状況

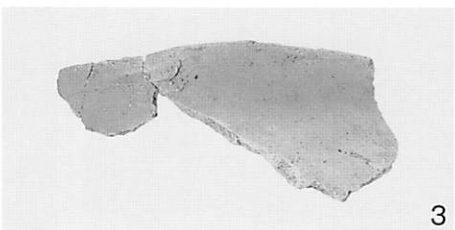
d　調査風景

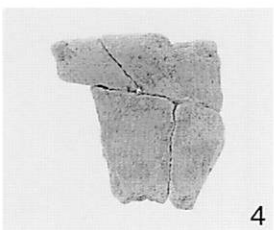
e　現地説明会風景

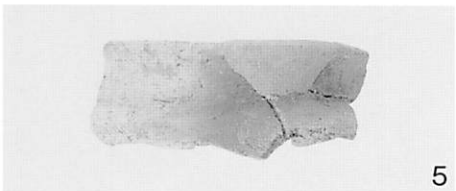
f　現地説明会風景

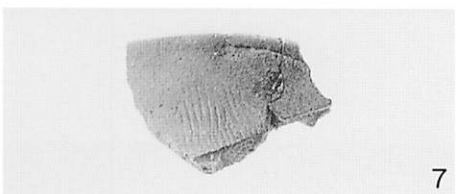


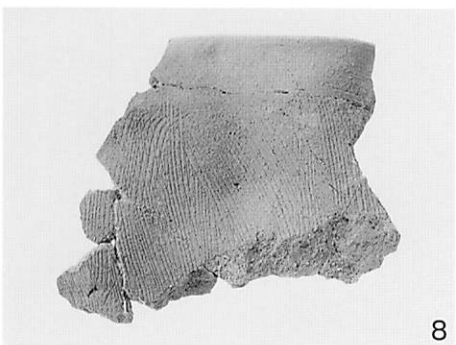


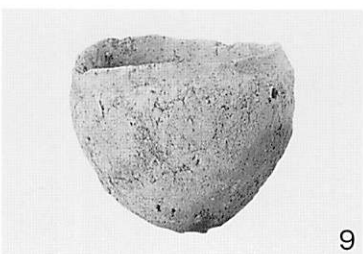


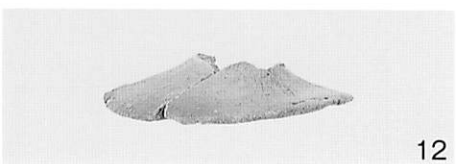


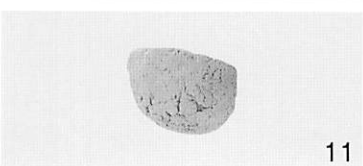


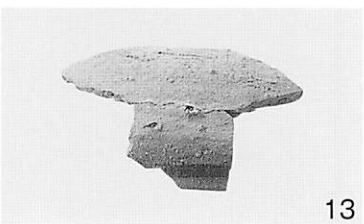




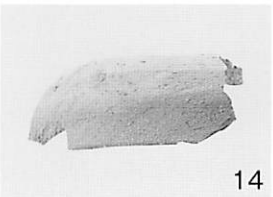


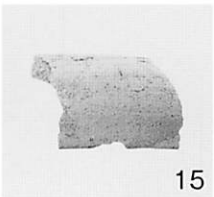


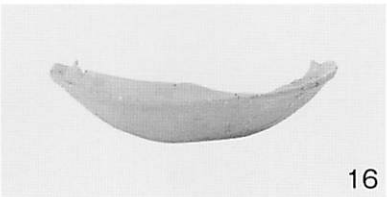


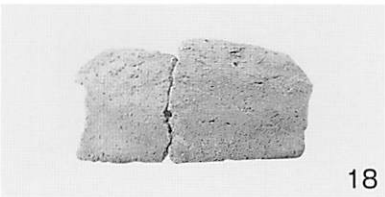


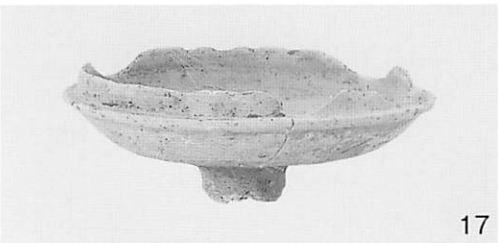
浅谷山１号遺跡出土遺物（１）

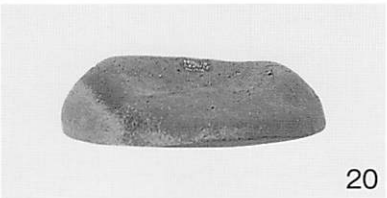

14

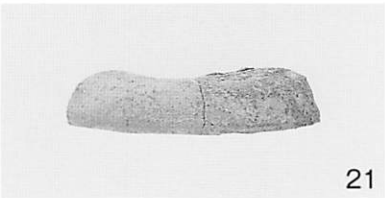

15

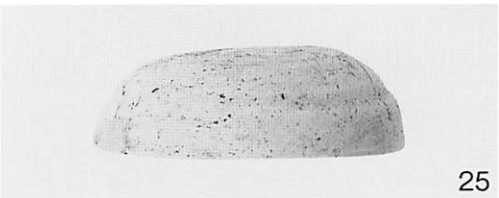

16

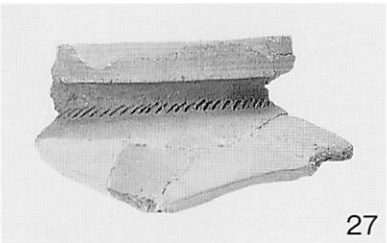

18

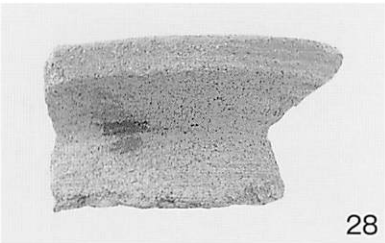

17

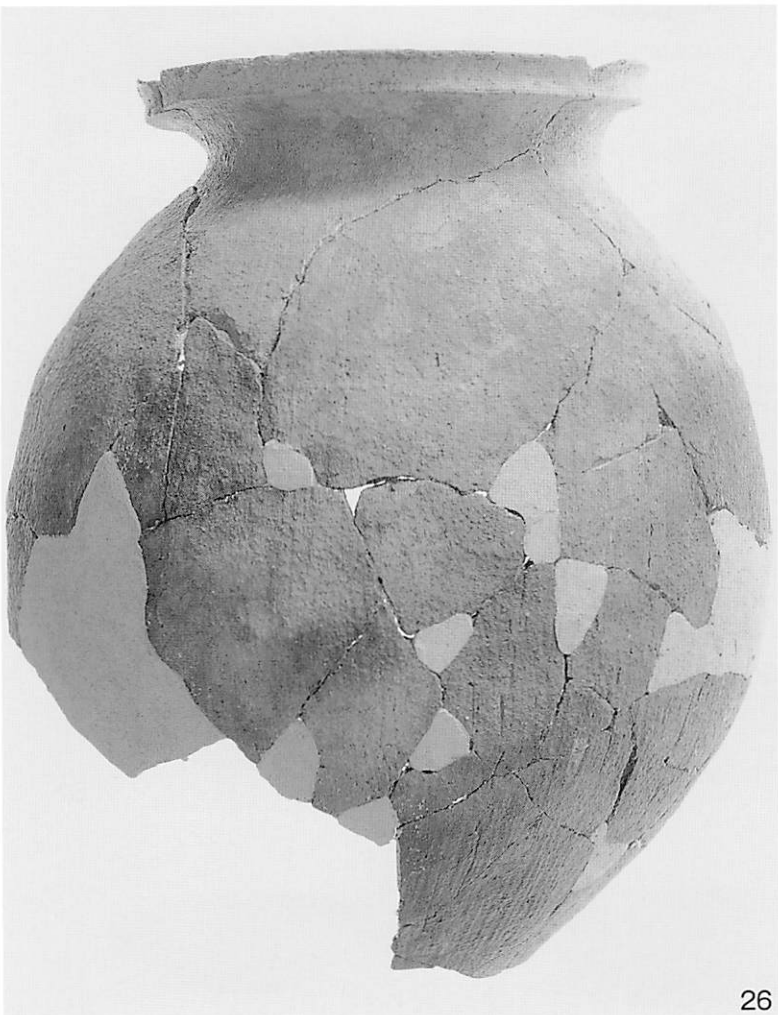

20

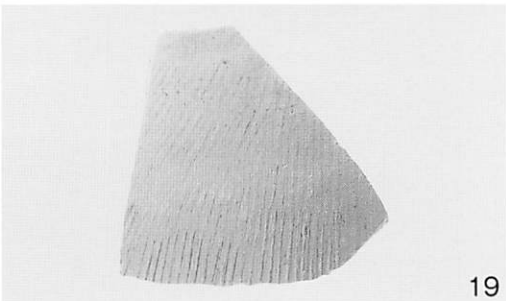

21

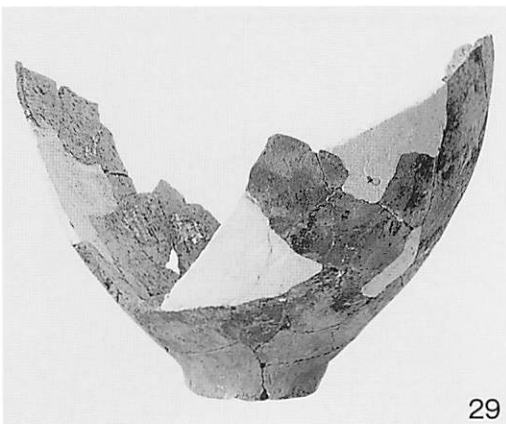

25

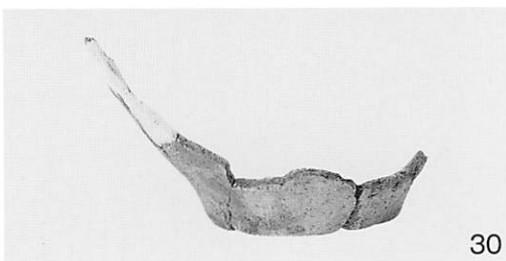

27

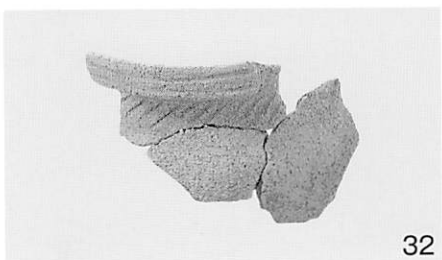

28

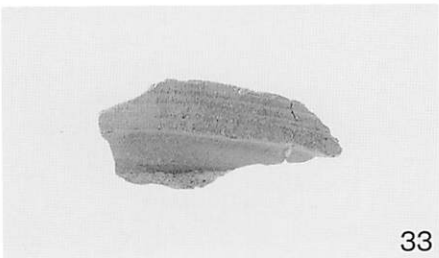

26

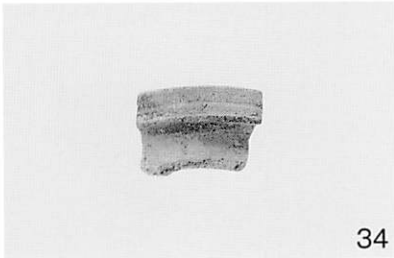

19


29

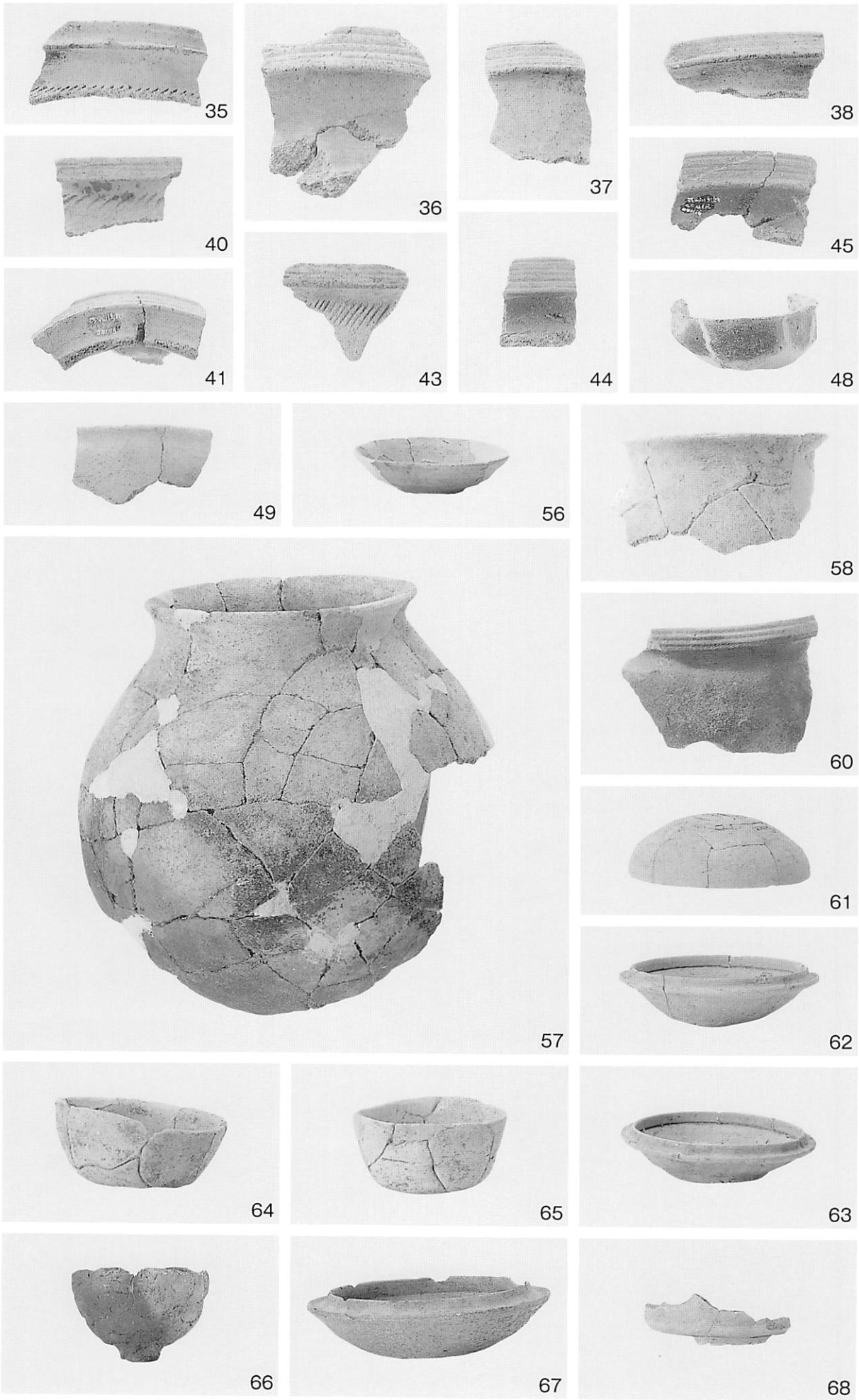

30


32

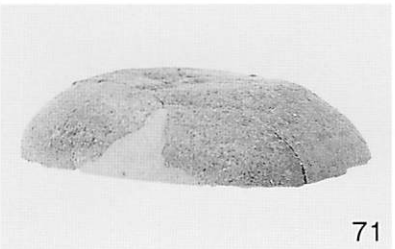

33

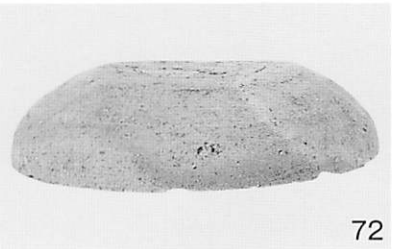

34

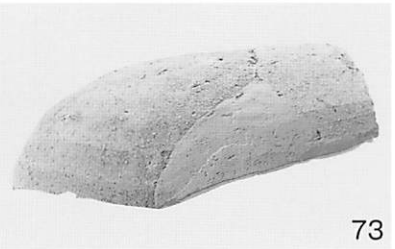
浅谷山１号遺跡出土遺物（２）



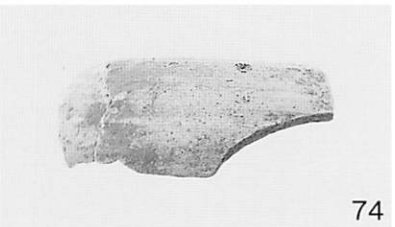
浅谷山１号遺跡出土遺物（３）

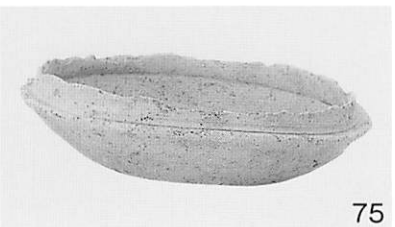

71

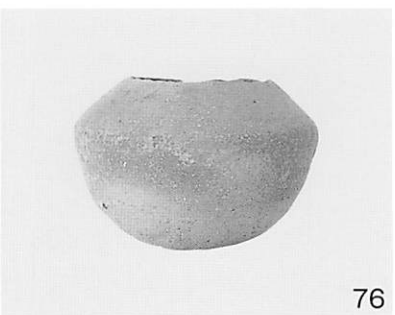

72

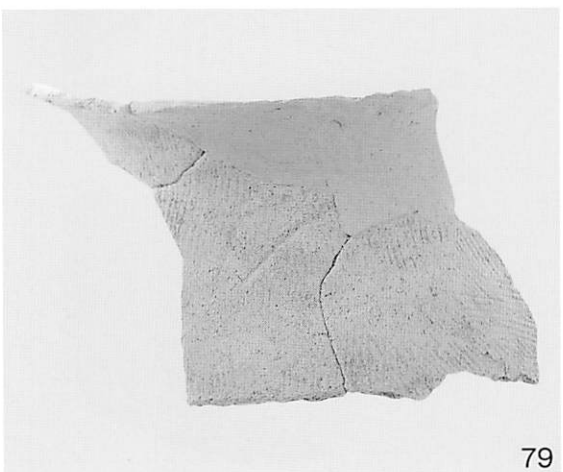

73

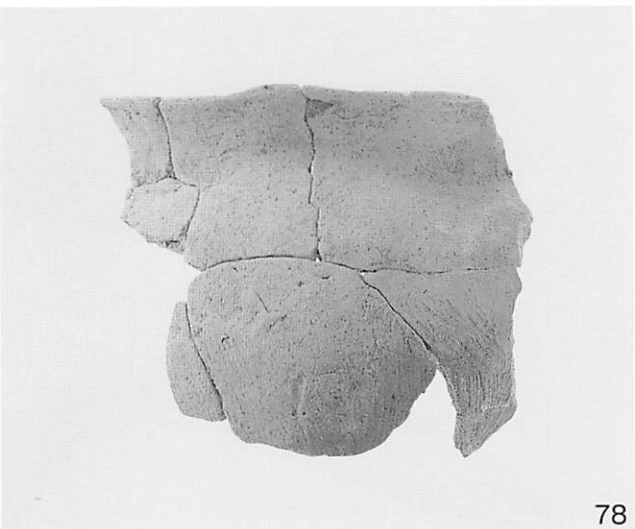
77

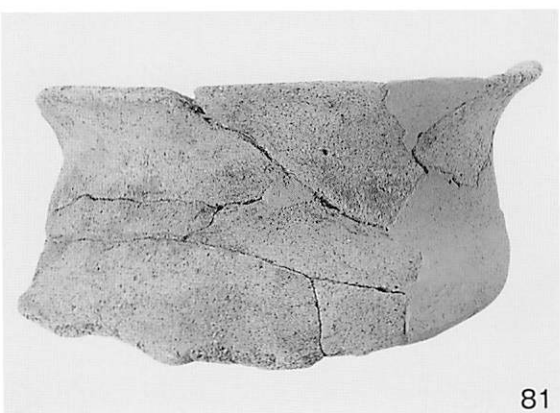

74

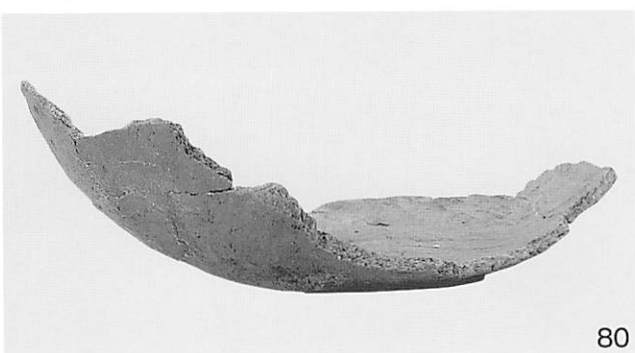

75


76

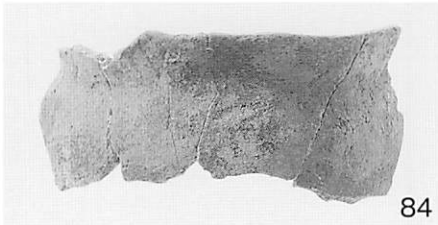

79

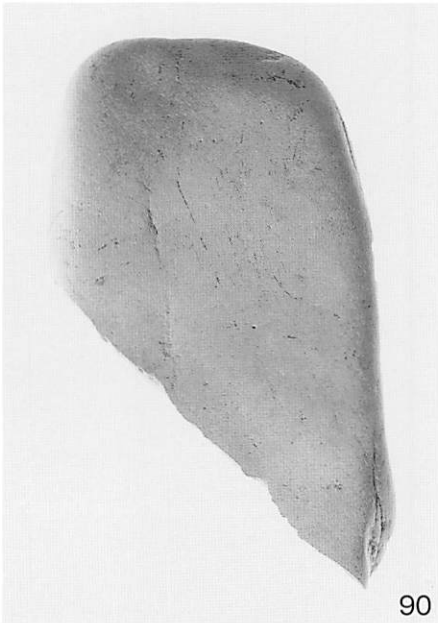

78

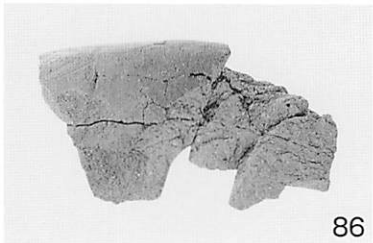

81

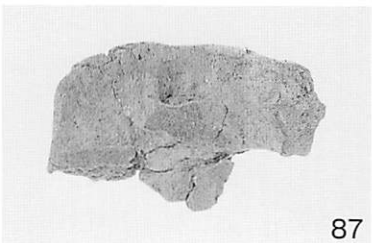

80

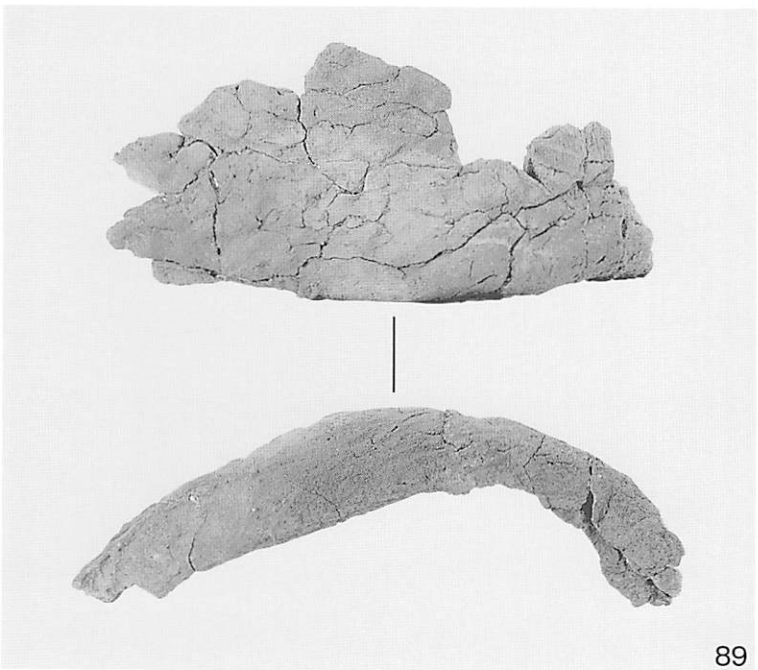
浅谷山１号遺跡出土遺物（４）

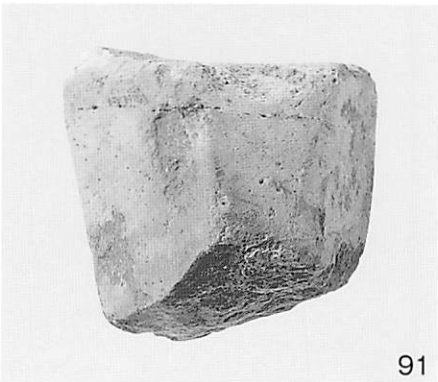


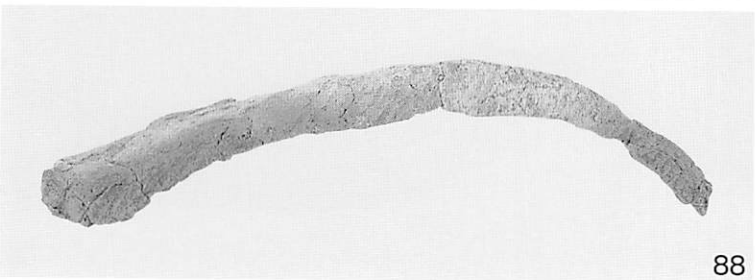


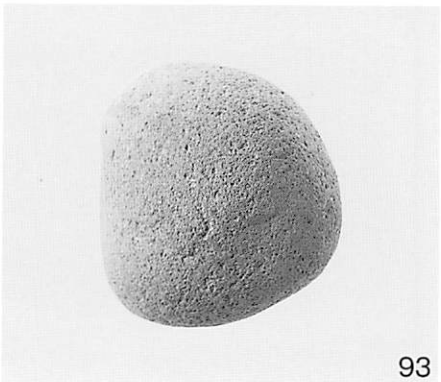












浅谷山１号遺跡出土遺物（５）

a　遠景
（南から）

b　A区東半部全景
（西から）

c　A区西半部全景
（東から）

a　B区東側全景
（東から）

b　B区中央部全景
（西から）

c　B区西側全景
（西から）

a　Ｂ区西側全景
（東から）

b　Ｃ区全景
（西から）

c　ＳＢ１土層断面
（東から）

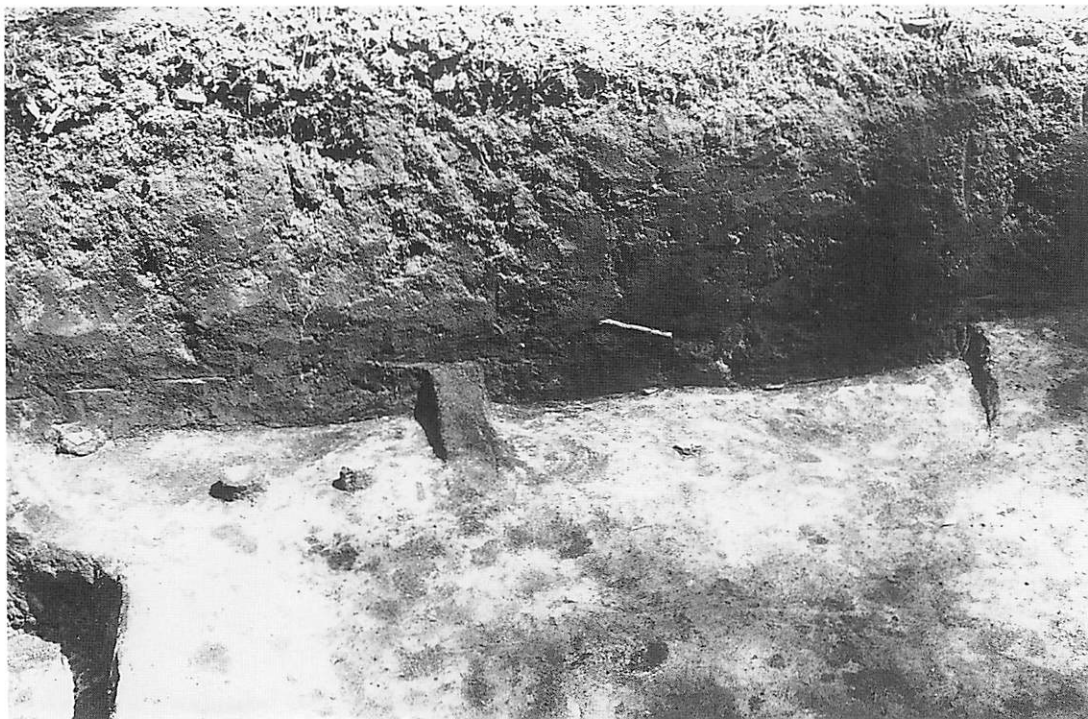
a　ＳＢ１土層断面
（南から）

b　ＳＢ１完掘
（南から）

c　ＳＢ１完掘
（東から）

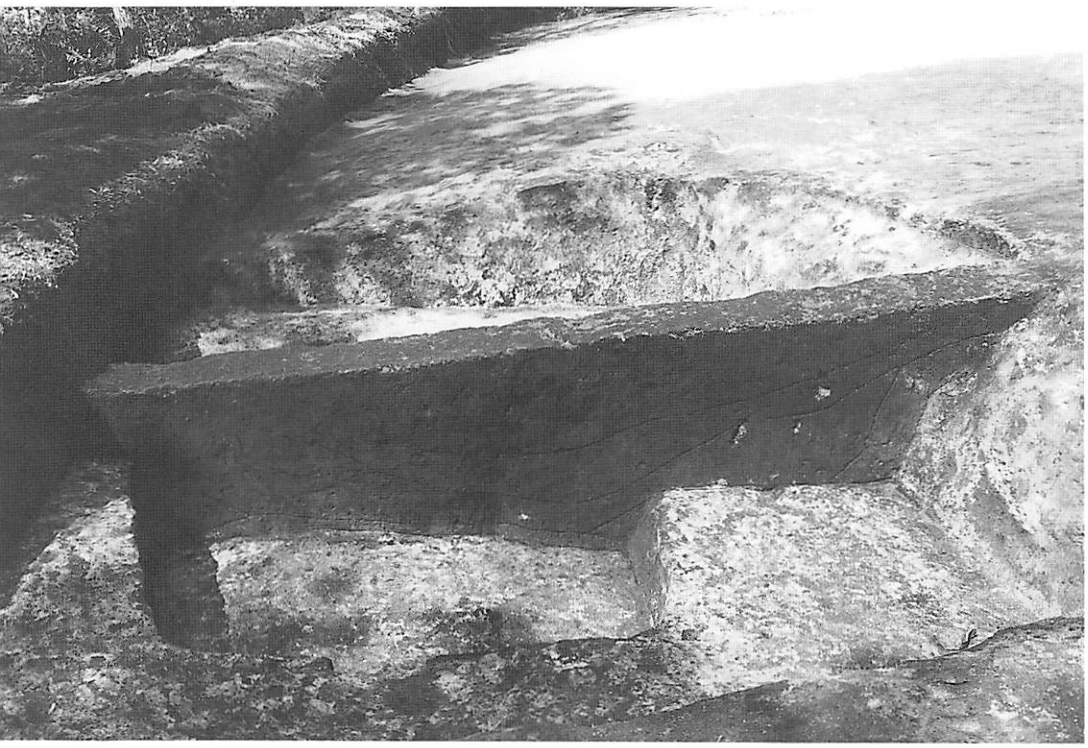
a　ＳＢ２
（南から）

b　ＳＢ３
（南から）

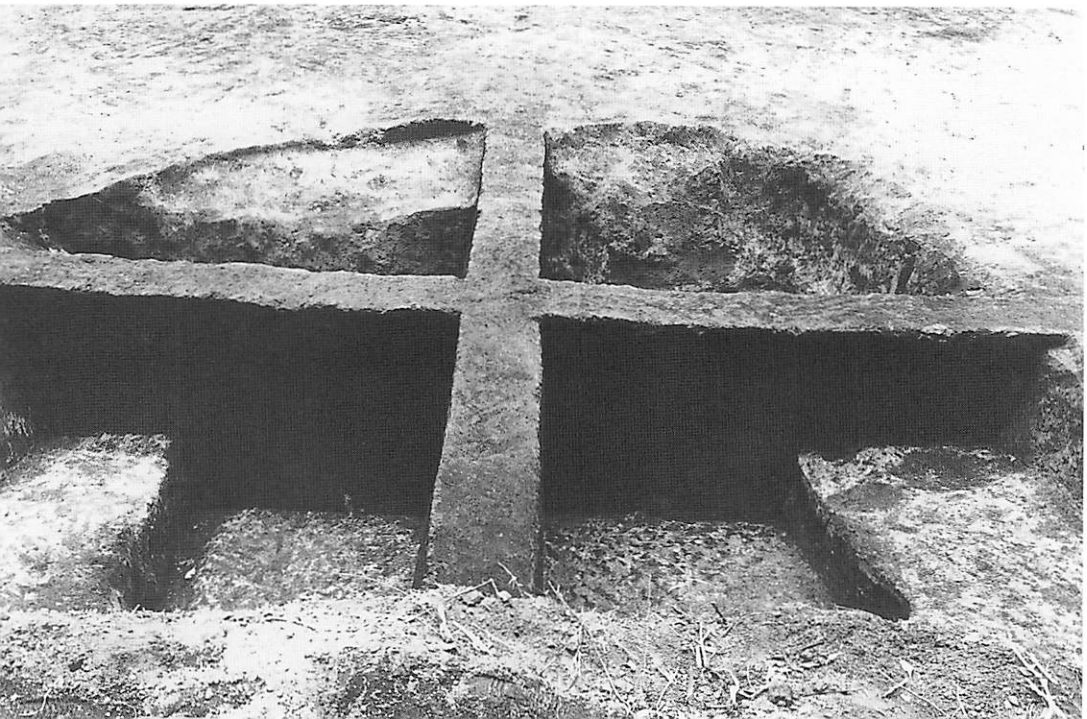


c　ＳＢ４
（南から）

a　ＳＢ５
（南から）

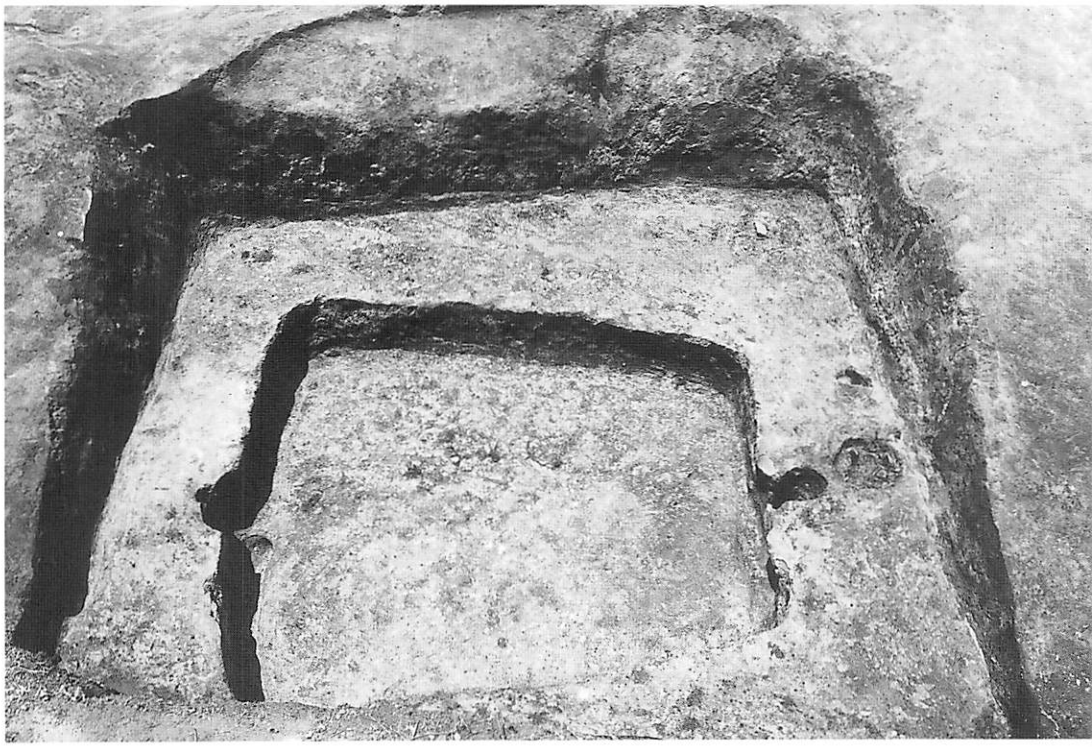


b　ＳＢ６土層断面
（東から）



c　ＳＢ６土層断面
（南から）

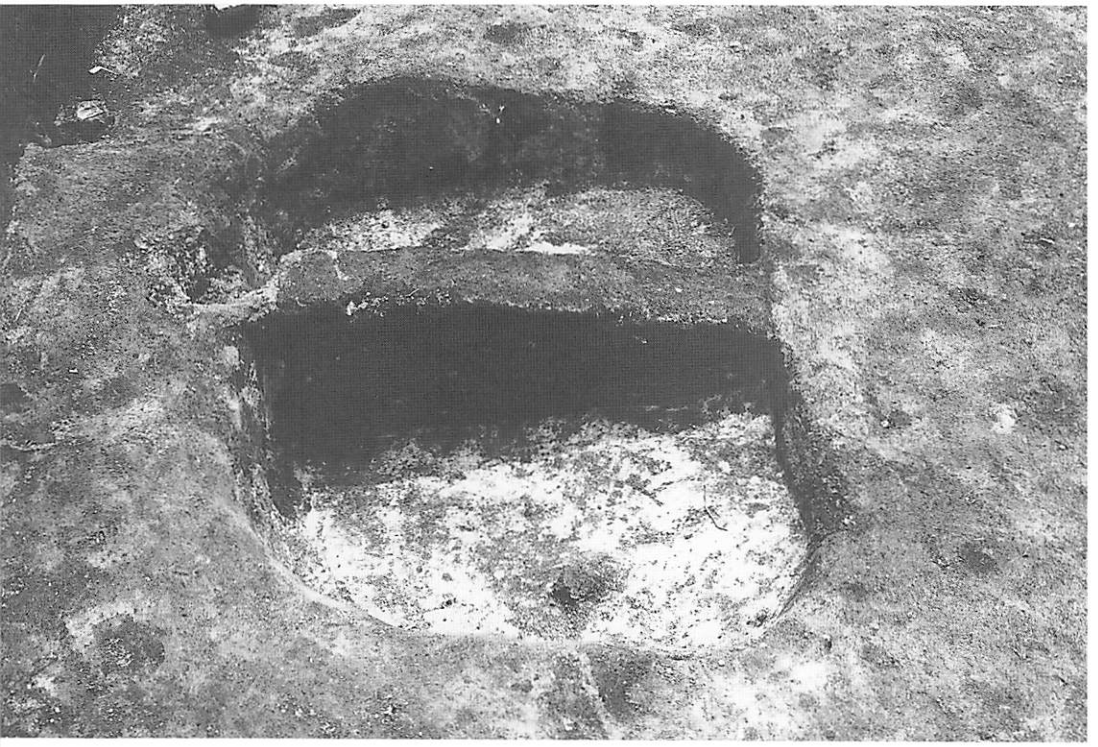
a　ＳＢ６完掘
（東から）



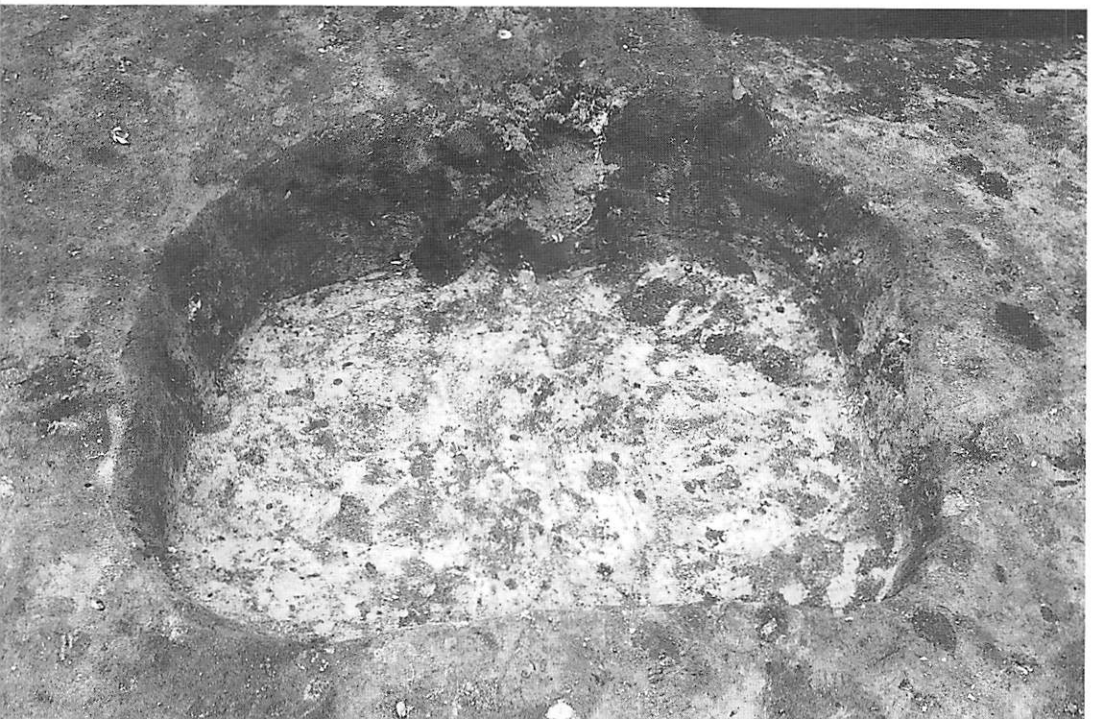
b　ＳＢ６完掘
（南から）

c　ＳＢ６完掘
（西から）

a　ＳＫ１
（南から）

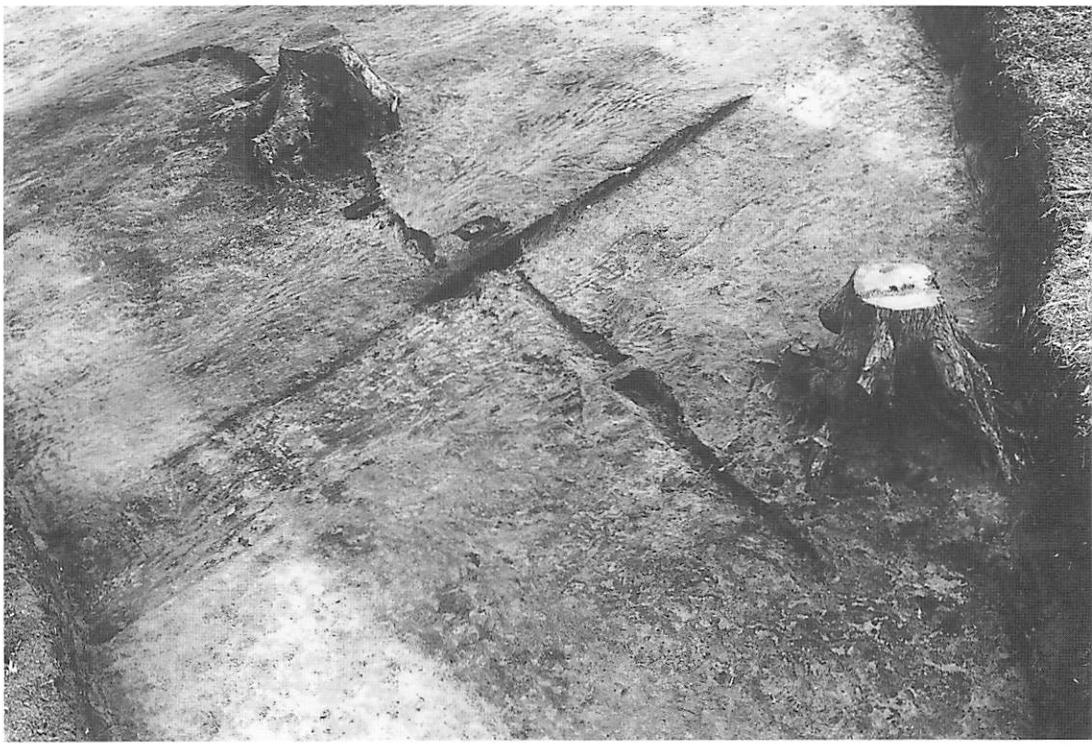


b　ＳＫ２土層断面
（東から）



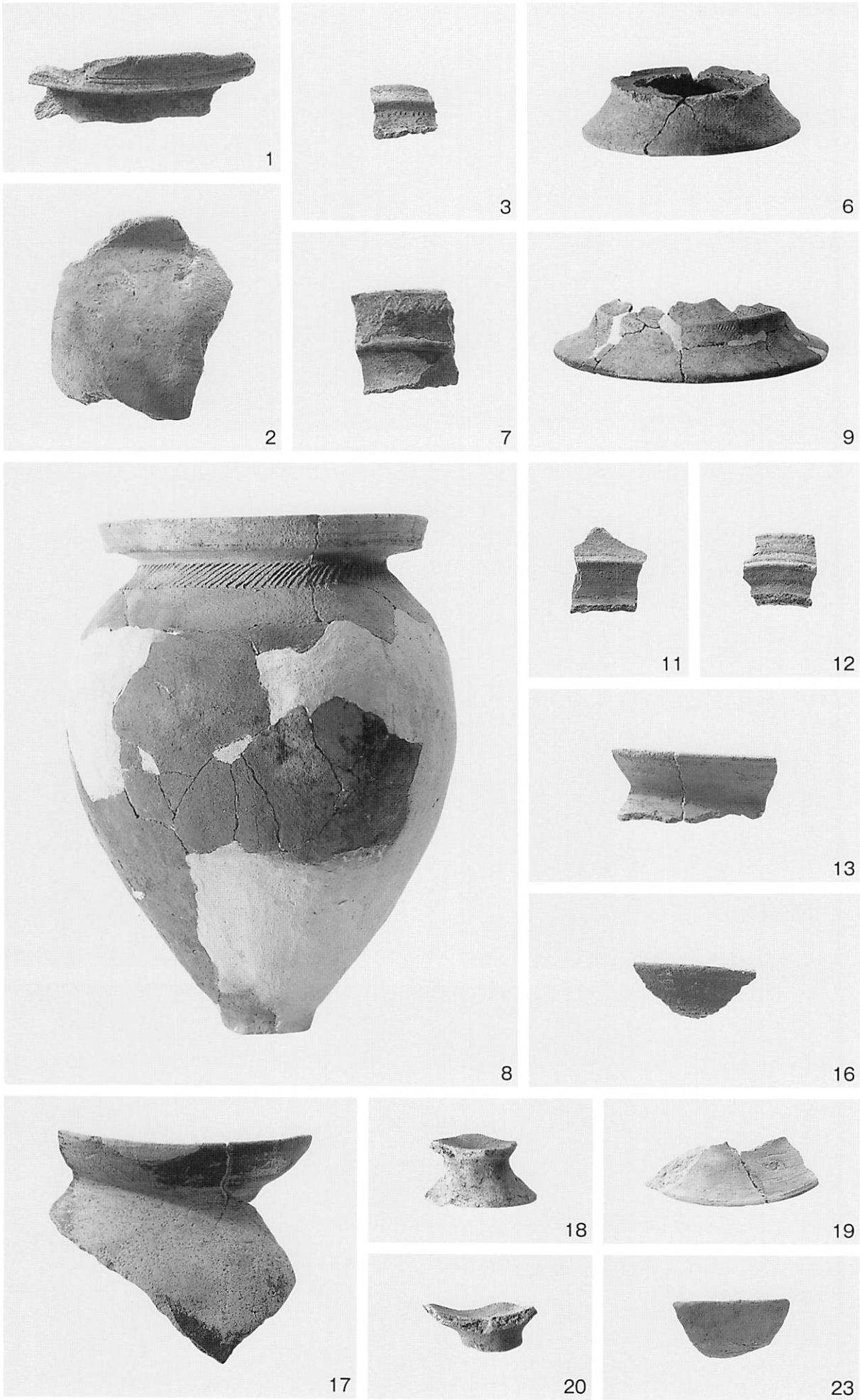
c　ＳＫ２
（南から）

a　ＳＸ１・ＳＸ２
（南西から）

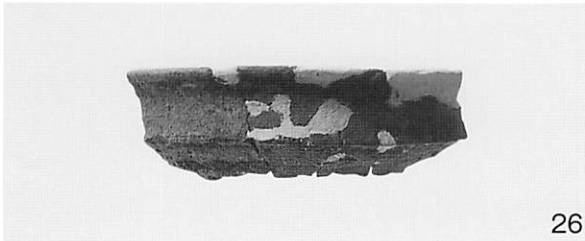


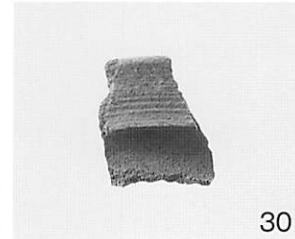
b　ＳＸ１・ＳＸ２
（南東から）

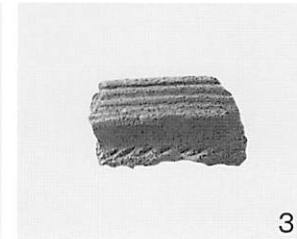
c　ＳＸ３
（南から）

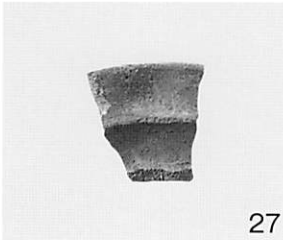


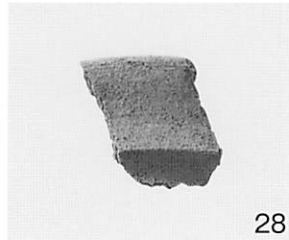
小深遺跡出土遺物（1）

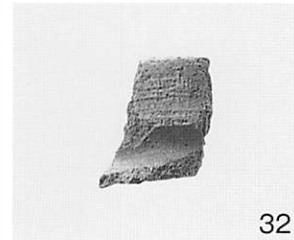

26


30


31

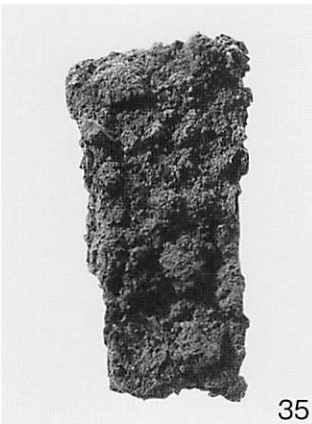

27

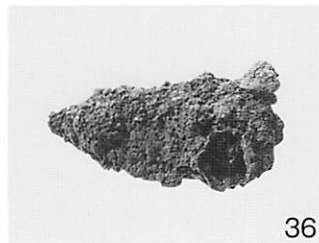

28

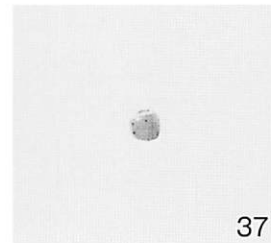

32

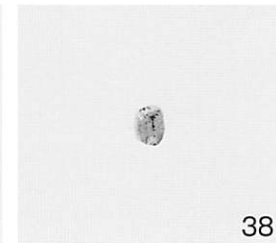
29

33


35


36


37


38

小深遺跡出土遺物（2）

報 告 書 抄 録

ふりがな	あさたにやまにしこふん・あさたにやまいちごういせき・こぶかいせき
書名	浅谷山西古墳・浅谷山１号遺跡・小深遺跡
副書名	国営備北丘陵公園整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第34集
編著者名	辻　満久
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目８番４９号　TEL082-295-5751
発行年月日	西暦２０１０年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
あさたにやまにしこふん 浅谷山西古墳	しょうばらしななつかちょう 庄原市七塚町 おおあざあさたにやま 大字浅谷山	34210	919	34° 50′ 05″	132° 59′ 13″	20040823 ～ 20041217	323	国営備北丘陵公園整備事業
あさたにやまいちごういせき 浅谷山１号遺跡	しょうばらしななつかちょうおおあざ 庄原市七塚町大字 あさたにやま　にほんぎやま 浅谷山，二本木山	34210	916	34° 50′ 05″	132° 59′ 13″	20040823 ～ 20041217	1931	
こぶかいせき 小深遺跡	しょうばらしうえはちょうおおあざ 庄原市上原町大字 こぶか 小深	34210	929	34° 50′ 52″	133° 00′ 13″	20050516 ～ 20050701	1730	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浅谷山西古墳	古墳	古墳	横穴式石室　周溝	弥生土器，土師器，須恵器，鉄器，石器	
浅谷山１号遺跡	集落跡	弥生～古墳	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，小型竪穴式石室，落とし穴	弥生土器，土師器，須恵器，石器	土器床
小深遺跡	集落跡	弥生～古墳	竪穴住居跡，土坑	弥生土器，土師器，鉄器	２本柱竪穴住居

要約		
	浅谷山西古墳	浅谷山丘陵の南西斜面に位置する横穴式石室を埋蔵施設に持つ古墳である。南に向かって開口するが，石室の石材はほとんどが抜き取られており，側石の一部がわずかに残っていた。直径は10m，高さ1.6m，周溝の幅２mの円墳で，石室は推定で長さ５m，幅1.5m，高さ1.2mほどと思われる。出土遺物から築造時期は６世紀の後半から７世紀の初頭頃と思われる。
	浅谷山１号遺跡	浅谷山丘陵の南西斜面に位置する弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡である。竪穴住居跡６，掘立柱建物跡３，土坑５，性格不明遺構６を検出した。弥生時代の住居跡は径８mの大きな住居跡である。古墳時代の住居跡は方形で四本柱である。この他に縄文時代と思われる落とし穴，古墳時代後期の小型竪穴式石室などを検出した。
	小深遺跡	庄原市街地から南西に約２km，標高317mの山から南東方向に延びる尾根の斜面に位置する。弥生時代後期から古墳時代前期頃の竪穴住居跡６，性格不明遺構３，土坑２基，その他小ピット数基を検出した。

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第34集

浅谷山西古墳・浅谷山１号遺跡・小深遺跡

国営備北丘陵公園整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日　平成22（2010）年３月31日

編　集　財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号
TEL(082)295-5751　FAX(082)291-3951

発　行　財団法人　広島県教育事業団

印刷所　大村印刷株式会社